

# 紫金山公園整備に伴う 埋蔵文化財調査報告書

(吉志部瓦窯跡、他)

平成16(2004)年3月

吹田市建設緑化部  
吹田市教育委員会

## 序 文

岸部北4丁目に所在する紫金山公園には平安宮の造営瓦窯である史跡吉志部瓦窯跡や重要文化財吉志部神社本殿、吉志部古墳など多くの歴史的な遺産が存在するとともに市内でも有数の自然林を有し、歴史環境や自然環境が市内では最も豊かな公園として市民の皆様方に親しんでいただいております。

吹田市におきましてはこの紫金山公園の整備を計画するにあたって、公園内の豊かな自然環境の中には吉志部瓦窯跡をはじめ古墳、須恵器窯跡、古代の火葬墓等多くの重要な埋蔵文化財が認められることから、これらの埋蔵文化財の状況を確認することが必要となり、関係機関との協議により調査を実施しました。本書はその調査の成果をまとめたものです。本書により本市を代表する遺跡である吉志部瓦窯跡等の調査の成果がより多くの方々に生かされ、文化財保護のための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご指導・ご協力をいただきました関係機関や地元の方々をはじめとする多くの方々に感謝申し上げます。

平成16（2004）年3月

吹田市教育委員会  
教育長 椿原正道

## 例　　言

1. 本書は吹田市建設緑化部による紫金山公園整備に伴い実施した吉志部瓦窯跡等の試掘調査及び確認調査の報告である。各調査地点は以下のとおりである。

第1次調査	平成元(1989)年度	岸部北4丁目1380、他
第2次調査	平成2(1990)年度	岸部北4丁目1388-13、他
第3次調査	平成5(1993)年度	岸部北4丁目5、他
第4次調査	平成12(2000)年度	岸部北4丁目106-1、他
2. 調査及び資料整理は吹田市教育委員会博物館文化財保護係賀納章雄、増田真木が担当した。調査及び報告書作成に係る経費は建設緑化部において予算化された。
3. 調査で出土した遺物等の整理作業は博物館(吹田市岸部北4丁目10-1)において実施し、資料の保管も同所において行っている。
4. 本書の執筆は第2章、第3章2(3)石器の項・3、第4章4は賀納、第1章、第3章1・2(1)・(2)・(4)、第4章1・2は増田、第3章2(3)、第4章3は増田・花崎晶子が執筆した。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.(東京湾標準潮位)を示す。
6. 本文中の遺物番号は図版、挿図とも統一した。縮尺については土器は1/4、瓦は1/4及び1/5、石器は3/4である。
7. 調査の実施及び資料の整理にあたっては文化庁文化財保護部記念物課田中哲夫氏、大阪府教育委員会文化財保護課堀江門也氏・瀬川健氏・芝野圭之助・大野薰氏、近畿大学大脇潔氏、東大阪市教育委員会福永信雄氏、京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏・網伸也氏、大山崎町教育委員会古閑正浩氏、堺市埋蔵文化財センター近藤康司氏をはじめ撰河泉古代寺院研究会諸氏の指導を受けるとともに、吉志部神社宮司奥田富夫氏をはじめ地元の方々の協力を受けました。記して謝意を表します。(所属等は調査当時)
8. 調査には以下の調査員、調査補助員諸氏の参加を得た。(50音順)

調査員	池田正道、大城道則、佐藤健太郎、花崎晶子、林真理子
調査補助員	岩崎康司、岡憲広、長田俊彦、落合高晴、海邊博史、木村達、桑原暢子、小久保瞳、櫻井和佳子、杉本まり子、土井淳子、十露木裕彦、福島直子、三浦知子、森小百合、森大樹、鰐淵しのぶ

## 本文目次

### 第1章 はじめに

1. 吉志部瓦窯跡調査の概要 ..... 1

2. 調査の経過 ..... 4

### 第2章 位置と環境 ..... 7

### 第3章 調査の成果

1. 第1次・3次調査 ..... 11

(1) 第1次調査 ..... 11

(2) 第3次調査 ..... 20

(3) 出土遺物 ..... 23

2. 第2次調査 ..... 23

(1) 土層序 ..... 23

(2) 各トレンチの調査状況 ..... 26

(3) 出土遺物 ..... 34

(4) 小結 ..... 43

3. 第4次調査 ..... 44

(1) 調査の経過 ..... 44

(2) 調査の成果 ..... 44

(3) 小結 ..... 61

### 第4章 まとめ

1. 第1次・3次調査 ..... 64

2. 第2次・4次調査(工房の検討) ..... 64

3. 出土瓦の概要 ..... 68

4. 吉志部瓦窯産瓦出土遺跡について ..... 74

## 図版目次

- 図版1 調査地遠景  
図版2 第1次調査(1) T1~T6調査地点近景・T1・T5  
図版3 第1次調査(2) 吉志部2号墳推定地全景・SK03  
図版4 第1次調査(3) SK01土師器皿出土状況・SK01  
図版5 第1次調査(4) T7・T12・T13・T16  
図版6 第3次調査 T50・T50土師質土釜出土状況  
図版7 第2次調査(1) T1・T2  
図版8 第2次調査(2) T2 SK02・T2 P01  
図版9 第2次調査(3) T3・T3 SK04  
図版10 第2次調査(4) T3 P02・T3瓦窓  
図版11 第2次調査(5) T4・T4 P03  
図版12 第2次調査(6) T4 P04・T4 P19・P20・P21・P22  
図版13 第2次調査(7) T5・T7  
図版14 第4次調査(1) T4 中央遺構検出状況・T4 落込み状遺構  
図版15 第4次調査(2) T4 落込み状遺構・T5 遺構検出状況  
図版16 第4次調査(3) T5 南側遺構検出状況・T5 SD2・SD3・落込み1  
図版17 第4次調査(4) T5 落込み1上面瓦検出状況・T5 南側遺構検出状況  
図版18 第4次調査(5) T6 遺構検出状況・T7 遺構検出状況  
図版19 第4次調査(6) T7 遺構検出状況・T7 SB2  
図版20 第4次調査(7) T7 SK1・SK4・SK5付近・T8 遺構検出状況  
図版21 第4次調査(8) T8 中央遺構検出状況・T8 中央遺構検出状況  
図版22 第4次調査(9) T8 SD8・T8 SD7・落込み3  
図版23 第4次調査(10) T8 SD7内瓦検出状況・T9 SK2  
図版24 第1次・2次・3次調査出土土器・石器  
図版25 第2次調査出土瓦(1)  
図版26 第2次調査出土瓦(2)  
図版27 第2次調査出土瓦(3)  
図版28 第2次調査出土瓦(4)  
図版29 第2次調査出土瓦(5)  
図版30 第2次調査出土瓦(6)  
図版31 第4次調査出土土器・石器  
図版32 第4次調査出土瓦(1)  
図版33 第4次調査出土瓦(2)  
図版34 第4次調査出土瓦(3)

## 挿 図 目 次

第1図 吉志部瓦窯跡位置図	1
第2図 吉志部瓦窯跡調査地点	3
第3図 市内の吉志部瓦窯瓦出土遺跡	5
第4図 調査地位置図	6
第5図 地形区分図	7
第6図 周辺遺跡分布図	9
第7図 第1次調査トレンチ土層図（1）	12
第8図 第1次・3次調査地点	13・14
第9図 第1次調査トレンチ土層図（2）	15
第10図 第1次調査トレンチ土層図（3）	16
第11図 吉志部2号墳推定地平面図	17
第12図 第1次調査SK01	17
第13図 SK01土師器皿出土状況	18
第14図 第1次調査SK03	18
第15図 第3次調査トレンチ土層図（1）	19
第16図 第3次調査トレンチ土層図（2）	21
第17図 第3次調査トレンチ土層図（3）	22
第18図 第1次・3次調査出土土器	22
第19図 第2次調査地点平面図	24
第20図 第2次調査トレンチ土層図（1）	25
第21図 第2次調査トレンチ土層図（2）	26
第22図 第2次調査地点上段部平面図	27
第23図 第2次調査T1・T2平面図	28
第24図 第2次調査SK02	29
第25図 第2次調査P01・P02	30
第26図 第2次調査T3・T4平面図	31
第27図 第2次調査SK04	32
第28図 第2次調査瓦溜	32
第29図 第2次調査P03・P04	33
第30図 第2次調査出土石器	35
第31図 第2次調査出土土器	35
第32図 第2次調査出土奈良時代瓦	37
第33図 第2次調査出土軒瓦（1）	39
第34図 第2次調査出土軒瓦（2）	40
第35図 第2次調査出土丸瓦・平瓦（1）	41
第36図 第2次調査出土平瓦（2）	42

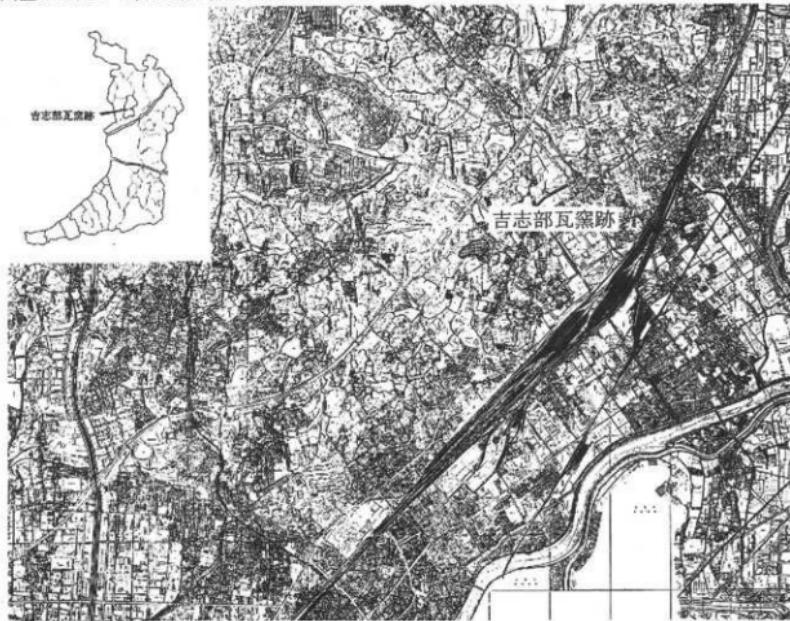
第37図 第4次調査トレンチ配置図	45
第38図 第4次調査調査区土層断面図1	46
第39図 第4次調査調査区土層断面図2	47
第40図 第4次調査T4～T9遺構平面図	48
第41図 第4次調査T4中央遺構平面図	49
第42図 第4次調査T4落ち込み状遺構平面図・西壁断面図	50
第43図 第4次調査SD2・SD3・SK3断面図	51
第44図 第4次調査T5南側遺構平面図	51
第45図 第4次調査T6遺構平面図	52
第46図 第4次調査P11・P12・P13断面図	52
第47図 第4次調査T7遺構平面図	53
第48図 第4次調査P15・SK4・SK5断面図	53
第49図 第4次調査T8中央遺構平面図	54
第50図 第4次調査T8南側遺構平面図	55
第51図 第4次調査SD7・SD8・P18断面図	55
第52図 第4次調査T9遺構平面図	55
第53図 第4次調査遺物実測図1	56
第54図 第4次調査遺物実測図2	57
第55図 第4次調査遺物実測図3	58
第56図 第4次調査遺物実測図4	60
第57図 第4次調査遺物実測図5	61
第58図 吉志部瓦窯工房全体図	65・66
第59図 吉志部瓦窯工房遺構の推移	67
第60図 軒丸瓦	69
第61図 軒平瓦	70
第62図 丸瓦・平瓦	73

# 第1章 はじめに

## 1. 吉志部瓦窯跡調査の概要

吉志部瓦窯跡は吹田市の中央東部、吹田市岸部北4丁目1338-1他に所在する。当地に所在する吉志部神社本殿付近の境内地から古瓦が出土することは古くから知られていたようであり、昭和5(1930)年に天坊幸彦氏が蓮華紋瓦や綠釉瓦の出土を報告している(『三島郡の史跡名勝天然記念物』)。昭和8(1933)年9月には登窯(昭和43(1968)年、府発掘調査におけるN3号窯)が大阪府教育委員会によって調査され、その成果の一部が新聞報道されている。

昭和16(1941)年に藤澤一夫氏は吉志部瓦窯跡が平安宮の造営瓦窯である可能性を指摘し、瓦窯跡について初めて歴史的位置付けを行った(『揖河泉出土古瓦の研究』『考古学評論』第3輯)。昭和38(1963)年には地元の研究者である鍋島敏也氏が丘陵一帯の踏査により6基の瓦窯跡の存在を確認した。その内、壁土の採土坑に露出していた瓦窯を精査して有牀構造の平窯であることを確認し、初めて瓦窯構造の様相が報告された(『古代学研究』38号1964年)。さらに藤澤氏は昭和8(1933)年の発掘調査や鍋島氏の成果を受けて、瓦窯構造の検討を行うとともに、出土した瓦から吉志部瓦窯が造営瓦窯であることを明らかにした(『日本考古学』VI 1967年)。



第1図 吉志部瓦窯跡位置図

しかし、このころから丘陵地一帯は良質の壁土の採集地として土取が盛んになり、一部の窯体が露出する事態となり、窯跡の保存対策をたてるために昭和43(1968)年に大阪府教育委員会によって初めて本格的な発掘調査が実施された。調査では平窯2基(H1・H6号窯)、登窯2基(N1・N3号窯)及び平窯群の背後を走る排水溝の発掘調査が行われるとともに、一帯のボーリング調査により平窯9基、登窯4基の計13基の窯跡の存在が確認された。

瓦窯は標高約40mの東西に伸びる丘陵の南斜面の標高27m前後に平窯9基を、標高37m前後に登窯4基を配置している。平窯(H1号窯)は半地下式有牀平窯(報告では有棧道式平窯)で全長5m、焼成室は奥行1m、幅2mの長方形をなす。H1号窯とH6号窯の構造の検討から、各平窯は約15m間隔で配置され、規格性の高いものであることが明らかとなった。また、H6号窯の焚口に接して施釉陶器の1次焼成に使用された可能性のある平面逆三角形の窯状遺構を確認している。登窯のN1号窯は全長6m、幅1.3mの半地下式有階有段式登窯であり、焼成部の床面には一面に平瓦の細片が敷き詰められており、縁袖の点滴が認められたことから、本窯で縁袖陶器の焼成が行われていたことが確認された。

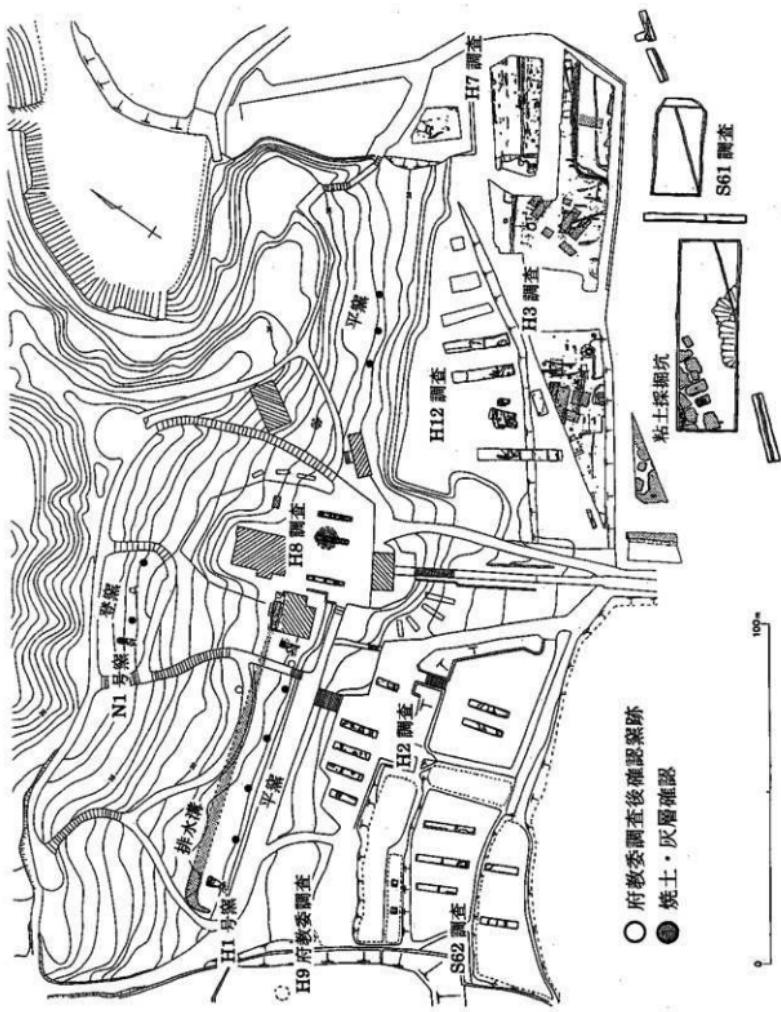
調査概報において藤澤氏は本瓦窯が平安宮への供給瓦窯でありながら、『延喜式』の撰録に漏れることから、小野・栗栖野瓦窯跡に先行する平安宮創建時の急時の大量需要に対応するための臨時的な瓦窯と位置付けた。また、窯跡以外には造瓦工房と考えられる遺構は確認されておらず、丘陵一帯の詳細な調査の必要性が指摘された(大阪府教育委員会『岸部瓦窯跡発掘調査概報』1968年)。この発掘調査後、遺跡の重要性に基づき、昭和46(1971)年6月に国の史跡に指定され、史跡公園として整備された。

この整備工事中に調査では確認されていなかった地点において、新たに2基の窯跡の一部が確認された。新たな窯の存在が確認されたことにより瓦窯の配列がより複雑な様相を示すことが考えられたが、確認された窯が古式な様相を示すものであることから新たな問題が提起された。その後、昭和47(1972)年の吉志部古墳の調査においても調査トレンチの一部で瓦、灰の堆積層が確認されており、さらに新たな窯の存在も想定された。また、昭和50(1975)年にはH6号窯に東接する地点において社務所の改築に伴い発掘調査が実施され、平窯群の背後に走る排水溝の延長部分を確認した。

史跡指定後は一帯では大規模な開発もなく、本格的な調査が行われることもなかったが、昭和61(1986)年度に史跡南側の府営岸辺住宅の建替に伴う発掘調査において粘土採掘坑と考えられる土坑群を確認し、府営住宅北側における試掘調査で瓦製作のための回転台跡と考えられる遺構を確認し、瓦窯の前面部分に工房関連遺構が展開していることを確認した。

また、府営住宅建替に伴う調査では多量の七尾瓦窯焼成の瓦が確認され、吉志部瓦窯の一部に七尾瓦窯の工房も重複して存在する可能性が考えられた(『昭和61年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、大阪府建築部他『吉志部瓦窯跡』1987年)。平成2(1990)年度には東方の平窯群の前面部分における調査で柱穴、土坑、回転台跡等の遺構を確認した(本書報告)。

平成3(1991)年度及び7(1995)年度には瓦窯群南側で都市計画道路に伴う発掘調査を実施し、



第2圖 吉志部瓦窯跡調查地點

吉志部瓦窯関連の遺構として2時期以上の建替が認められる掘立柱建物15棟、回転台跡9基、土坑15基、粘土探掘坑11基、窯状遺構1基を確認した。この調査により吉志部瓦窯工房は瓦窯を含めて、南北190m、東西280m以上の範囲に展開することが明らかとなった。また、工房跡の発掘調査では奈良時代、七尾瓦窯操業期の井戸、土坑等の遺構を確認するとともに七尾瓦窯産の瓦も出土していることから、七尾瓦窯工房についても吉志部瓦窯工房に一部重複し東西300m近くに及ぶ可能性が考えられ、丘陵部分には窯の存在も考慮することが必要となった（吹田市都市整備部他『吉志部瓦窯跡（工房跡）』1998年）。

平成8（1996）年度には重要文化財に指定された吉志部神社本殿（平成5（1993）年指定）の防災工事に伴う確認調査を実施し、本殿前面部分において2次堆積ではあるが吉志部瓦窯瓦を含む焼土層を確認した。

平成9（1997）年度には、史跡指定範囲の西側に隣接する地点において大阪府教育委員会により試掘調査が行われ、1ヶ所の調査区で2条の溝状遺構が検出されるとともに、溝内から平安時代の軒平瓦を含む瓦片が出土しており、さらに西側にも遺構の展開することが明らかとなった（大阪府教育委員会『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報2』1999年）。

吉志部瓦窯跡以外では市史編纂事業による資料調査で、吉志部瓦窯跡南方2.3kmの高浜町に所在する高浜神社で昭和11年に社務所改築に際して出土したと伝えられる瓦の調査で、1点が吉志部瓦窯産の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦であることが明らかとなった（『吹田市史』第8巻1981年）。また、昭和56（1981）年に実施した都呂須遺跡及び昭和63（1988）年に実施した高浜遺跡の調査で中世包含層の出土ではあるが、吉志部瓦窯産と考えられる平瓦を確認しており、高浜神社周辺において比較的まとまって吉志部瓦窯産の瓦の出土が確認されている（『昭和63年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』・『文化財紀要』1989年）。その他にも昭和56（1981）年に大阪府教育委員会によって実施された垂水南遺跡（垂水町3丁目）の発掘調査で平安時代の河跡から吉志部瓦窯産の軒平瓦の出土が確認されている（大阪府教育委員会『節・香・仙』第40号1986年）。

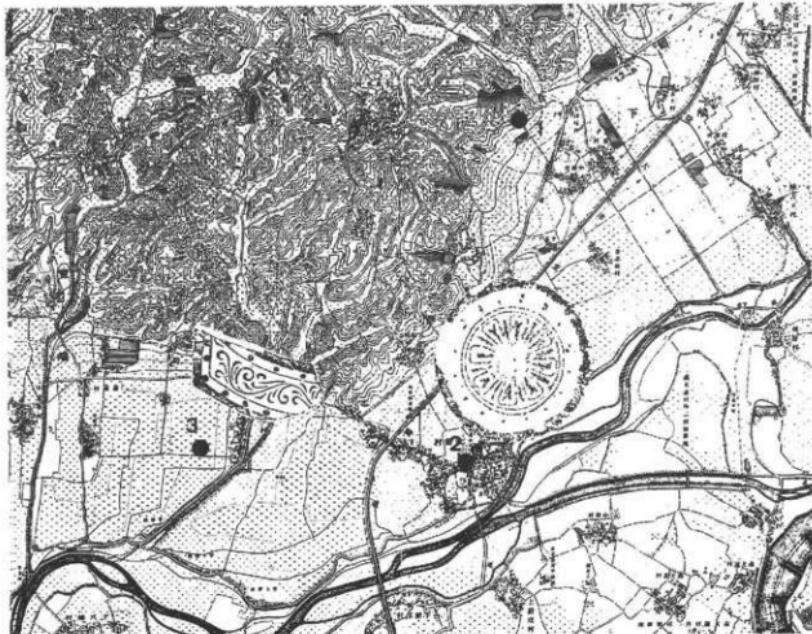
## 2. 調査の経過

現在、吉志部瓦窯跡の一帯は本市において数少ない自然緑地としての環境に恵まれ、さらには須恵器窯跡、古墳、古代火葬墓等の遺跡も多く、歴史的にも重要な地域である。吹田市においては、この地域の歴史及び自然環境の保全を目的とした総合公園としての整備を計画し、史跡範囲を含む形での計画を文化庁及び大阪府教育委員会等の関係諸機関と協議を行いながら、昭和63（1988）年2月29日に都市計画公園（紫金山公園）としての計画決定がなされた。

公園整備の計画に当たっては史跡範囲及びその隣接地であることから、市教育委員会では基本計画の段階から建設部緑化公園事務所（当時）と協議を開始し、文化財に影響を与えることのないように計画を進めるよう協議を行い、平成元（1989）年度から園路等に係る文化財の包蔵状況の確認のための試掘調査を開始した。

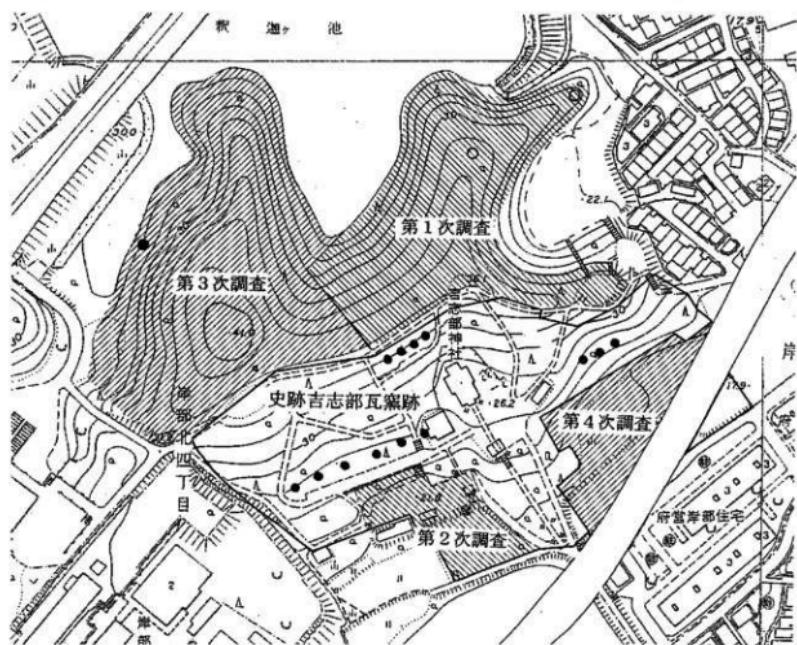
平成元(1989)年度は史跡範囲に北接する尾根及び谷部において園路整備予定地点等について調査を実施した(第1次調査)。調査は平成2(1990)年2月13日～3月31日にかけて、史跡指定範囲北東の北西に伸びる尾根及びその南側の東に伸びる尾根上に調査トレンチ24ヶ所を設定するとともに、吉志部2号墳及び3号墳推定地点において調査を実施した。吉志部2号墳・3号墳は昭和56(1981)年に後世に両斜面を削り取られた丘陵の突端部及び南斜面の40m隔てた2地点で埴輪及び壺、器台といった古式の須恵器が採集されたことにより2基の古墳の存在が推定され、昭和57(1982)年度に古墳の実態を確認するための試掘調査を実施したが、調査範囲等が限定されたために十分な把握ができなかったことから、今回改めて調査を行ったものであり、2号墳推定地において面的な調査を実施した。面積は計325m<sup>2</sup>である。

平成2(1990)年度は史跡範囲内の南西部の遺構の活用を図る整備の計画を文化庁、大阪府教育委員会、緑化公園事務所との協議を行う中で、史跡内では瓦窯跡の調査が行われたのみで、他の遺構の展開状況は明らかではなかったことから、埋蔵状況を確認するための調査を実施することとし、平成3(1991)年1月19日付で試掘調査のための現状変更の許可を申請し、平成3(1991)年2月22日付で許可の通知を受けて調査を実施した(第2次調査)。平成3(1991)



1. 吉志部瓦窯跡 2. 高浜遺跡 3. 垂水南遺跡

第3図 市内の吉志部瓦窯瓦出土遺跡 (S=1:40000)



第4図 調査地位置図 (S=1:2500)

年 2月 22日～3月 30日にかけて、史跡指定範囲内の南西部分、平窯群西半部の前面に当たる地点に調査トレンチを7ヶ所設定して調査を実施した。調査面積は計143 m<sup>2</sup>である。

平成5(1993)年度は、第1次調査と同様に史跡範囲に北接する尾根及び谷部において園路整備予定地点等について調査を実施した(第3次調査)。平成5(1993)年11月15日～12月24日にかけて、史跡指定範囲北西の北に伸びる尾根上及び谷部の平坦地に調査トレンチを51ヶ所設定して調査を実施した。調査面積は計331.5 m<sup>2</sup>である。

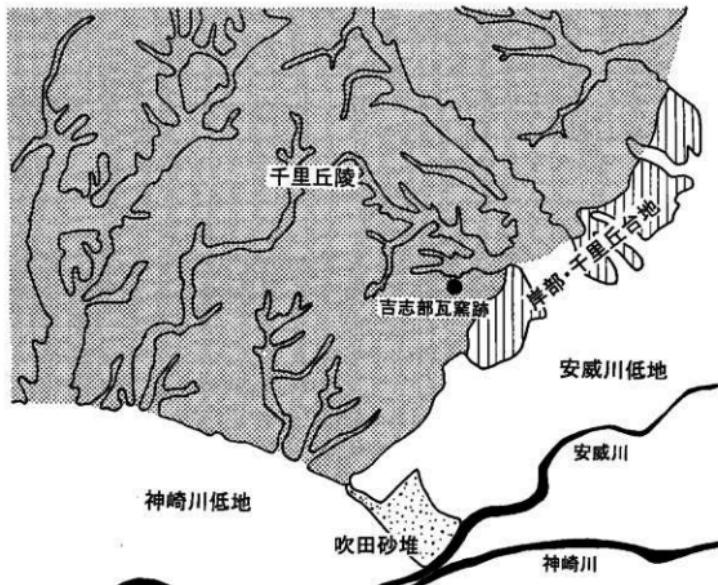
平成12(2000)年度には史跡東南部に南接する地点において調査を実施した(第4次調査)。平成12(2000)年7月24日～8月29日にかけて、調査トレンチを9ヶ所設定して調査を実施した。調査面積は計332 m<sup>2</sup>である。現地における調査終了後の平成13(2001)年度に出土遺物の整理等報告書の刊行作業を博物館において行った。

## 第2章 位置と環境

吹田市の地形は、その北側と南側とで大きく2つに分かれます。市域南部については、完新世以降、安威川・神崎川をはじめとする河川の沖積作用によって形成された平野部が主として広がり、JR吹田駅付近から南側にかけては吹田砂堆が微高地としてあります。市域北部については、未固結の砂礫・粘土層からなる大阪層群の隆起によって形成された千里丘陵が占めています。千里丘陵は、吹田市・豊中市・箕面市・茨木市にまたがり、東西約10km、南北約8kmにわたって広がる全体的になだらかな丘陵で、概して丘陵の西側が急傾斜で、東側が緩やかとなっています。

また、吹田市は、古代の郡制でみると、市域の大部分が嶋下郡の郡域にあったが、市域南西部の垂水・江坂地区については豊嶋郡に属し、市域は嶋下郡と豊嶋郡の2郡にまたがる形となっている。

さて、吉志部瓦窯跡はかつての嶋下郡にあり、吹田市岸部北4丁目に所在する吉志部神社を中心に現在も里山として樹木が残る千里丘陵の東側縁辺部に位置する。窯は、南向きの傾斜地上に構築されており、これまでに大阪府教育委員会の調査によって平窯9基、登窯4基の存在



注) 土質工学会関西支部・関西地質調査業協会編『新編大阪地図』付図2微地形区分図を基に作成。  
また、地形名は「吹田市史第1巻」による。

第5図 地形区分図

が確認されている。平窯は、標高 26~27m付近に吉志部神社本殿をはさんで東側に 3 基、西側に 6 基が並ぶ。登窯は、本殿の北西側上方の標高 36~37m付近に並ぶ。また、大阪府教育委員会や本市教育委員会が行ったこれまでの発掘調査によって、窯の南側においてその工房跡が展開していることが確認されている。

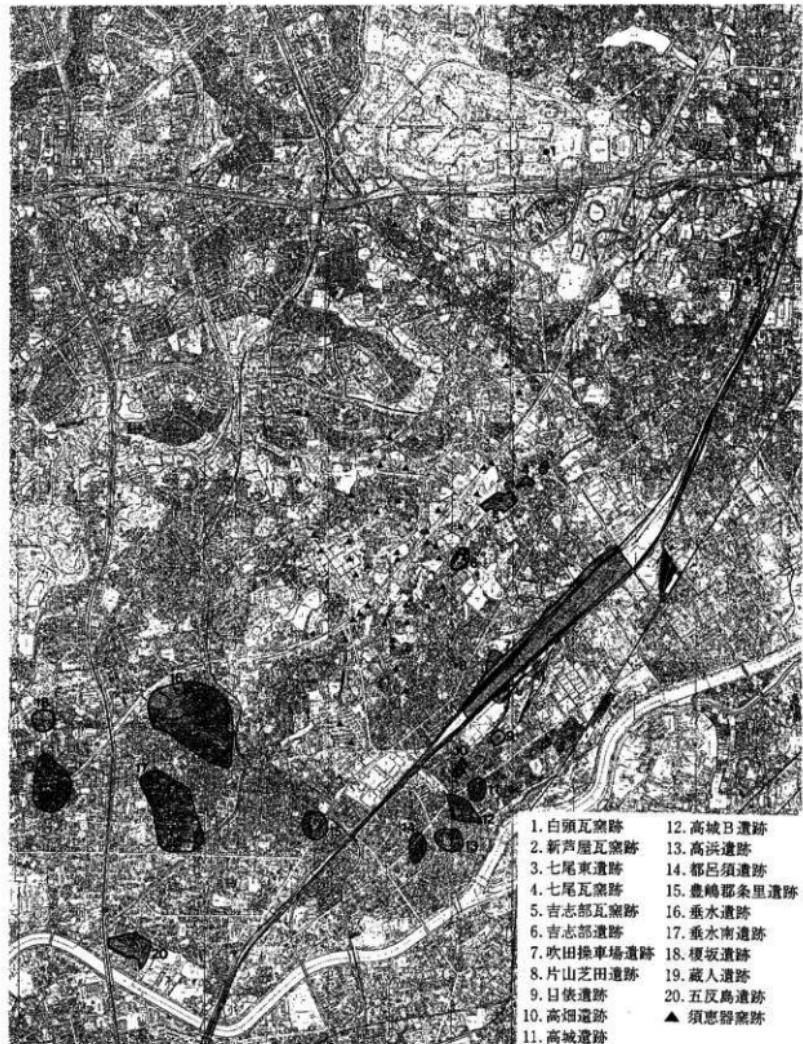
吉志部の地において瓦作りが行われたのは、丘陵という土地条件がまず第一にあり、そこで瓦作りに適した良質の粘土を得ることができ、窯の構築に適した斜面地があつたことによると考えられる。また、吉志部瓦窯跡の東方約 200m の地点には、後期難波宮に瓦を供した七尾瓦窯跡があり、これも千里丘陵の土地条件の利点を生かして操業されたものと考えられる。そして、吉志部瓦窯工房跡からは、七尾瓦窯で焼かれた瓦やその時期の土師器や須恵器などの遺物とともに遺構も検出されており、吉志部の地では、七尾瓦窯操業段階において既に瓦生産に関する何らかの機能を果たしていたものと考えられている。

このように、吉志部瓦窯跡と七尾瓦窯跡においては古代に宮都へ向けての瓦生産が行われたが、吹田には他にも千里丘陵上において瓦窯跡とみられる遺跡が存在する。万博公園にある白頭瓦窯跡は、日本万国博覧会の会場内の分布調査に伴い発見され、大阪府教育委員会の調査により白鳳時代の瓦が検出されている。この瓦窯跡は、茨木市に所在する穂積磨寺との関係が考えられている。また、新芦屋下においては、千里丘陵の縁辺部で工場の建設工事に際して平安時代の瓦が発見されている。その詳細については明らかではないが、瓦窯跡もしくは寺院跡の可能性が考えられており、現在のところ新芦屋瓦窯跡として周知されている。

また、千里丘陵においては、瓦の生産が始まるより以前から、須恵器の生産が盛んに行われていた。須恵器窯跡の展開は吹田市と豊中市にまたがって認められるが、豊中市側での須恵器生産は 5 世紀末から増え始め、6 世紀前半にピークをむかえる。そして、吹田市側においては、6 世紀前半から生産が増え、6 世紀後半にピークとなるが、吹田市では、初期須恵器の窯である吹田 32 号須恵器窯跡をはじめとして、これまでに 56 か所で須恵器窯の存在が確認されている。これらの須恵器窯の展開も千里丘陵の存在があったがゆえであり、古代の吹田は、千里丘陵の存在を基盤にして一大窯業地という性格を有していた。

さて、再び吉志部瓦窯跡に目を向けると、吉志部瓦窯跡においては、先述した吉志部瓦窯操業期と七尾瓦窯操業期の遺構・遺物のほか、旧石器時代と平安時代後期、そして中世の遺構・遺物も確認されている。

旧石器時代の遺構・遺物では、国府型ナイフ形石器や翼状剥片をはじめとする旧石器とともに礫群が検出されている。吹田市では、垂水遺跡や吉志部遺跡、目俤遺跡、高城遺跡、吹田操車場遺跡などで旧石器時代の遺物が確認されているが、吉志部瓦窯跡の南西約 400m の地点にある吉志部遺跡においても、ナイフ形石器などの旧石器とともに礫群が検出されている。また、吉志部瓦窯跡では、旧石器時代の遺構・遺物のほか、縄文時代の石器類が少量ながら検出されており、吉志部瓦窯跡周辺を見渡すと、吉志部遺跡で縄文草創期の有舌尖頭器の出土があり、七尾瓦窯跡においても縄文草創期の尖頭器未成品や縄文晚期の土器片が検出されている。また



第6図 周辺遺跡分布図 (S=1:40000)

七尾瓦窯跡の北東側約70mの地点にある七尾東遺跡においても縄文晩期の土器片が検出されている。

次に、平安時代後期の遺構・遺物についてであるが、吉志部瓦窯跡では掘立柱建物跡が13棟分確認されており、吉志部神社や吉志部の地に經營された吉志荘との関連が推測されている。また、中世では、当瓦窯跡が所在する条里地割（嶋下郡南部条里）に沿う形で耕作関連のものとみられる溝が検出されている。

平安時代以降、吹田では、東寺領垂水莊や春日社領垂水牧などをはじめとする莊園經營が盛んとなり、中世にかけて耕地開発が活発となる。そして、莊園や農業經營に関わるとみられる遺跡が多くある。垂水南遺跡では、「垂庄」や「中庄」と墨書きされた平安時代初頭の土師器が出土しており、東寺領垂水莊の經營初期段階に関連する資料として特記される。さらに、吉志部瓦窯産の軒平瓦が1点出土していることでも注目される。榎坂遺跡では、綠釉陶器や青磁、白磁、牛馬骨などが多数検出されており、榎坂遺跡の範囲を含めて展開した春日社領垂水西牧との関連も考えられている。また、藏人遺跡は、応永10年（1403年）の「春日社領榎坂郷名主百姓等申状案」にその名が初見される藏人村との関連が考えられている。さらに、豊嶋郡条里遺跡では、豊嶋郡条里地割の東限を示す中世の溝が検出されており、この他、平安時代の良好な遺物を多数検出し、祭祀的様相を強く示す五反島遺跡もこの時期の吹田を考える上で重要な遺跡である。

これらの5遺跡はともに豊嶋郡にあるが、吉志部瓦窯跡の所在する嶋下郡の遺跡では、平安時代後期の建物跡を検出した高城B遺跡や片山芝田遺跡をはじめ、高城遺跡、高浜遺跡、都呂須遺跡、高畠遺跡、目俵遺跡、吹田操車場遺跡などが平安時代から中世にかけての代表的な遺跡として上げられる。このうち、目俵遺跡では、地形的制約を受けつつも、一部嶋下郡南部条里地割に沿うような形での平安時代末から中世にかけての耕作地の区画跡が検出されている。また、吹田操車場遺跡においても、大阪府文化財調査研究センターが行った調査で嶋下郡南部条里地割を踏襲する古代から中世にかけての畦畔等が検出されている。そして、吹田操車場遺跡では、吉志部瓦窯と七尾瓦窯の瓦が出土しており、この他、高浜遺跡と都呂須遺跡においても、吉志部瓦窯で焼かれた瓦の出土があり、吉志部瓦窯跡との関係が注目される。

### 第3章 調査の成果

#### 1. 第1・3次調査（史跡北側尾根の調査）

##### （1）第1次調査

###### 尾根上設定トレンチ

吉志部1号墳東方の西から東へ伸びる尾根上には吉志部1号墳との位置関係や立地等から古墳の存在が考えられたために標高34m前後及び標高30m前後で2段に平坦化されている尾根頂部に6ヶ所（T1～T6）、その尾根の北側の南西から北東に伸びる尾根は吉志部2号墳推定地点から北及び東に尾根が分れて伸び、吉志部2号墳推定地点までの尾根上に3ヶ所（T7～T9）トレンチを設定した。

T1～T4の堆積状況は全体に堆積は浅く、現地表下10～45cmで地山層である白色粘土層を確認した。堆積層は砂質土及び粘質土や地山の2次堆積層と考えられる白灰色粘土の堆積が認められるが、地山直上層まで現代の陶磁器やガラス瓶等が出土しており、造成に伴う近時の堆積層と判断された。T5・T6では地山上層において、地山層の2次堆積層と考えられる白灰色粘質土の層厚50cm程の堆積が認められるが、やはり現代の陶磁器等が出土しており、近時の造成に伴う堆積層である。

T7～T9は現地表下10～40cm程で地山層を確認し、堆積層の黄褐色粘質土も近時の堆積層であり、尾根頂部は削平されているものと判断された。以上のように尾根頂部に設定したトレンチにおいては近時に地山層自体が削平を受けて造成されており、明確な遺構や遺物の出土は確認されなかった。

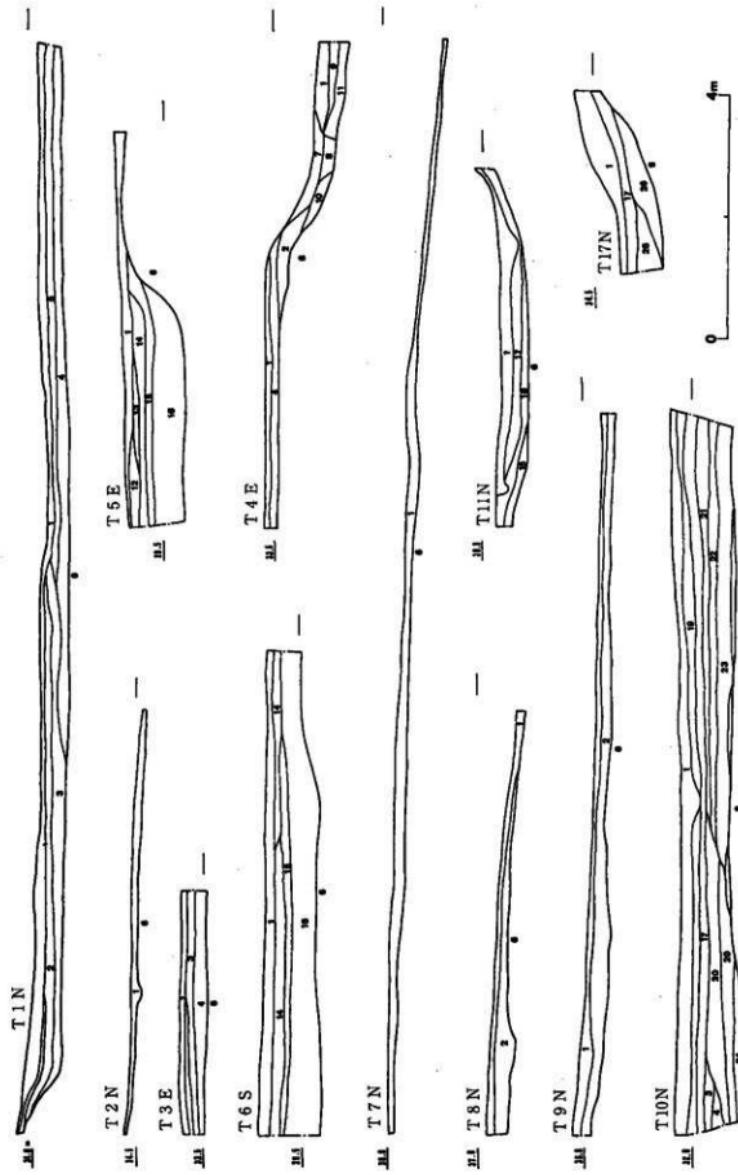
###### 尾根斜面設定トレンチ

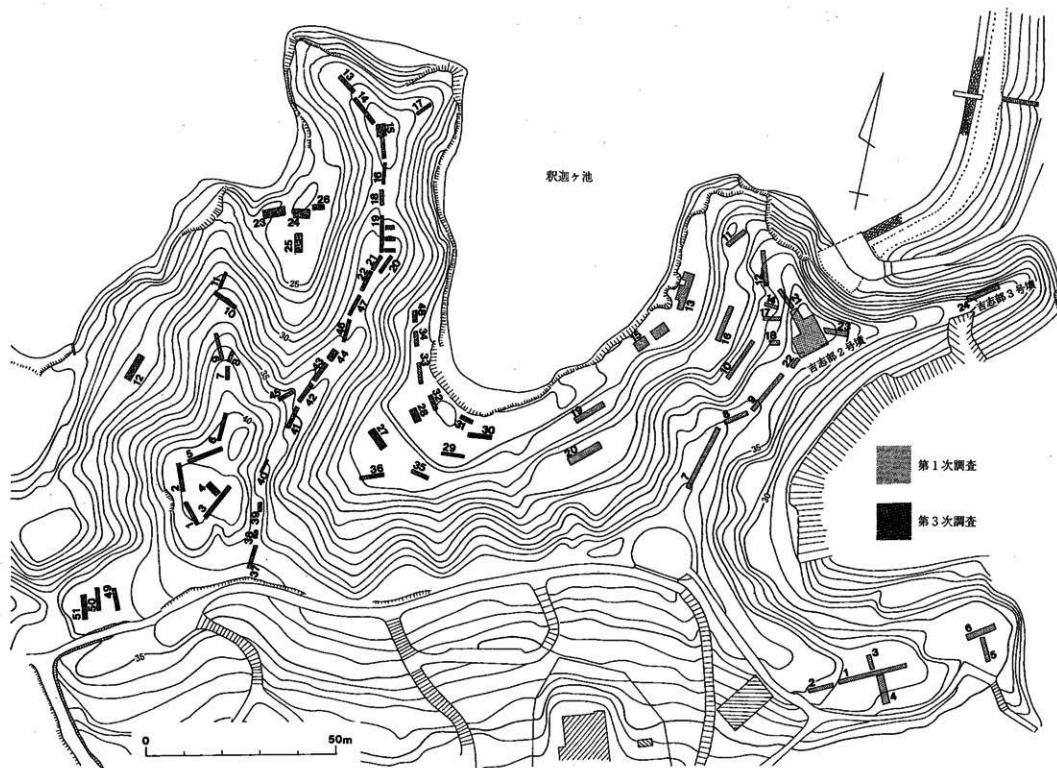
尾根北西側の池畔の標高27m及び28m前後の地点に3ヶ所（T13・T15・T19）、その上方の標高30m前後の地点に3ヶ所（T11・T16・T20）、標高33m前後の地点に2ヶ所（T10・T12）トレンチを設定した。

T13・T15・T19は層厚20～30cm程の砂質土、粘質土、粘土の堆積が続き、T13では表土下層の褐色砂質土（17）から弥生土器、須恵器（古墳時代）、平瓦（平安時代）、埴輪が、その下層の黄褐色粘質土（2）から平瓦（平安時代）が出土し、T19では堆積土上層の灰色粘質土（10）から須恵器が、淡茶褐色粘質土（26）から須恵器、窓壁、平瓦（平安時代）が出土しているが、いずれも器表面の磨滅した細片であることから詳細は不明で、現代の陶磁器も出土している。

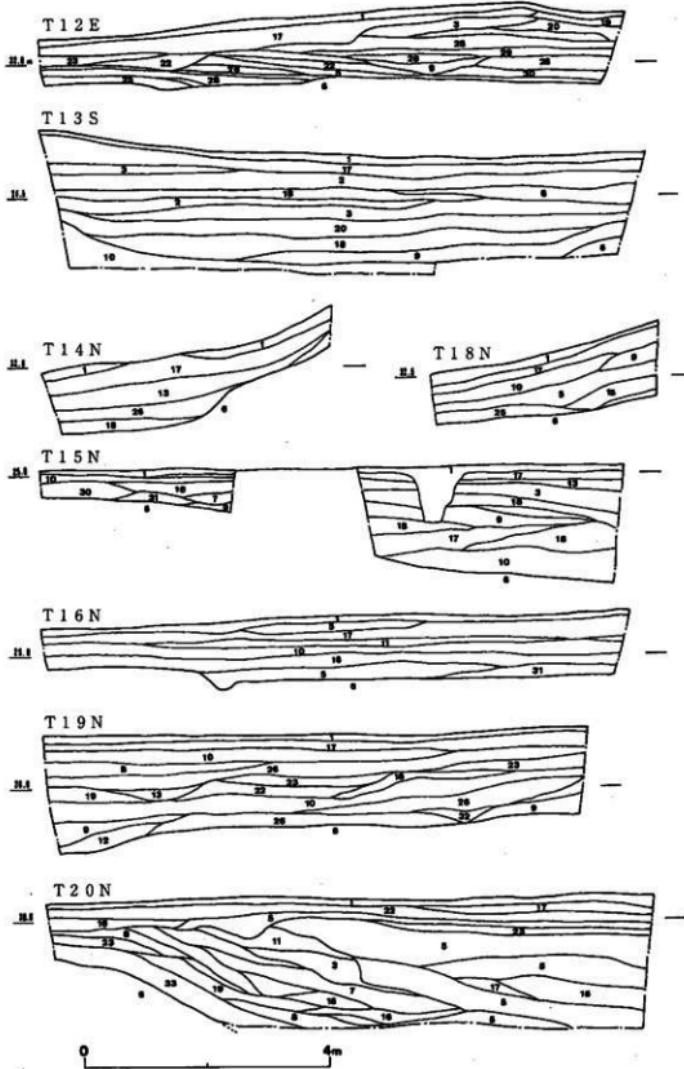
尾根筋近くに設定したT11は現地表下45cmで地山層を確認した。T16は現地表下1.1mで地山層を確認し、T20はトレンチ西端の現地表下約1mで確認した地山層が東に向かって2m以上、大きく落ち込んでいく状況を確認した。T16は粘質土の堆積を主とし、T20は粘質土及び粘土層が西から東へ流れ込む状況の堆積を確認した。T16では褐色砂質土（17）

第7図 第1次調査トレシチ土層図(1)

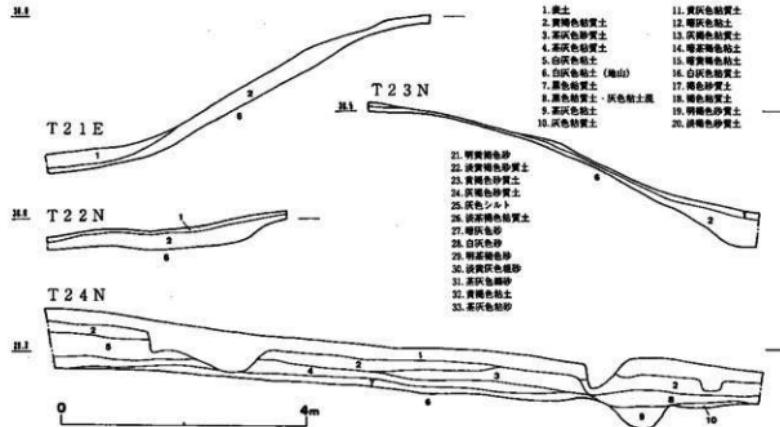




第8図 第1次・3次調査地点



第9図 第1次調査トレンチ土層図（2）



第10図 第1次調査トレンチ土層図（3）

から平瓦（平安）、須恵器が、T20では黄褐色砂質土（23）から窯壁、須恵器、土師器が、白灰色粘土（5）から須恵器杯蓋（平安）が出土しているが、先のトレンチ出土遺物と同様に器表面の磨滅した細片であることから詳細は不明で、現代の陶磁器も出土している。

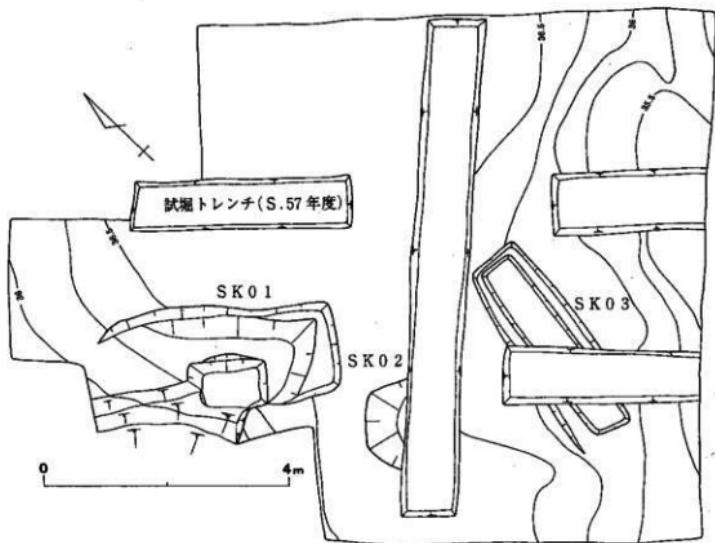
尾根北西側斜面に設定したトレンチは上方からの流れ込んだ堆積状況で、一部で遺物の出土が認められたが、堆積層の上層からの出土で、現代の遺物も出土していることから近時の流入の資料と考えられ、遺構及び明確な遺物包含層等は確認されなかった。

#### 吉志部2号墳推定地

吉志部2号墳推定地は南西から伸びてきた尾根が北及び東に分れて伸びる分岐点に当たり、標高36.5mを頂部として平坦面をなす。調査は墳頂部想定地全面及び墳丘確認のために6ヶ所にトレンチを設定した（T14・17・18・21～23）。頂部では標高36.5m地点の調査区中央南西端近くで土坑SK02を、標高36.5～36m地点の調査区北西側で土坑SK01を、南東側で土坑SK03と、計3基の土坑を確認した。

#### SK01

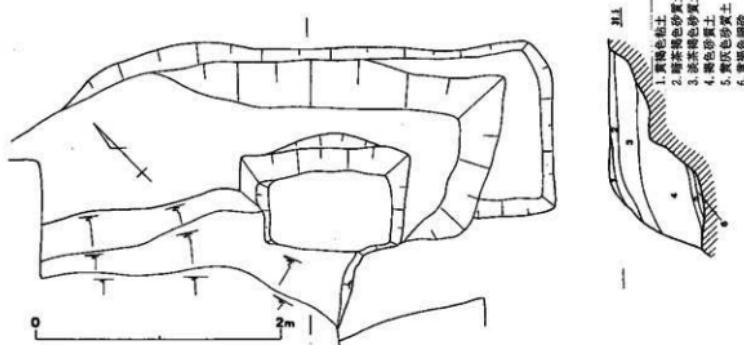
調査区北西端の西に緩やかに下る斜面で確認された。標高36.25mから西側は斜面側に崩れて急斜面となっており、全体の形状・規模等は明らかでないが、上面で平面はほぼ長方形をなし、規模は4×2m以上で深さ35cm下がった地点からさらにその内側で1.2×0.8m、深さ44cm下がっている。土坑内の堆積土は最下層で薄く黄褐色細砂（6）の堆積が認められ、他は砂質土が斜面下方に流れ出した状況がみられるが、ほぼ水平な堆積を示しており、内側の掘り込み



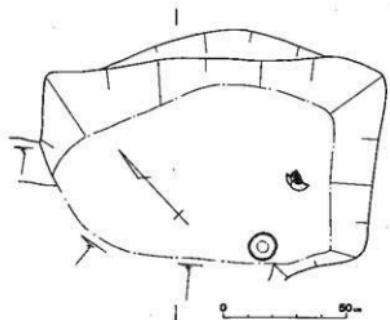
第11図 吉志部2号填推定地平面図

部分は褐色砂質土（4）が厚く堆積している。

内側の掘り込み部分上面（標高 36.2m前後）の褐色砂質土（4）堆積層の上方において近世の土師器皿2点（第18図2・3）が出土した。この土師器皿は内側の掘り込み部分の南隅近くに約20cmの間隔で東西に並び、西側の皿2は口縁部側を上に、東側の皿3は底部を上にする。土坑内からは他には遺物の出土は認められなかった。



第12図 第1次調査 SK 01



第13図 SKO 1 土師器皿出土状況

### SKO 2

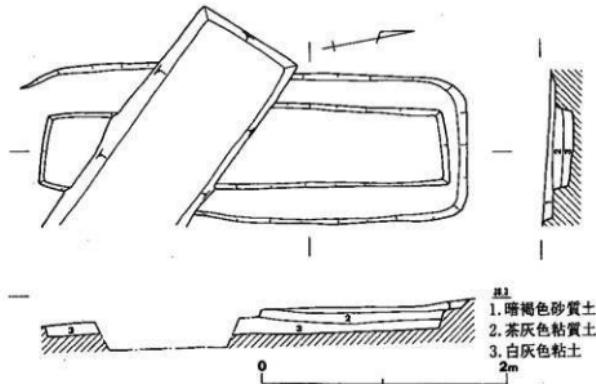
調査区中央、南西端近くで確認された。昭和57(1982)年度の試掘調査において一部確認しており、その結果をあわせると上面で $1.5 \times 1.6\text{m}$ 前後、深さ75cmの不整形なものである。

土坑内は砂質土の堆積を主とし、部分的に地山の2次堆積層と考えられる粘土の堆積が認められる。また、遺物の出土は認められず、時期や性格等は明らかではない。

### SKO 3

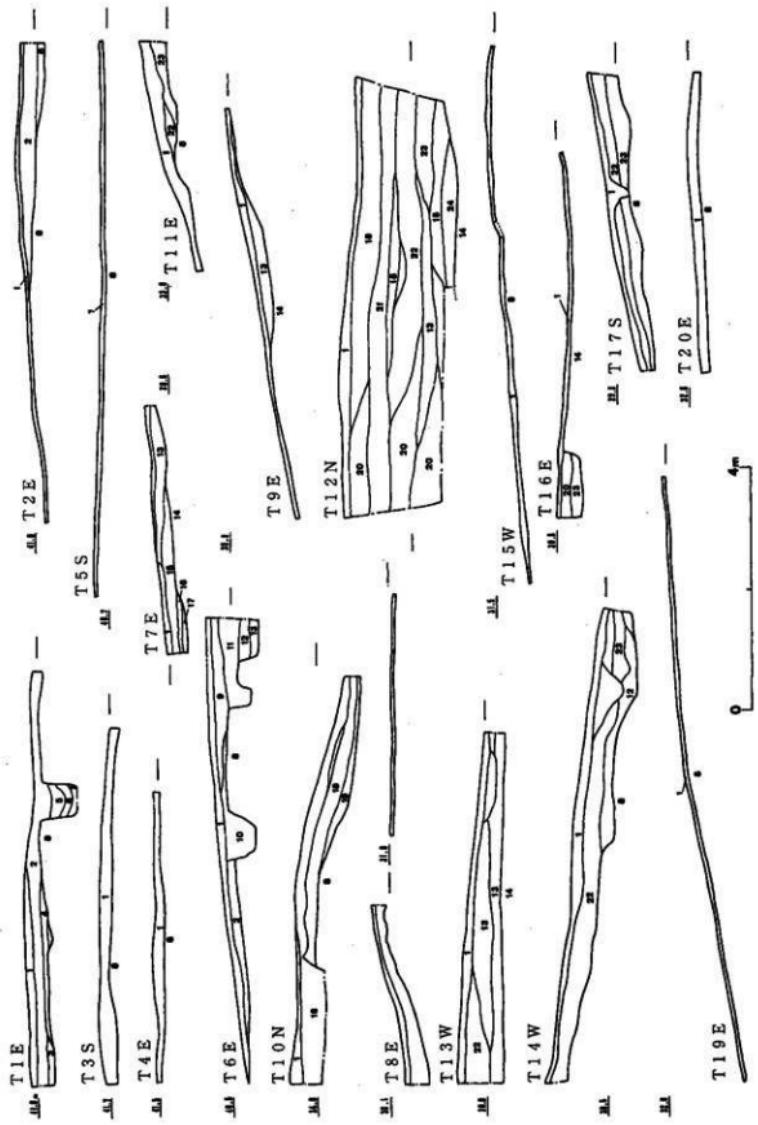
調査区南側の南東に下る緩やかな斜面上、標高36.3~36.0mで確認された。主軸の方位をN-11°-Wにとり、上端で南北3.7m、東西1.25mで、深さ10cm程下り、さらに斜面下方の南端部分は明らかでないが、北半部はさらにその内側で南北3.25m、東西0.7m、深さ15cm下がって、底面はほぼ平坦な面をなす。堆積土は層厚10cm前後の暗褐色砂質土、茶灰色粘質土、地山の2次堆積と考えられる白灰色粘土がほぼ水平に堆積しており、茶灰色粘質土中に部分的に灰が微量混じっていたが、遺物の出土は認められなかった。調査状況からは墓壙等の人為的な造構とは断定できず、時期及び性格等は明らかでない。

トレンチ調査地点について尾根上に設定したT 2 1 ~ T 2 3 では表土下20~30cmで地山層に至り、既に旧地形は削平されているものと考えられた。西側の斜面に設定したT 1 4・



第14図 第1次調査 SKO 3

第15図 第3次調査トレンチ土層図(1)



T 17・T 18においても、地山直上層まで現代の陶磁器等の出土が認められることから、地山層自体も斜面下へ削られ、流出した状況であると考えられた。

#### 吉志部3号墳推定地

吉志部2号墳推定地点から東に伸びる尾根端部近くは吉志部3号墳の存在が推定された地点である。昭和57(1983)年度の試掘調査において、古墳はすでに削平されている可能性が高いと考えられたが、さらに西側にT 24を設定して古墳の基底部等が遺存していないかの確認を行った。

調査の結果は明確な遺構及び遺物の出土は認められず、さらに堆積層の大半が地山層の2次堆積層であることから、3号墳については既に削平されているものと判断された。

以上のように第1次調査では当初目的とした古墳の確認はできず、吉志部3号墳は既に削平されていることが明らかとなった。また、吉志部2号墳については近世の土師器を伴うSKO1のような遺構が認められ、近世墓の可能性も考えられるが断定できるものではなく、他にも明確に古墳に関連すると断定できる遺構は認められなかった。

#### (2) 第3次調査

##### 尾根上設定トレンチ

調査前、古墳の存在が推定された尾根分岐点の標高41mの平坦部に6ヶ所(T 1～T 6)、トレンチを設定した。いずれも表土下、あるいは現代の堆積層である褐色細砂層下で地山層と考えられる白灰色砂層を確認した。

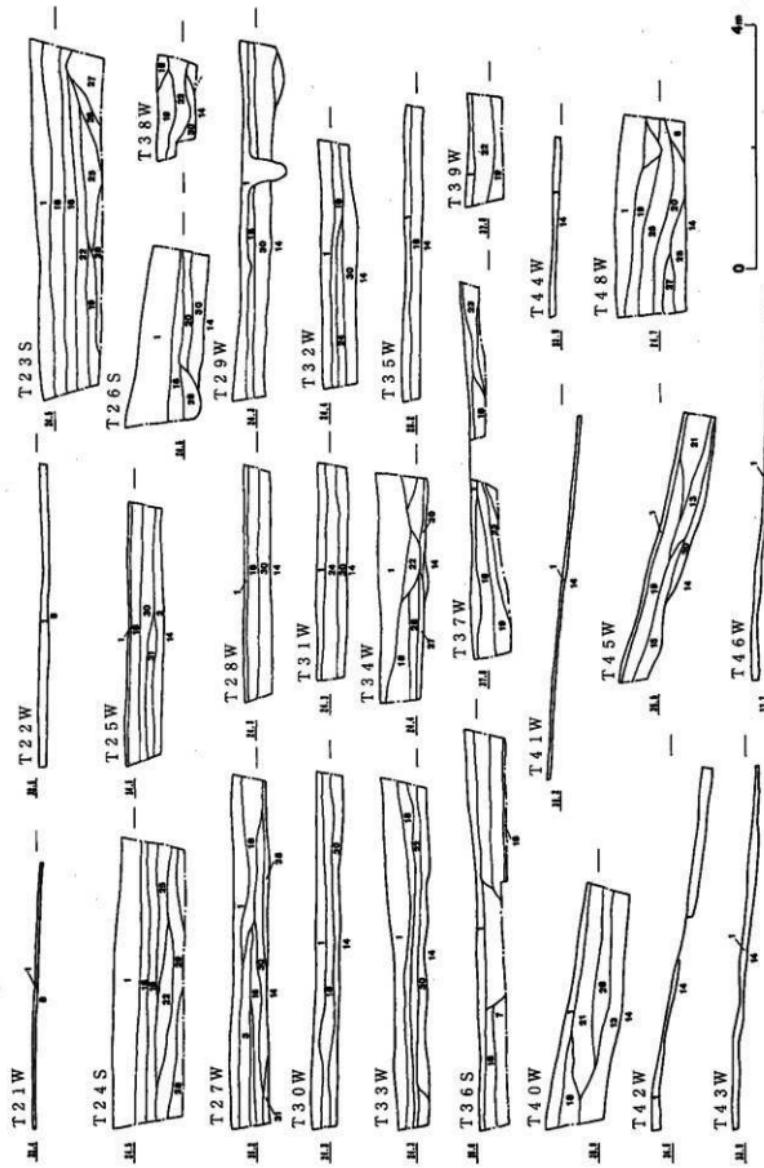
その尾根分岐点から2本の尾根が北に向って伸び、その頂部に計27ヶ所(T 7～T 22、T 37～T 47)、トレンチを設定した。T 1～T 6同様に表土下あるいは現代の堆積層である砂質土、砂層、粘質土層下10cm程度で地山層である白灰色粘土層を確認した。

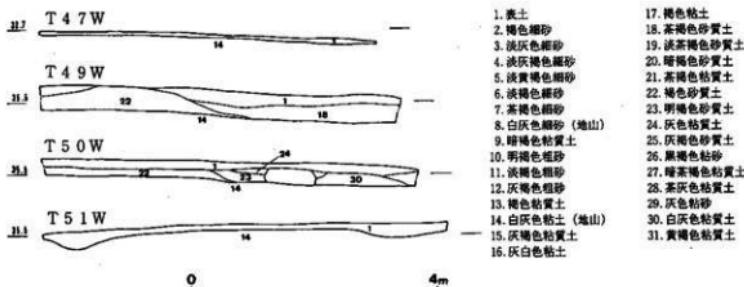
いずれのトレンチにおいても遺構及び遺物の出土は認められず、尾根頂部については調査状況から地山層は削平等により流出しており、古墳の存在については明らかにできなかった。

##### 谷部設定トレンチ

尾根西側に4ヶ所(T 23～T 26)、東側に11ヶ所(T 27～T 36、T 48)を設定した。西側のT 25・T 26は現地表下0.6～1mで地山層である白灰色粘土層を確認するが、堆積層である砂質土、粘質土はいずれも現代の堆積層であり、他のトレンチについても1m以上現代の堆積層である。東側の11ヶ所のトレンチについても0.3～0.8mで地山層を確認するが、堆積層である砂質土、粘質土はいずれも現代の堆積層であり、谷部分の調査では堆積層はいずれも近時の尾根上方からの流れ込みによる堆積で、明確な遺構や遺物の出土は確認されなかつた。

第16図 第3次調査トレーンチ土層図 (2)



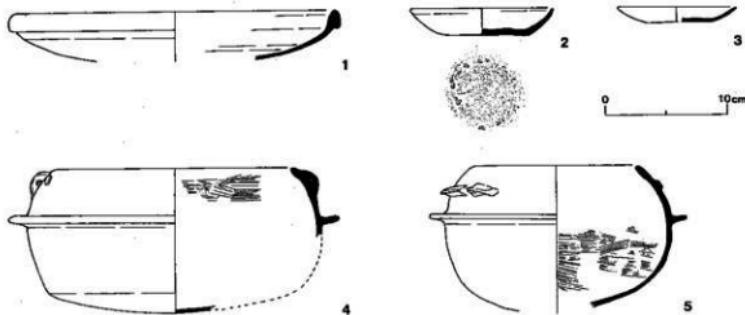


第17図 第3次調査トレンチ土層図（3）

#### 西側尾根設定トレンチ

史跡西北端に北接する標高35mの平坦部に3ヶ所（T49～T51）、設定した。現地表下0.1～0.4mで地山層である白灰色粘土層を確認し、T49・T50では表土下で砂質土及び粘質土の堆積を確認するが、現代の堆積層であり、いずれのトレンチにおいても明確な遺構は確認されなかった。T49・T51では遺物の出土は認められなかったが、T50では灰色粘質土（24）から土師質の土釜2個体分が一括で出土した。出土状況からは遺構等に伴う原位置を保つものではなく、他所から流れ込んだものと判断された。

以上のように第3次調査ではT50において土師質土釜2点が出土した以外には遺構、遺物の出土は確認されず、旧地形は大きく改変されていることが明らかとなった。



第18図 第1次・3次調査出土土器

### (3) 出土遺物（第18図）

#### 第1次調査

##### 焰烙（1）

吉志部2号墳推定地点、表土層出土。口径26.6cm、現存高4.1cm、浅い丸底の器形で型造りによるものであり、口縁端部は玉縁状をなす。胎土は精緻で色調は橙色を呈す。19世紀代のものと考えられる。

##### 土師器皿（2・3）

SK01、褐色砂質土出土。2は口径11.6cm、器高2.3cmで内縁気味に上方に伸び、端部を弱く外反させる。3は口径9.6cm、器高1.5cmで内縁気味に外上方に伸びる。3は全体に磨滅しているが、共に底部は糸切りで、外面は回転ナデを施し、端部内外面に油煤が付着する。胎土は精緻で色調は橙色を呈す。大坂城等における調査では江戸時代前期に類例がみられるものであるが、3は口径等より時期的に新しくなる可能性もある。

#### 第3次調査

##### 土師質土釜（4・5）

4は口径19.1cm、器高11.8cmで、器高に対して口径の割合の大きなものである。底部は平らに近く、体部は直線的に外方に伸び、口縁部は内縁気味に内傾する。鍔は短く外上方に伸びる。口縁端部に穿孔のある把手を付し、さらにその脇の口縁部にも穿孔が認められる。外面とも磨滅のため調整等は明らかでないが、体部内外面は押圧痕がみられ、口縁部内面には粗い横方向のハケメが認められる。胎土は石英、長石、雲母、黒色粒が認められ、色調は灰白色及び黄橙色を呈する。5は口径12.9cm、現存高12cmで底部を欠くが、丸味を持つ体部で、口縁部は大きく内縁しながら伸びる。鍔は短く外上方に伸びる。口縁部中位に鍔に平行する、穿孔のある把手が付される。体部外面は鍔より下方全面に煤が付着するために調整は明らかでないが、内面は粗い横方向のハケメを、口縁部内面は押圧調整を施す。胎土は角閃石、黒雲母等を含み、色調は黄灰色を呈する。共に把手が付される等類例の少ないものであり、時期的には近世のものかと考えられる。

## 2. 第2次調査（史跡内の調査）

### （1）土層序

現代の地表面は上段部分で標高21.9~22.1mを、下段部分で19.2mを前後する。各堆積層は基本的に以下のとおりに分けられる。

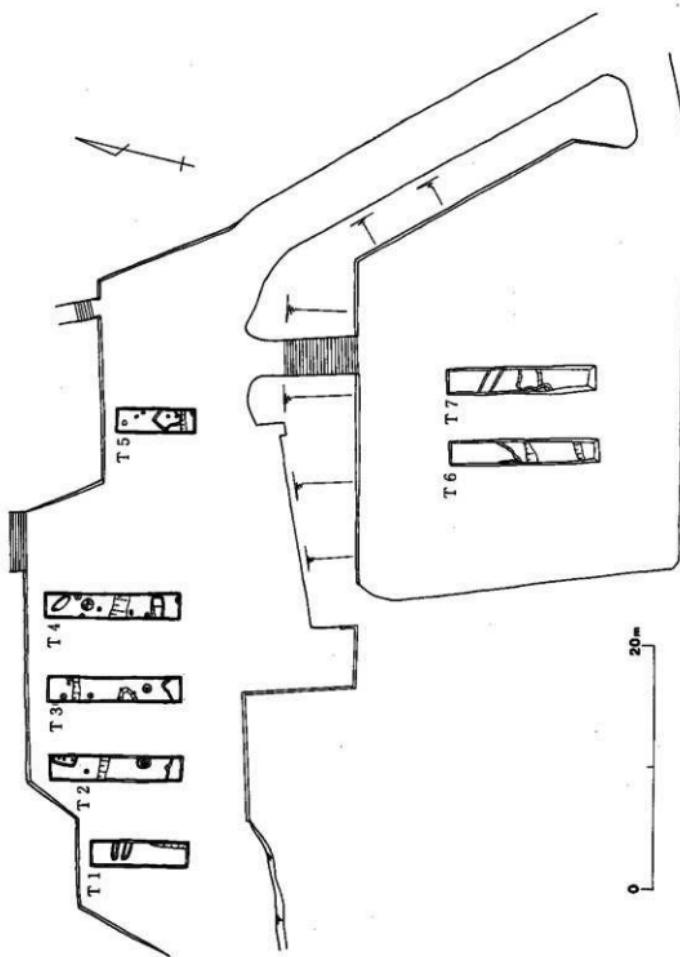
I層 史跡公園造成時の整地層。

II層 旧表土。

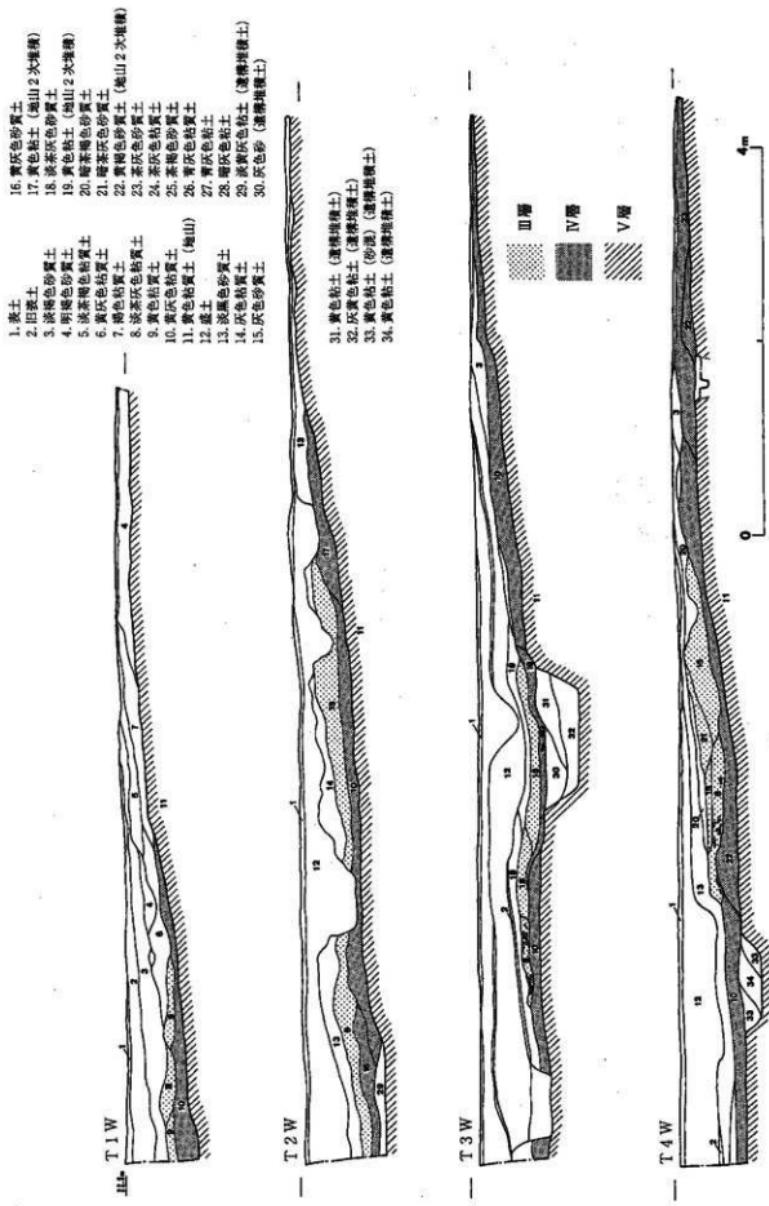
III層 灰色砂質土を主とし、平安時代末期の遺物と吉志部瓦窯操業期の瓦が出土する。

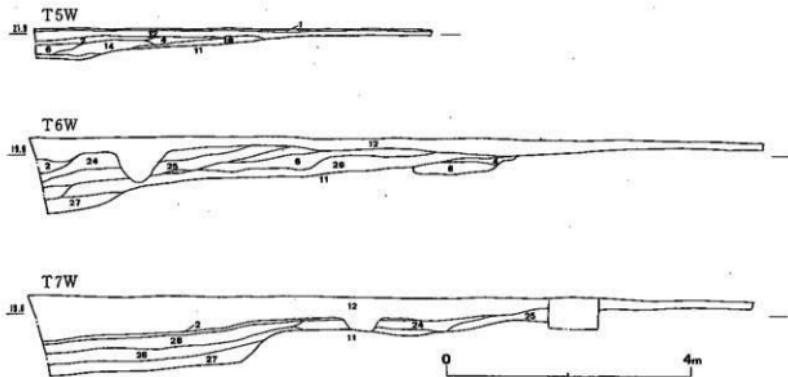
IV層 地山層の2次堆積層と考えられる黄灰色粘質土の堆積層であり、吉志部瓦窯操業期

第19圖 第2次調查地點平面圖



第20図 第2次調査トレーンチ土層図(1)





第21図 第2次調査トレンチ土層図(2)

の瓦が出土する。

V層 地山層と考えられる黄色粘質土層であり、吉志部瓦窯操業期遺構面形成層である。

吉志部瓦窯操業時遺構面(V層上面)は瓦窯から南に向って緩やかな傾斜面をなすが、瓦窯開窯時に造成を行い、上段調査区(T1～T5)では標高21.7～22.0m及び21.3～21.5m前後で2段にわたって平坦面を形成している。瓦窯廃窯後は平安末期に当地一帯において造成が行われたものと考えられ、Ⅲ層はその整地層と考えられる。

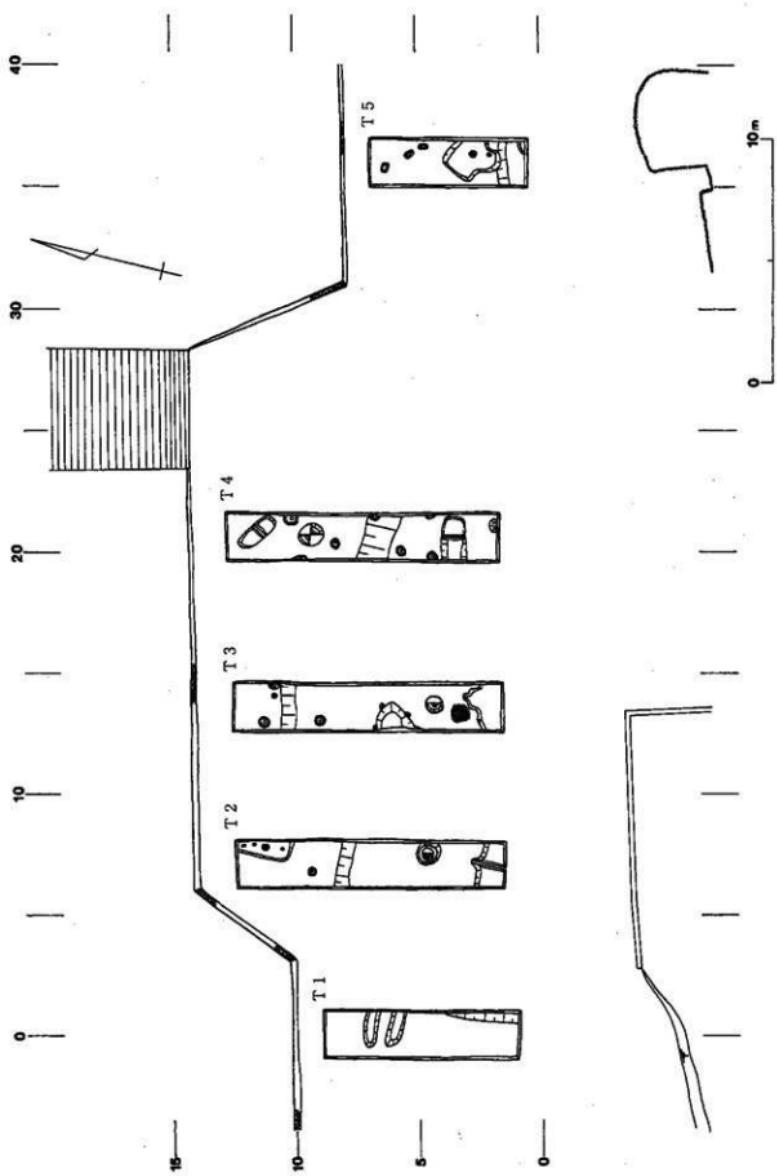
#### (2) 各トレンチの調査状況

上段平坦面に設定したT1～T5において、V層をベース面とする吉志部瓦窯の工房関連遺構と考えられる土坑、柱穴等の遺構を検出した。下段部分では近・現代の池跡を検出したが、その他の遺構及び明確な遺物包含層は認められなかった。以下、各トレンチの調査状況について報告する。

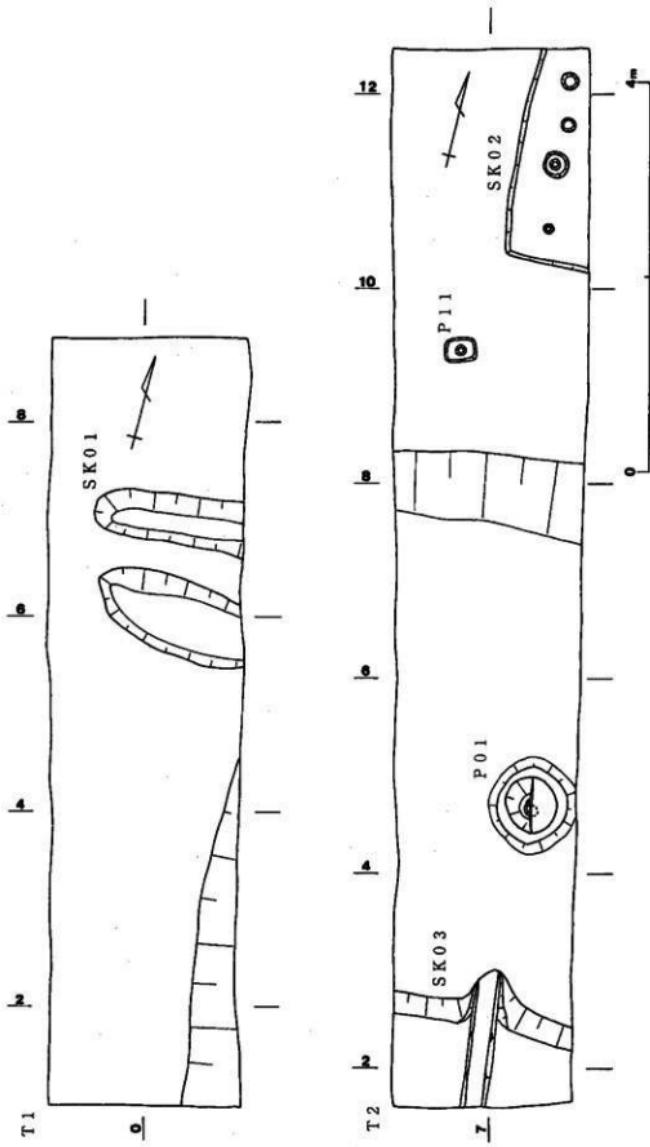
##### T1

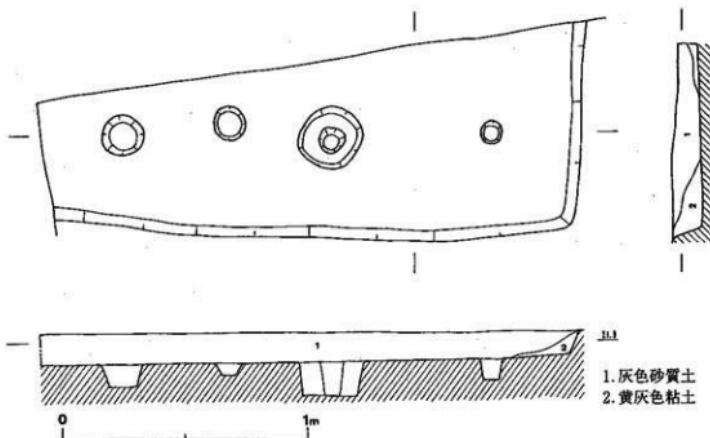
南北8m、東西2mのトレンチで、トレンチ北端近くで土坑SK01を、南半部で西から東へ下る落込みを検出した。SK01は南北0.5m、東西は検出部分で1.6mである。底面はほぼ平らで、断面は逆台形状をなし、深さは西端で5cm、東端で10cmである。堆積土は灰白色砂質土1層であり、遺物の出土は認められなかった。SK01については排水溝の可能性もある。南半部の落込みは検出部分の最も大きい部分では高低差20cmで落ち込んでいく。遺構から遺物の出土は認められなかった。

第22圖 第2次調查地點上段部平面圖



第23圖 第2次調查 T 1 · T 2 平面圖





第24図 第2次調査 SKO 2

T 2

T 1の東5mの地点に設定した南北11m、東西2mのトレンチである。遺構面は全体には北から南へ緩やかに傾斜した地形をなすが、トレンチ北端より3.9~4.3mの地点で20cm前後の段差が認められる。上段部分では土坑(SKO 2)及び柱穴1基(P 1 1)を、下段部分で回転台跡1基(P 0 1)、土坑1基(SKO 3)を検出した。

SKO 2はトレンチの北東隅で一部を確認した。方形プランのもとと考えられ、検出部分で南北2.1m、東西0.88mである。土坑内の堆積状況は南端部で黄灰色粘土が周囲から流れ込んだ状況で堆積するが、大部分は灰色砂質土1層である。灰色砂質土中からは吉志部瓦窯瓦、須恵器、土師器、石器が出土しているがいずれも細片であり、詳細は不明である。検出部分底面で柱穴と考えられるピット4基を確認し、1基は掘り方を確認した。柱掘り方は円形に近く、径24~26cm、深さ14cmで、柱痕は径6~10cmである。他の柱穴は平面円形で、径9~17cm、深さ5~10cmである。柱の間隔は南から64・40・40cmで、柱穴から遺物は出土していない。一部の検出であることから、全体の構造は明らかではない。

SKO 3はトレンチ南端で検出し、検出部分で東西1.65m、南北0.75~1.19m、深さ13cm前後で、底部はほぼ平らである。肩部の検出部分ほぼ中央で北側に30cm程度掘り広げられている。堆積土は淡黄灰色粘質土1層であり、遺物は出土していない。

回転台跡P 0 1は、平面円形で、径52~56cmである。土坑の上面は幅20cm、高さ4cmで周堤状に盛り上げている。土坑は椀状に15cm程掘り込まれ、その底部中央でさらに径16cm、深さ10cmで掘り込まれる2重構造を取る。断面をみると、中央に径8cmの軸状の痕跡が底部まで認められ、その周囲に粘土、粘質土が入っているが、いずれも良く締まっており、軸部分の

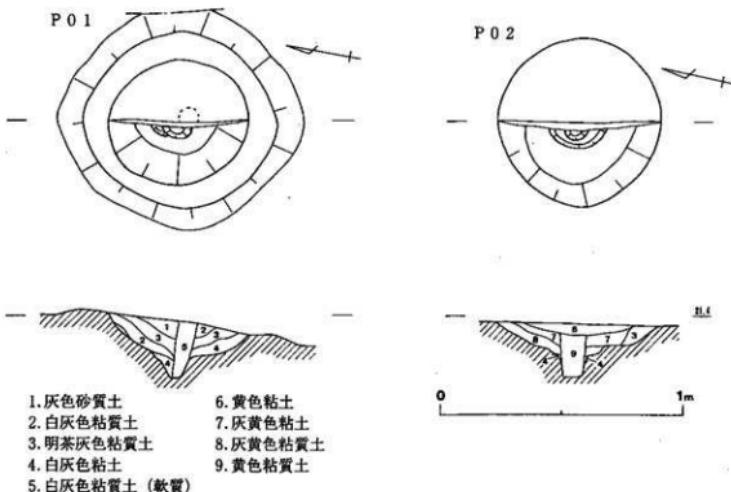
一部脇に充填されたと考えられる状況で硬く締まった白灰色粘土が認められる。他に検出した柱穴等とは規模的にも異なり、構造的にも椀形に掘り込んだ底部中央にさらに細いピットが掘り込まれるという2重構造を呈し、大きく異なる。これは埼玉県等関東地方で報告されている須恵器製作の際に使用したロクロあるいは回転台等の軸棒を埋め込んだ「ロクロピット」と極めて類似し、瓦窯との位置関係からも同様の性格を持つものと考えられる。この土坑については製作用の回転台等の軸を据え付けたものと判断されるものである。

上段部で確認した柱穴P1-1は掘り方は平面方形で一辺25~32cm、深さ約12cm、柱痕は径11cmである。遺物は出土していない。

### T 3

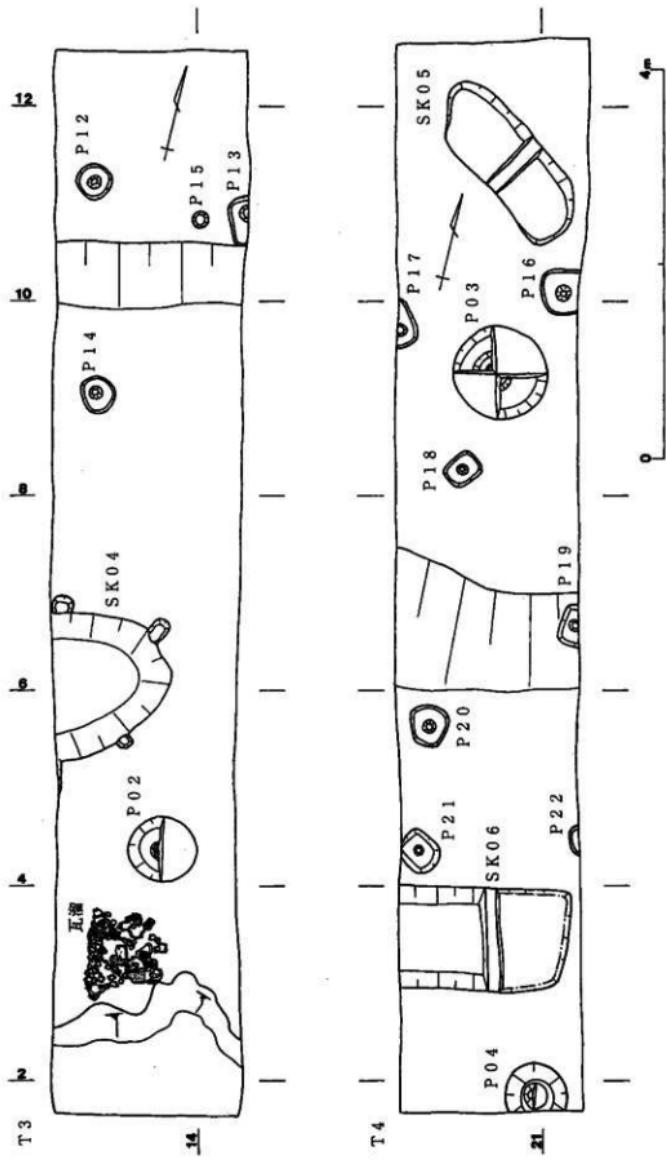
T2の東方約4.5mに設定した南北11m、東西2mのトレンチである。トレンチ北端から1.95mの地点で10cm前後の段差を設けている。上段部分で柱穴3基(P1-2・P1-3・P1-5)を確認した。下段部分では柱穴1基(P1-4)、回転台跡1基(P0-2)、土坑1基(SK0-4)及びトレンチ南端近くで瓦が密集した状況で検出した。

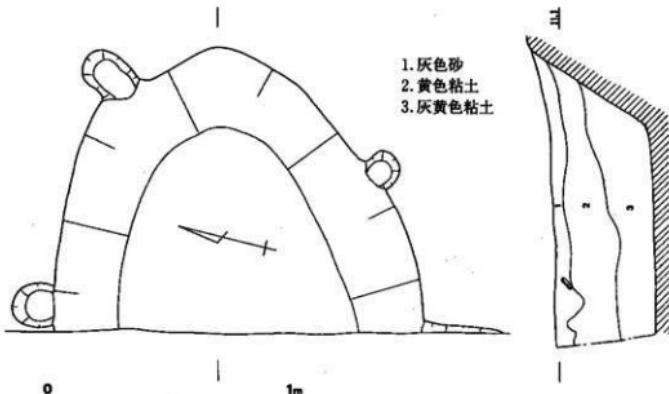
土坑SK0-4は平面橿円形に近く、検出部分で径1.2~1.5m、深さ0.4~0.6mである。断面は逆台形状を呈し、壁面は比較的急角度で直線的に下り、底部は平らである。土坑内の堆積状況は下層に層厚15~25cmの灰黄色粘土が、中層に層厚10~20cmの黄色粘土が、上層に層



第25図 第2次調査P0-1・P0-2

第26図 第2次調査 T3・T4平面図





第27図 第2次調査SKO4

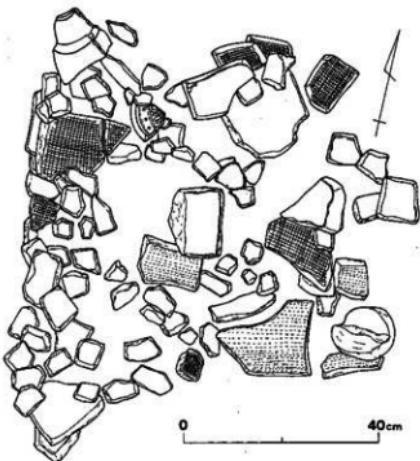
厚5cm前後の灰色砂がほぼ水平に堆積しており、下層及び中層の粘土層は均質な粘土層である。灰色砂層から瓦の細片が微量出土している。

また、肩部分に径14~18cm、深さ10cm前後の3基のピットが検出され、土坑の全周に配されていることが考えられる。このピットは柱を据えたものと考えられるが、検出状況から柱を垂直に建てたものではなく、土坑中央部に向って斜めに立て掛け、真中で組み合わせた可能性が考えられる。回転台P02はT2のP01とほぼ並んだ位置で確認し、7mの間隔を有する。

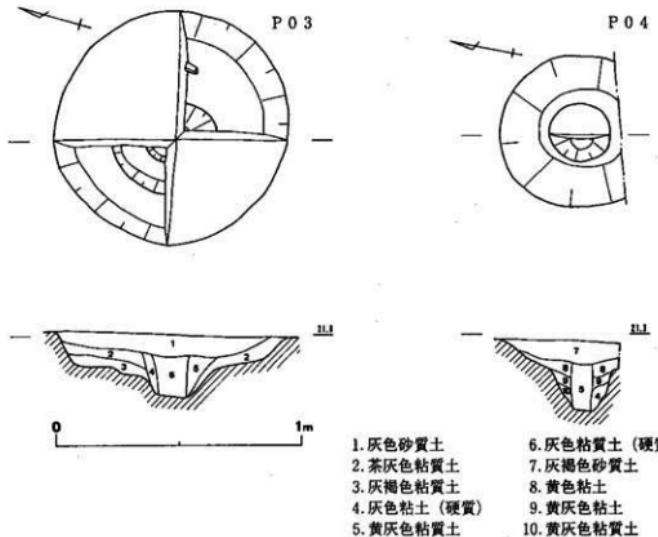
上端は平面円形で、径0.7mで10cm程掘り込まれ、さらに中心部分で軸部分が径10前後、深さ10cm掘り込まれている。この軸部分の上方の両脇に硬く締まった白灰色粘土が認められる。遺物は出土していない。

柱穴P12~P14は柱掘り方は円形ないしは方形で、一辺あるいは径34~40cm、深さ12~15cmである。遺物は出土していない。

トレンチ南端は後世に掘り込まれており、その北側の南北90cm、東西1.1m以上で調査区の西側外に広がる範囲で吉志部瓦窯の瓦が密集した状況で確認された。軒丸瓦、平瓦、丸瓦等が認められるが、いずれも細片のものが



第28図 第2次調査瓦溜



第29図 第2次調査P 03・P 04

多い。これらの瓦の出土状況については遺構面上ではなく、上層のⅢ層中に含まれるものと考えられることから、他の遺構と関連するものではなく、後世の造成にともなうものと考えられる。

#### T 4

T 3の東方 5mに設定した南北 11m、東西 2mのトレンチである。トレンチの北端から 5.1 ~ 5.7mの地点で、17~31cmの段差が認められ、上段部分で土坑1基 (SK 05)、回転台跡1基 (P 03)、柱穴4基 (P 16~P 19) を、下段部分で土坑1基 (SK 06)、回転台跡1基 (P 04)、柱穴3基 (P 20~P 22) を検出した。

上段部で確認された土坑SK 05は東西 1.85m、南北 0.7m、深さは北側で 8cm である。南側はほとんど肩を有さない。堆積土は灰色砂質土で、遺物は出土していない。

下段部で確認された土坑SK 06は西端部はトレンチの外に広がるが、検出部分で南北 1.3 m、東西 1.8m、深さ 20cm で、底部は平らである。検出部分の西半部を完掘したが、堆積土は良質の粘土で、地山層の粘土とほぼ同一である。細かいブロック状ではないが、北から南へ粘土が入った状況が認められる。遺物は出土していない。

回転台跡P 03は上面で平面円形で径 1m で 10~15cm 挖り下げ、そのほぼ中央を径 30cm で 10cm 程掘り下げている。中央の軸部の痕跡は径 10~15cm で、軸部分の両脇に硬く締まった灰色粘土が認められる。堆積土最上層の灰色砂質土 (1) から吉志部瓦窯瓦及び土師器が出土し

ているが、細片のため詳細は不明である。P 0 3 は他の回転台跡よりも全体の規模が大きく、軸部分も太い。

下段部で確認した回転台跡 P 0 4 は P 0 1、P 0 2 と同様の規模と構造であり、上端の平面円形で、径 0.62m で椀状に 12cm 挖り下げ、さらに中央部分を径 25cm で 16cm 挖り下げている。軸部分は径 9cm である。遺物は出土していない。

柱穴 P 1 6 ~ P 2 1 はいずれも掘り方は方形で、一辺 30~46cm、深さ 15.5~22.5cm で、柱痕は径 10~16cm であり、遺物は出土していない。P 2 2 はトレンチ端で確認したもので、検出部分で一辺 30cm、深さ 8cm で、黒色土器 B 類椀の細片が出土している。

#### T 5

T 4 の東方 13m に設定した南北 6.5m、東西 2m のトレンチである。トレンチ北半部でピット 3 基を、南半部及び東南隅で土坑を確認した。

南半部で確認した土坑は平面は不整形であり、検出部分で南北 2.2m、東西 1.8m、深さ 30cm 前後である。土坑底面はほぼ平らで、径 20~30cm、深さ 15cm 前後のピット 2 基を確認した。

東南隅で確認した土坑は検出部分で一辺 58cm、深さ 15cm 前後で、細片ではあるが黒色土器 B 類椀が出土している。

T 5においては他のトレンチ以上に後世の削平が大きく、吉志部瓦窯の瓦、古墳時代須恵器、土師器等の細片が出土しているが、土坑等の時期、性格は明らかでない。

#### T 6・T 7

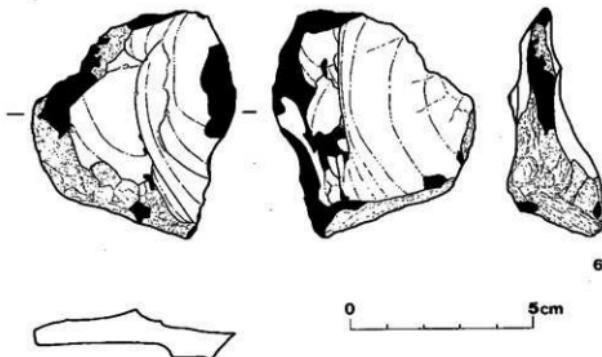
下段調査区に設定したトレンチで、地山層上層まで現代の遺物が認められる。また、ともにトレンチ中程から南に向かって大きく落ち込んでいく、その落込み部分には軟質の青灰色粘土層の堆積が認められる。遺物の出土は少なく、旧表土層から吉志部瓦窯瓦、中世土師質土釜の微細片が出土しているのみである。下段調査区トレンチ南半部の落込みについては堆積状況等から現在、調査地点の南に広がる小路新池の北岸部と考えられ、近年の造成等を受け、旧地形はかなり削平されているものと考えられる。

#### (3) 出土遺物

調査区上段部のトレンチ (T 1 ~ T 5) を主にコンテナ 30 箱分の遺物が出土しているが、大半は平安時代末期の整地層と考えられるⅢ層からの出土であり、石器、古墳時代須恵器、奈良時代瓦、吉志部瓦窯操業期瓦、須恵器、平安時代末の黒色土器等が出土しているがいずれも細片である。

#### 石器 (第 30 図 6)

サヌカイトの石核で、T 2、SKO 1 出土。長さ 6.3cm、幅 5.5cm、最大幅 2.2cm、重さ 59.2g である。後世の欠損により打面調整等の観察は難しいが、表面に右方向からの大きな剥離痕が 2 枚あり、裏面にも 1 枚の大きな剥離痕が認められる。また、下端部から左側縁にかけて原礫面を残す。旧石器か縄文時代に属するかの特定はできなかった。



第30図 第2次調査出土石器

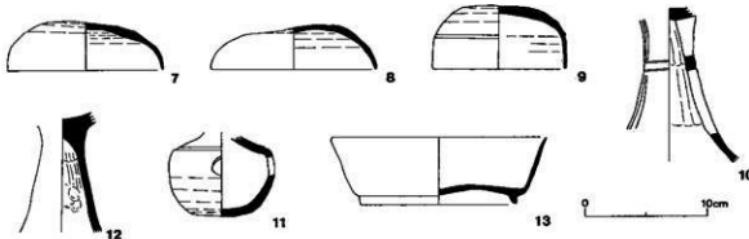
古墳時代の遺物（第31図7～12）

須恵器、土師器が認められるが、いずれも2次堆積の資料である。須恵器は陶邑における中村編年のII型式4～5段階（田辺編年のTK43～TK209型式）のものと考えられる。

#### 須恵器

##### 杯蓋（7・8）

7はT3、III層出土で口径12.7cm、器高4cm。比較的平らな天井部から内彎して下方に下り、端部を丸くおさめる。8はT3、IV層出土。口径13.7cm、器高3.5cm。比較的平らな天井部から内彎気味に外方に下り、口縁端部を丸くおさめる。ともに天井部外面1/2程度を回転ヘラケズリ、天井部内面は不定方向のナデ、他は横ナデを施す。胎土は3mm程の砂粒を含み、色調は灰白色を呈する。



第31図 第2次調査出土土器

### 蓋形土器（9）

T 3、IV層出土で口径 11cm、器高 5.3cm。平らな天井部から内嚙気味に下り、天井部と口縁部との境に一条凹線を巡らす。口縁部はほぼ垂直に下り、端部を丸くおさめる。天井部外面 1／2 程度を回転ヘラケズリ、他は横ナデを施す。色調は灰白色を呈する。天井部内面ほぼ全面に自然釉が認められる。

### 高杯（10）

T 2、II層出土の脚部の破片で、長脚 2方 2段透かしのものであり、透かし間に 2条の沈線を巡らす。全体に磨滅のため調整は不明である。色調は灰白色を呈する。

### 甌（11）

T 4、II層出土。口頸部を欠くが基部の細いものであり、体部は最大径をその上方 1／3 前後に求められる球形に近いものである。肩部に段を有し、底部から 1／2 まで回転ヘラケズリ、他は横ナデを施す。色調は青灰色を呈する。

### 土師器高杯（12）

T 2、II層出土。脚部の破片で、内面は絞目が顕著であるが、全体に磨滅のため調整等は明らかでない。色調は灰白色から浅黄橙色を呈する。

### 奈良時代の遺物

#### 瓦類（第 32 図）

T 4、III層出土で軒平瓦の平瓦部分、丸瓦、平瓦があり、焼成は良好で、胎土は黒色粒を含み色調は青灰色ないしは灰色を呈し、硬質である。いずれも聖武朝難波宮造営瓦窯である七尾瓦窯の瓦である。

#### 軒平瓦（1）

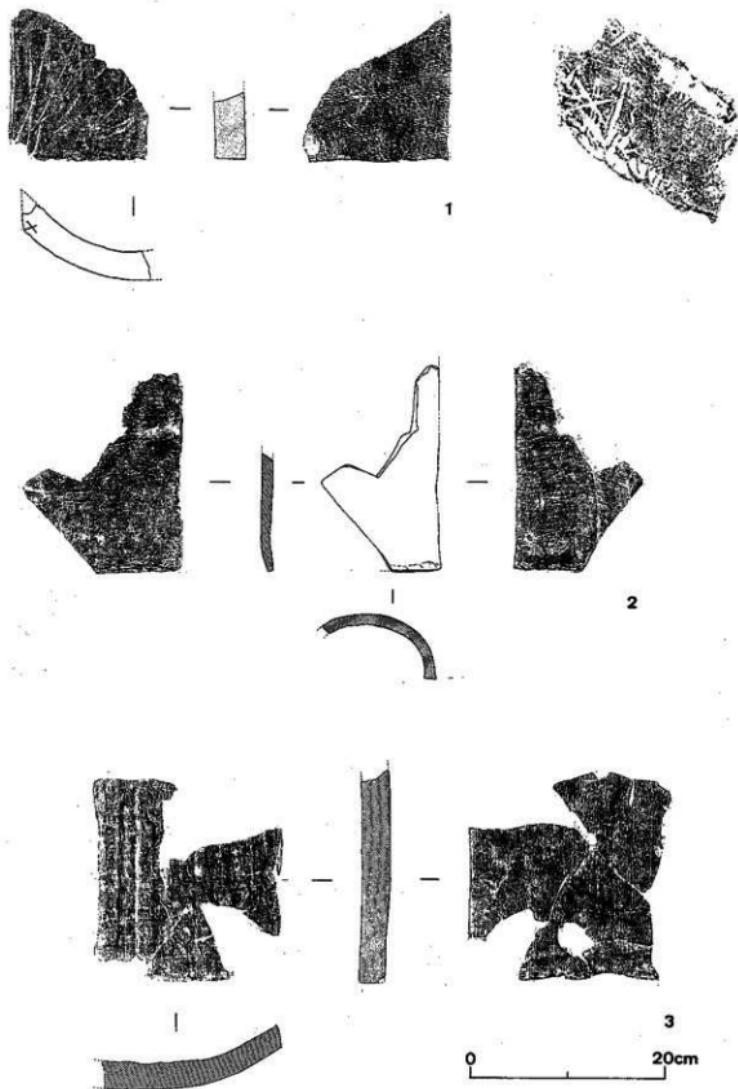
軒平瓦の平瓦部分で、厚さ 3.1cm である。凸面は横方向の繩目タタキが認められ、凹面はナデ消されているが端部の一部に布目が残る。側面及び狭端面はヘラケズリが施され、狭端面の側面近くの下方に長さ 1.4cm で「×」の線刻が認められる。

#### 丸瓦（2）

薄手の丸瓦であり、厚さ 1.1cm である。凸面は全面ナデ消されており、凹面は未調整で布目がよく残るが、先端部分はナデ消されている。また、凹面の一部に幅 3.5cm で模骨痕と考えられる圧痕が認められる。側面は水平になるようにヘラケズリされる。

#### 平瓦（3）

厚手の平瓦で厚さは中央部分で 3cm である。凸面はナデ消されているがごく一部に縦方向の繩



第32図 第2次調査出土奈良時代瓦（瓦線刻拓影は4：5）

目タタキが認められる。凹面は端部は横ナデで消されているが、他は未調整で布目が残り、幅3.5cm前後の模骨痕が認められる。広端面はヘラケズリされている。

#### 平安時代初（吉志部瓦窯操業期）の遺物

平安時代初期、吉志部瓦窯操業期の遺物は瓦が大半を占め、特にT2・T3・T4の下段部分で上方から流れ込む状況で多量に出土している。平瓦及び丸瓦が大半を占める。

#### 瓦類

##### 軒瓦（第33・34図）

軒瓦は軒丸瓦3種、軒平瓦4種を確認しているが、細片で全体に遺存状況は悪い。胎土は石英、長石等の砂粒が均質に混じり、焼成はやや軟質で、色調は灰黒色を呈するものが多い。

##### 軒丸瓦（4～7）

T3出土で、4はIII層及びIV層出土の破片が接合し、5・6は瓦溜、7はII層出土。同范の資料では単弁十六葉蓮華紋軒丸瓦であり、中房はほとんど段をつけず内区とは界線で画す。中房に1+6の蓮子を配し、内区と外区は一重の界線で画され、外区には16個の珠紋が蓮弁にはほぼ対応して配されるものである。周縁は高く、直立縁である。

##### 軒丸瓦（8～11）

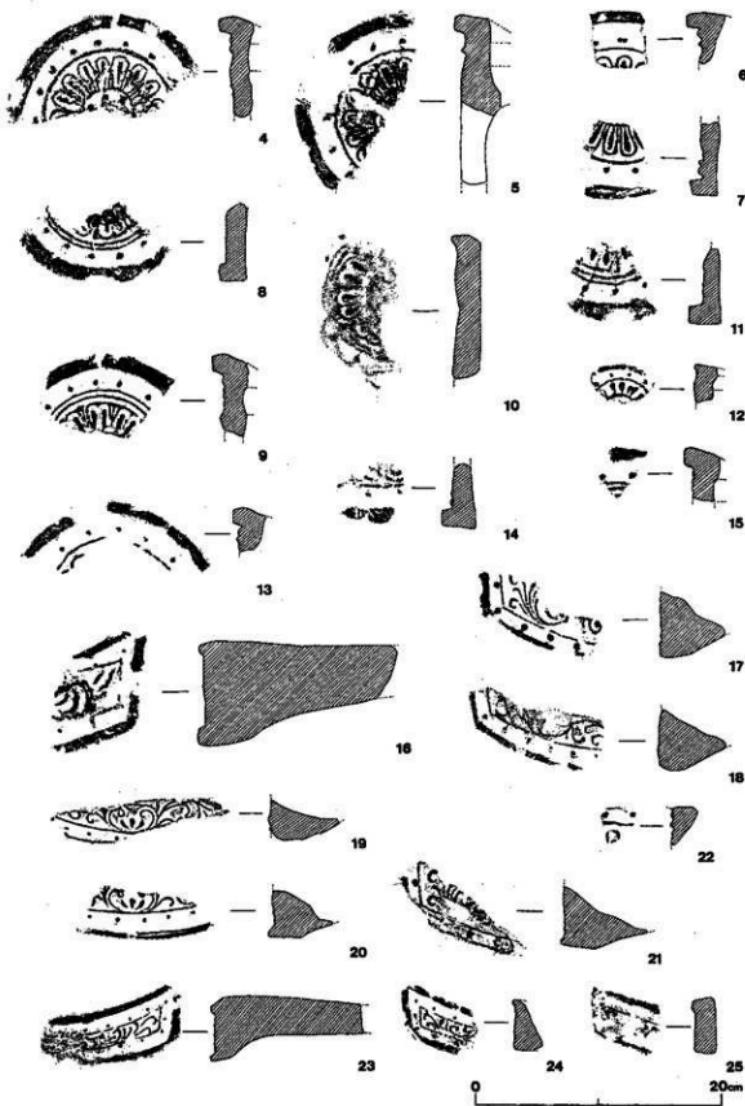
8・10はT4、II層、9はT3、II層、11はT5、IV層出土。同范の資料では複弁八葉蓮華紋軒丸瓦であり、内区と外区は2重の界線で画され、外区には16個の珠紋を配するものである。周縁は高く、直立縁である。

##### 軒丸瓦（12）

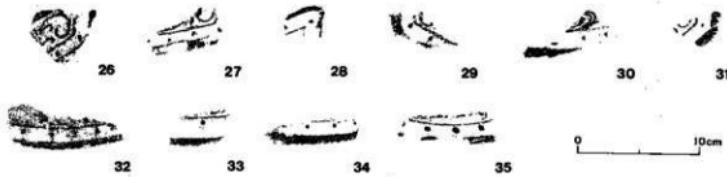
T5、II層出土。上端部の破片であるが、平成3（1991）年度の工房跡の発掘調査で同范資料が出土しており、径8cm前後の小型の単弁十七葉蓮華紋軒丸瓦である。内区に先端が最もふくらむ素弁が雜に並ぶ。内区と外区は一重の界線で区画され、珠紋が比較的広い間隔で配されている。

##### 軒平瓦（16）

T3、II層出土。同范の資料では中心飾りの対向するC字形は先端を巻き込みず、唐草は左右に2転半するものである。平瓦部分の調整は磨滅のため詳細は不明であるが、遺存部分では凹面の一部、側縁近くに布目が認められ、凸面は不明瞭であるが押圧調整の可能性が高いと考えられる。側面はヘラケズリを施す。



第33図 第2次調査出土軒瓦（1）



第34図 第2次調査出土軒瓦（2）

#### 軒平瓦（17・18）

17はT4、IV層、18はT5、II層出土。同范の資料では対向するC字形の中心飾りで、左右に2転半する唐草を配するものである。

#### 軒平瓦（19～21・26）

19・21はT4、20はT5、26はT3、II層出土。中心飾りに「小」字形をおく。同范の資料では左右には3転する唐草を配するものである。珠紋は小さく、頸の部分は丁寧にヘラ削りを施している。

#### 軒平瓦（23～25）

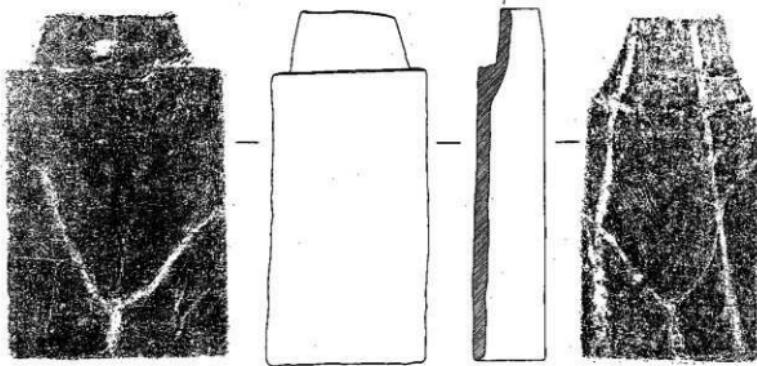
23・24はT3、25はT2、II層出土。25は瓦當面の磨滅が著しいが、いずれも同范の小型の軒平瓦である。同范の資料では対向するC字形の中心飾りであるが、上端が外側に開いており、唐草は小ぶりでややのびが悪いものである。平瓦部分の調整は磨滅のため詳細は不明であるが、凸面は押圧調整の可能性が高く、側面はヘラケズリを施す。

#### 丸瓦（36・37）

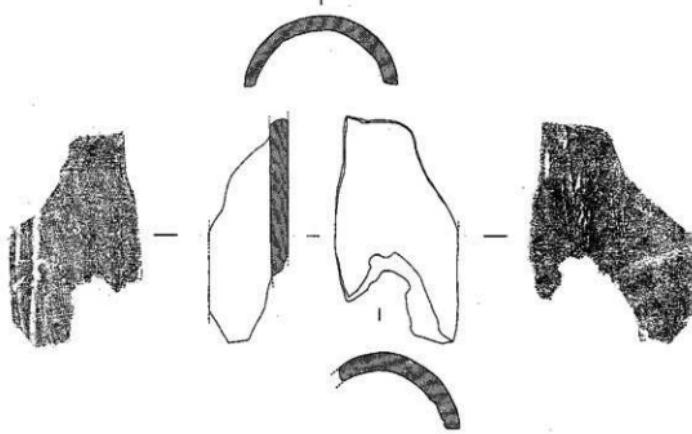
T4、III層出土。36はほぼ完形のもので、全長36.6cm、筒部幅16.3cm、厚さ1.7cmである。凸面は全体に磨滅しているが、縦方向の繩目タタキが認められる。凹面も磨滅しているが布目が認められる。側面は斜めに落とす。玉縁は筒部と一体で成形され、段部に粘土を充填する。37は厚さ1.9cmで、凸面はナデ消しているが、一部に縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は36に比べるとやや粗い布目が残る。側面は水平である。36は側面近くに玉縁端から筒部端にかけて幅0.8cm前後の圧痕が認められ、37も同様の圧痕が認められる。胎土は石英、長石を多く含んでおり、色調は36は灰色、37は暗緑灰色を呈し、軟質である。

#### 平瓦（38～41）

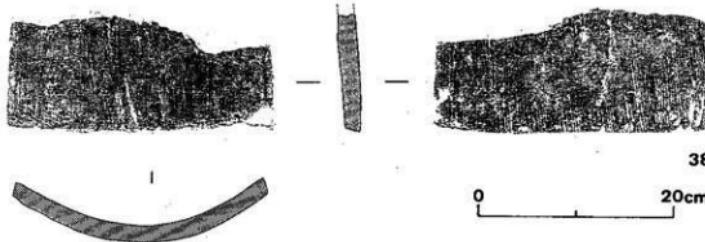
38・39はT4、III層、40・41はT3、II層出土。38は広端幅25.2cm、厚さ1.7cm、39は全長35.8cm、広端幅25.7cm、厚さ1.5～1.7cm、40は厚さ2.3cm、41は厚さ2.1cmである。凸面はいづれも縦方向の繩目タタキが認められ、凹面は39は磨滅のため明らかでないが、他は布目



36



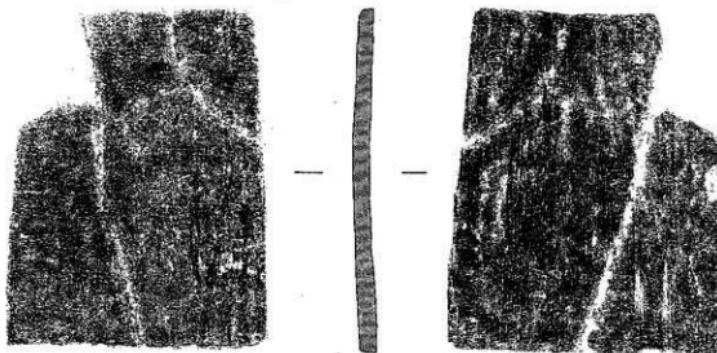
37



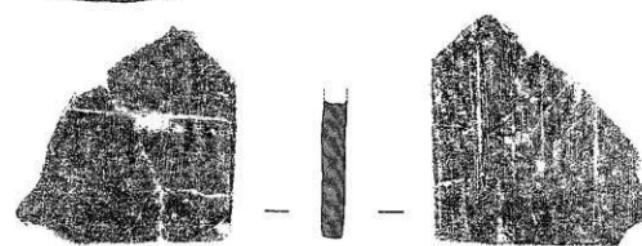
38

0 20cm

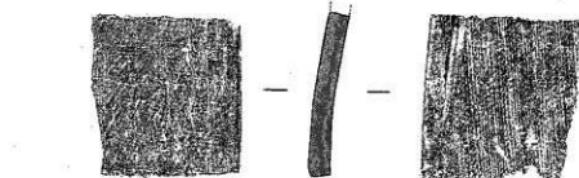
第35図 第2次調査出土丸瓦・平瓦(1)



39



40



41

0 20cm

第36図 第2次調査出土平瓦（2）

を残す。38・41は側縁から0.6~0.8cmはナデを施し、特に41は面取り状になる。40は側縁まで布目が認められる。側面はヘラケズリを施す。色調は38・39は黒灰色、40・41は灰色を呈し、胎土は石英、長石を含み、39は軟質であるが他は硬質である。また、40の凹面で広端面から14cm程に紐状の圧痕が横断しており、布の縫目部分かと考えられる。

#### 須恵器杯（第31図13）

T3、IV層出土。口径17.7cm、器高5.6cmであり、底部端近くに直立気味の高台を付す。体部はほぼ直線的に外上方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。底部はヘラ切り後、横ナデを施し、他も横ナデを施すが、全体の調整は丁寧に施している。胎土は精緻で、色調は灰白色を呈する。

#### （4）小結

第2次調査地点は平窯群の前面部分にあたり、昭和61(1986)年度の試掘調査の結果から吉志部瓦窯にともなう造瓦工房の存在が予想された地点であった。調査地点南半（下段）部では池の北岸部分を検出し、現在の公園造成前の小路新池の一部と考えられたが、後世の開発等による削平・攪乱により遺構及び明確な遺物包含層は確認されなかつた。

北半（上段）部分は平窯前面に接する地点であり、設定した5ヶ所のトレンチの内T5は後世の削平・攪乱等のために明確な遺構は確認されなかつたが、他の4ヶ所のトレンチ（T1~T4）において吉志部瓦窯操業期の土坑及び柱穴等の遺構を検出するとともに、古墳時代・奈良時代・平安時代の遺物が出土した。吉志部瓦窯操業期の遺構面は南の沖積平野に向う緩やかな斜面に造成を行い、2段にわたる作業場を形成している。上段部分では土坑、回転台跡、下段部分では水溜、粘土溜等の可能性の考えられる土坑、回転台跡3基を検出したが、下段の回転台跡は規模、間隔はほぼ等しい。他に全域で柱穴が検出されていることから、掘立柱建物が存在したものと考えられるが、部分的な調査であることから全体の復原はできず、規模、構造等は明らかでない。当該期の遺物は瓦が主であるが、いずれも2次堆積の資料である。

吉志部瓦窯操業期以外の明確な遺構は検出されなかつたが、6世紀後半から7世紀初頭にかけての須恵器が比較的まとまって出土している。他には奈良時代の瓦及び11世紀中頃と考えられる黒色土器B類碗が出土した。奈良時代の瓦は当該地東方200mに所在する七尾瓦窯跡で生産されたものであり、他の吉志部瓦窯工房の調査においても七尾瓦窯で生産された瓦が出土していることから、七尾瓦窯の工房が吉志部瓦窯工房の地点に重複していることが明らかとなつており、今回の調査での七尾瓦窯の瓦の出土も同様のことを示すものと考えられる。

また、黒色土器の出土についてはやはり、工房跡の調査で当該期の建物跡を確認していることから、調査地点にも当該期の遺構の展開することが考えられるものである。

### 3. 第4次調査

#### (1) 調査の経過

調査地は、昭和61(1986)年度に一部発掘調査を行っており、そこで回転台跡等が確認されたことから、今回の発掘調査でも瓦窯工房関連の遺構・遺物の検出が期待された。

発掘調査は平成12(2000)年7月24日から8月29日にかけて実施し、当初は8か所の調査トレンチを設定して行っていたが、昭和61(1986)年度の調査で検出した遺構の現況を確認するために、後にもう1か所トレンチを設けて、最終的に9か所のトレンチにおいて遺構・遺物の包蔵状況を確認した。各トレンチの調査面積は、T1:11m<sup>2</sup>、T2:38m<sup>2</sup>、T3:45m<sup>2</sup>、T4:56m<sup>2</sup>、T5:53m<sup>2</sup>、T6:23m<sup>2</sup>、T7:29m<sup>2</sup>、T8:72m<sup>2</sup>、T9:5m<sup>2</sup>である。

#### (2) 調査の成果

##### a. 基本土層序

調査地内の土層序は、トレンチによって異なるが、基本的に次のような層順をもって認められた。I層：盛土・旧耕土・攪乱層、II層：黄灰色粘土と灰色砂質土の混合層、III層：黄褐色砂質土層、IV層：灰色砂質土（褐色混じる）層、V層：茶褐色砂質土層、VI層：灰褐色砂質土を主とする土層、VII層：落ち込み内堆積土でVI層とほぼ同質の土層、VIII層：黄灰色粘質土・シルト質粘土層。

これらのうち、T4・T5で認められたII層については調査地北西部にかつてあった池の埋土（現代）に相当するものとみられる。また、IV層中には中世の遺物を若干含み、VI層中においては吉志部瓦窯で生産された瓦片を中心とした遺物が多量に含まれていたが、トレンチによつてはやや時代の下る平安時代後期～鎌倉時代の遺物も認められた。そして、地山層としてVIII層が認められ、それをベース面として遺構が検出された。

##### b. 各トレンチの状況

###### (T1～3)

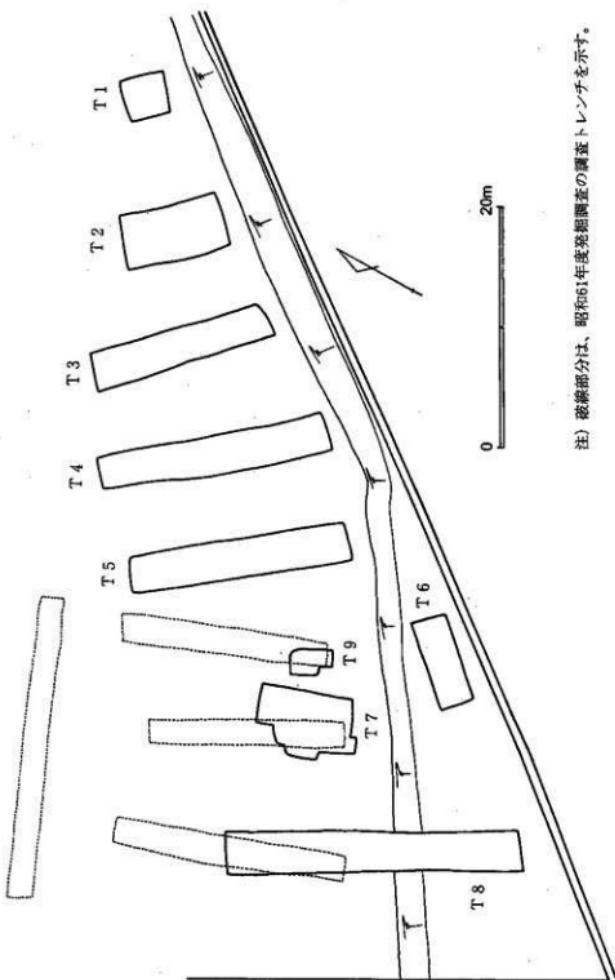
これら3か所のトレンチでは、盛土層直下において地山層が認められ、遺構・遺物については検出されなかった。特に、T2・T3では、その南側部分がかつて当地に建っていた建造物によって旧来の地形が大きく削平されており、攪乱層のみが認められた。

###### (T4)

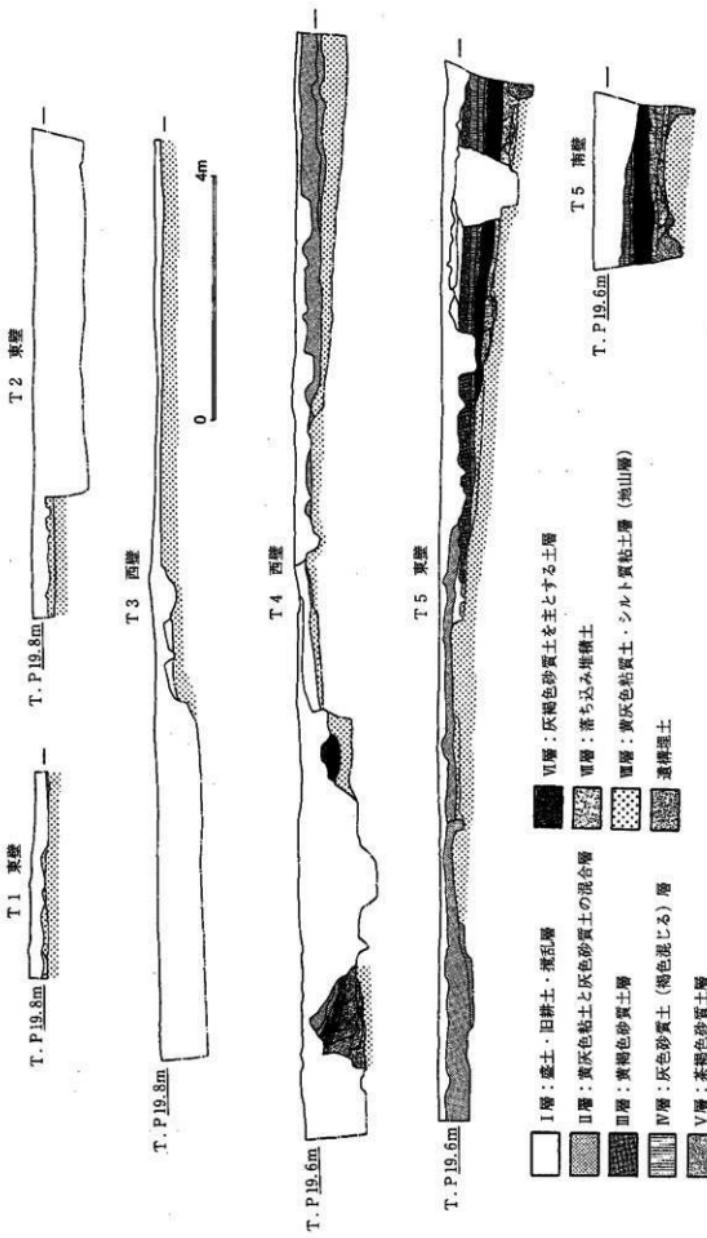
トレンチ北側では、盛土層下において池の埋土と考えられるII層の堆積、そして地山層が認められたが、池の埋土とすることもあって遺構については検出されなかった。そして、トレンチ中央付近においては、盛土・旧耕土層下に地山層が認められ、地山面上にピット5基と溝1条が検出された。

ピットについては、P1～3がピット中心から約1.8mの間隔で、N18°Wの方位をもつて

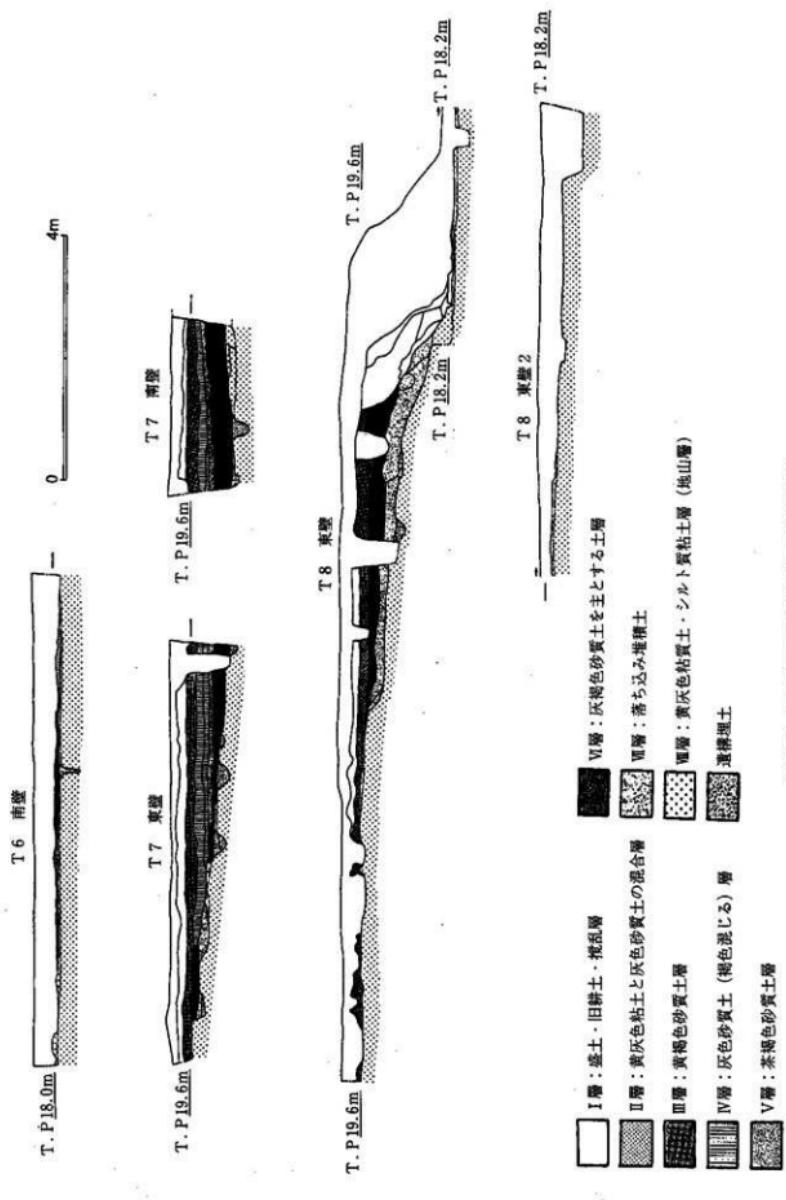
第37図 第4次調査調査トレンチ配置図



注) 複数部分は、昭和61年度発掘調査の調査トレンチを示す。

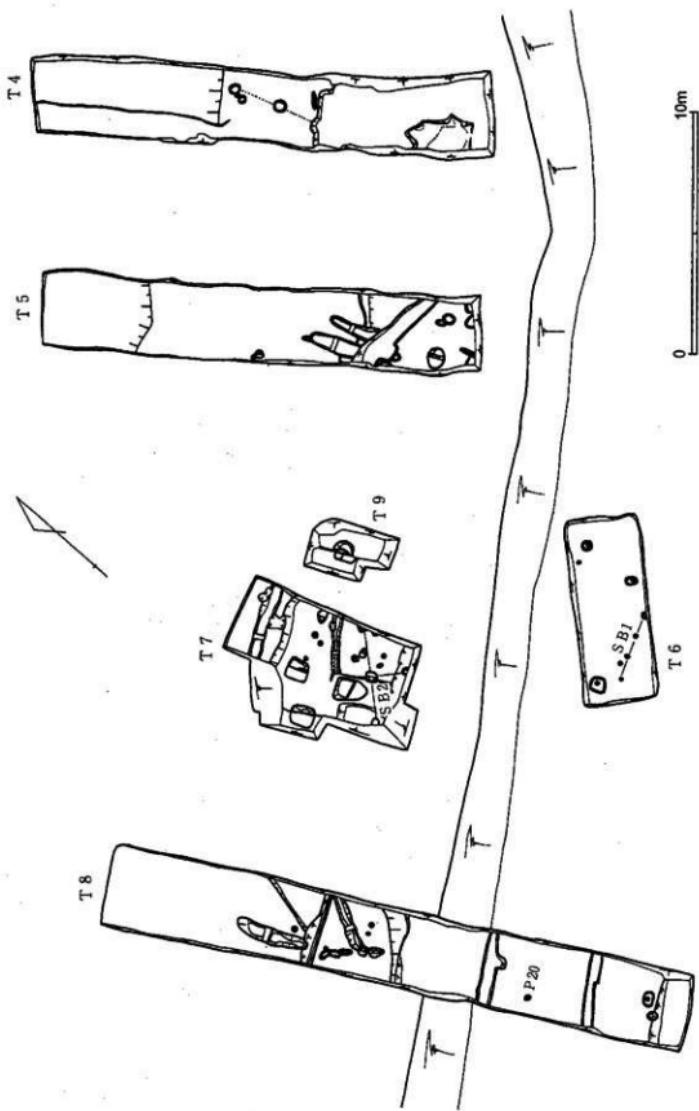


第38圖 第4次調査調査区土壤断面図 1

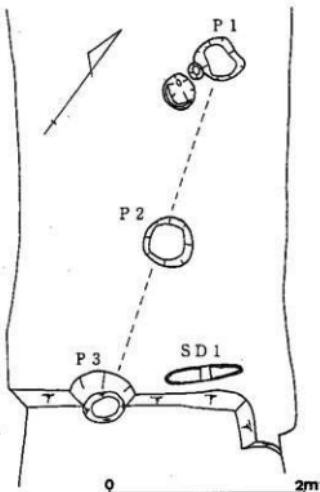


第39図 第4次調査調査区土層断面図 2

第4圖 第4次調查 T 4 ~ T 9 連續平面圖



並ぶが、これが建物跡などとして展開するものかどうかについての確証は得られなかった。P 1 は径約 45 cm、深さ約 10 cm を測り、P 2 は径約 50 cm、深さ約 17 cm を測った。また、P 3 についてはその南半分が擾乱を受け、また近現代のものと思われる木杭がちょうどピット中心付近に打ち込まれていたため、その深さなどは不明であるが、残存部分で径約 60 cm を測った。また溝 (SD 1) については、長さ 80 cm、深さ約 2 ~ 3 cm を測り、N49° E の方位をもってのびていた。ところで、トレンチ南側部分については大きく擾乱を受け、旧地形がすでに削平されていたが、トレンチ南西隅において一部擾乱からまぬがれた状況で、落ち込み状の様相をもって灰褐色砂質土を主とする土層の堆積が認められた。そして、その下部において吉志部瓦窯の瓦片がまとまって検出された。



第41図 第4次調査 T 4 中央遺構平面図

#### (T 5)

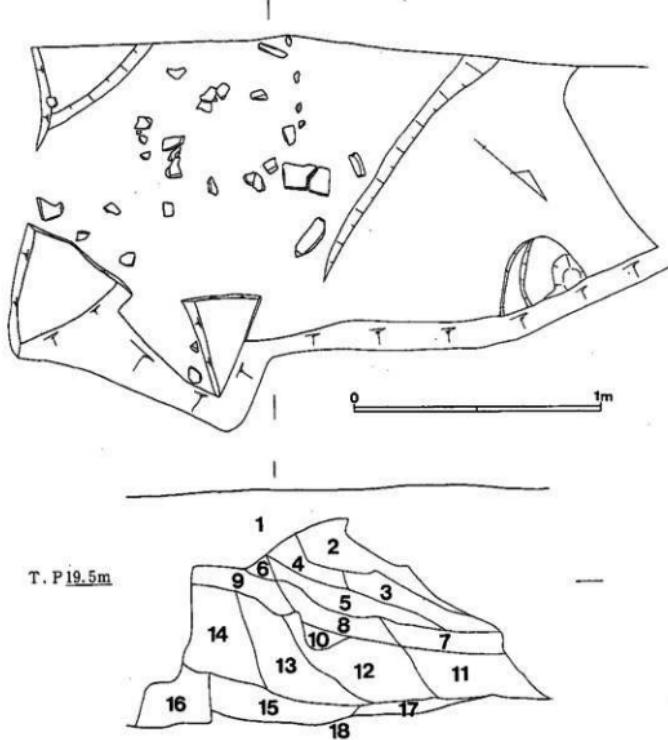
トレンチ北側においては、盛土層、池の埋土であるII層、地山層の堆積がみられ、T 4 と同様、遺構については検出されなかった。そして、トレンチ中央付近から南側にかけては地形的に落ち込み、そこにIII~VI層の堆積が認められ、VI層内において多数の瓦片とともに土師器・須恵器などが認められた。そしてVI層下においてピットや溝などが検出された。

落ち込み 1 は、トレンチ中央付近から地形的に落ち込んでいく中にあって、段をなす部分（段差約 6 cm）が認められた。段は検出範囲で N47°~77° E の方位をもってのび、その段より南側の落ち込み内地山面上においてピットや土坑などが検出された。その中で主なものをあげると、SK 3 は長径約 80 cm、短径約 60 cm の楕円形を呈し、深さ約 50 cm を測った。また、P 4 ~ 6 はトレンチ南端で部分的に検出されたものであるが、P 4 と P 6 は深さ約 40 cm、P 5 は深さ約 15 cm を測った。

この他、落ち込み 1 肩の北側においては、落ち込み 1 に向かって、これに重複する形でのびる溝が検出された。SD 2 は幅約 50 cm、深さ約 5 cm、方位 N17° W を示し、SD 3 は幅約 60 cm、深さ約 5 cm、方位 N25° W をもってのびていた。これら溝の南端部分については擾乱によつて不明である。また、SD 3 の北端には小溝 (SD 4) が重複して認められた。

#### (T 6)

T 6 はテラス状に造成された調査地の下段に設定したトレンチである。ここでは、盛土層下にごく薄く II 層、III 層、VI 層が堆積し、その下位において地山層が認められ、ほぼ平坦面をなす



- |  |   |  |
|--|---|--|
| 1. 深紅・赤土                               | 9. 黄褐色砂質土と灰褐色砂質土の混合層(細かい)                 | 15. 黄褐色砂質土<br>(細かい、より大粒の褐色層がまばらに混じる)     |
| 2. 黄褐色砂質土(灰色調)                         | 10. 灰褐色砂質土(細かい、やや厚)                       | 16. 黄褐色砂質土<br>(細かい、やや厚、より大粒の褐色層がまばらに混じる) |
| 3. 灰色砂質土(細かい、褐色が多く混じる)                 | 11. 灰褐色砂質土<br>(細かい、やや厚、粗めの褐色層がややまとまって混じる) | 17. 黄褐色シルト質砂質土(褐色混じる)                    |
| 4. 高灰褐色砂質土(細かい)                        | 12. 灰褐色砂質土<br>(細かい、やや厚、粗めの褐色層がまとまって混じる)   | 18. 黄褐色シルト質砂質土                           |
| 5. 高灰褐色砂質土(細かい)                        | 13. 灰褐色砂質土<br>(細かい、大粒の褐色層がまばらに混じる)        |  |
| 6. 黄褐色砂質土(細かい、褐色斑少量混じる)                | 14. 灰褐色砂質土<br>(細かい、やや厚、大粒の褐色層がまばらに混じる)    | ◎ 10 ~ 17 層が落ち込み状遺構埋土に相当                 |
| 7. 淡褐色砂質土<br>(細かい、やや厚、大きめの褐色層がまばらに混じる) |   |  |
| 8. 淡褐色砂質土<br>(やや厚、やや濃)(粗めの褐色層がまとめて混じる) |   |  |

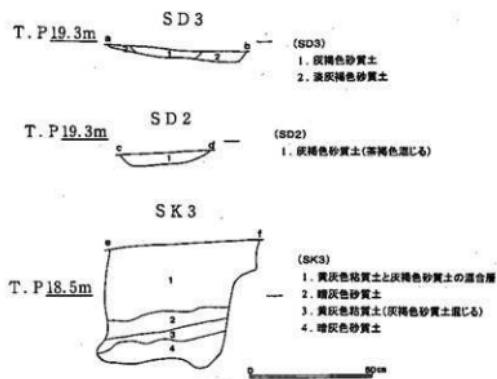
第42図 第4次調査 T 4 落ち込み状遺構平面図・西壁断面図

地山面上において9基のピットが検出された。このうち、4基のピット（P 7～10）がN67° E の方位をもって一列に並ぶのが確認され、このピット列については、平成7（1995）年の発掘調査において検出された建物跡に関する可能性をもつものであることがわかった（SB 1）。これらのピットは、P 7は径約30cm、深さ約35cmとやや大きく、P 8は径約20cm、深さ約15cm、P 9は径約15cm、深さ約30cm、P 10は径約15cm、深さ約14cmを測った。そしてP 7とP 10の間が約2.8mを測り、各ピット間は90cm前後を測った。

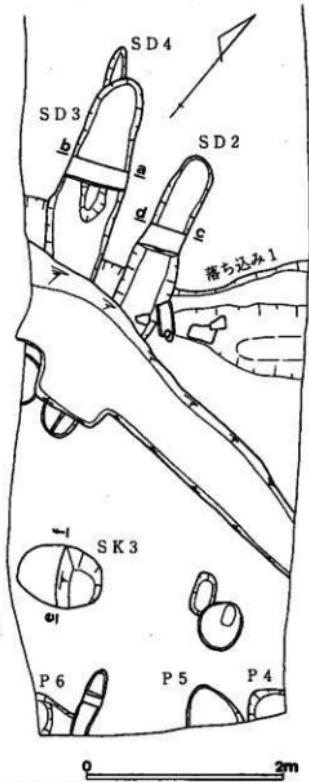
この他、柱痕の認められるピットが3基検出された。P 11は約40cmの円形の掘り方をもち、深さ約15cm、柱痕の径約20cmを測った。P 12は一辺50～70cmの方形の掘り方をもち、深さ約20cm、柱痕の径約15cmを測り、P 13は約40×30cmの方形の掘り方をもち、深さ約25cm、柱痕の径約15cmを測った。

#### （T 7）

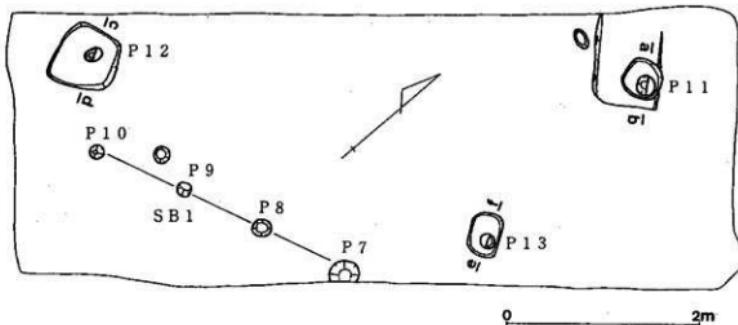
盛土層以下、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層の堆積が認められたが、ここでは、トレチの北側から南側へ緩やかに落ち込み（落ち込み2）、落ち込み内の地山面上で、溝やピット、土坑などの遺構を検出した。



第43図 第4次調査 SD 2・SD 3・SK 3断面図



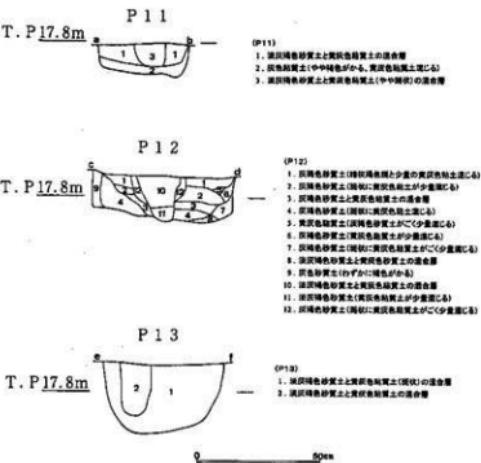
第44図 第4次調査 T 5南側遺構平面図



第45図 第4次調査T6遺構平面図

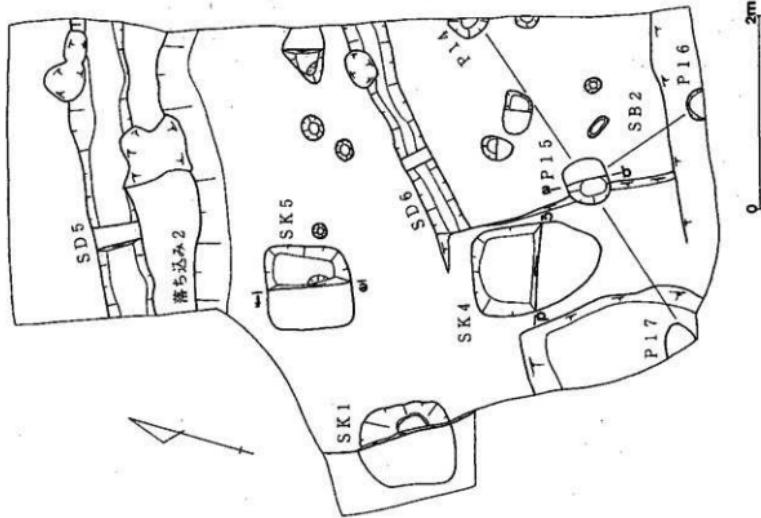
落ち込み2は、トレンチ北側約1/4付近で約15cmの段差をもって、N66°Eの方位でのびる肩部が認められた。また、落ち込み2の北側においては、それと平行してのびる溝(SD5)が検出された。SD5は幅約50~60cm、深さ6~25cmを測り、概して東側が深くなっていた。また落ち込み内においても、東西方向にのびる溝が1条検出された。SD6は幅約30~40cm、深さ10~20cmを測り、これも東側が深かった。その方位はN50°Eを示し、落ち込み2などと比してやや北側に傾いていた。

この他、トレンチ南側においては、建物跡と考えられるピットの並びが確認できた(SB2)。これを構成する4基のピットのうちP17については、昭和61(1986)年度の調査で回転台跡の可能性をもつ土坑として検出されたものであるが、今回建物跡を構成する柱穴であることが確認できた。P14・P16・P17については部分的な検出であったが、P14は深さ20cm、P16は深さ30cmを測った。またP15については長径50cm、短径40cmの隅丸方形を呈し、深さ50cm、柱痕については断面観察から径13cmを測った。またP14・P15間とP15・P17間はそれぞれピット中心から約2m、P15・P16間は約1.4mを測り、その方位はN41°Eを示していた。



第46図 第4次調査P11・P12・P13断面図

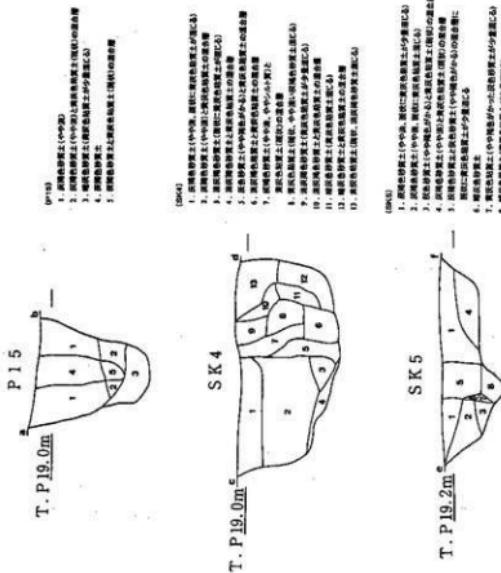
第47図 第4次調査T7遺構平面図



2m

0

第48図 第4次調査P15-SK4-SK5断面図



50cm

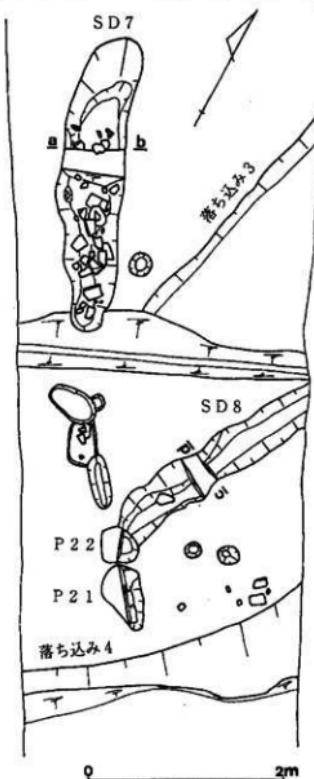
また、T 7では、P 17を含めて昭和61(1986)年度の調査で検出した土坑を再確認するために、その西側部分を拡張した。その結果、P 17のほかSK 1を再確認した。前回これらは調査トレーニングの端にかかる形で部分的な確認にとどまったが、今回SK 1については平面的にその全形を確認し、長径約1m、短径約80cmの隅丸方形を呈していることを確認した。

さて、SK 1については瓦製作の回転台跡と考えられているが、T 7においてはSK 1と平面形が類似する土坑がほかに2基検出された。SK 4は長径約1.3m、短径約90cmのやいびつな卵形を呈し、深さ約40cmを測る。SK 5は一辺約80cmの方形を呈し、深さ約25cmを測った。この2基の土坑については、各土坑の中央付近に柱痕状の土の堆積状況が観察されたが、一般的に回転台跡の掘り方断面は椀状の形態をもち、軸付近が土によって補強されるということを考えると、この2基についてはその点が付合せず、これを回転台跡と断定するにはためらいがある。

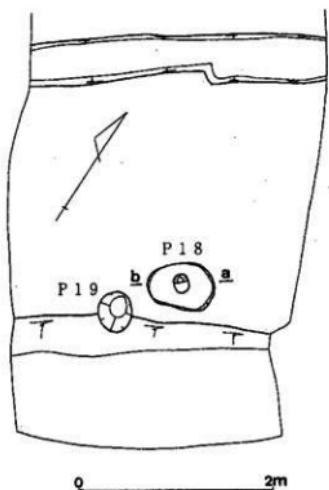
#### (T 8)

T 8はテラス状の調査地を南北方向に横切る形で設定したものである。テラス上段部においては、その北側部分で盛土層下にて地山層が認められ（部分的にⅢ層を挟む）、中央北より付近から南側にかけて落ち込んでいき、そこにⅢ・VI層の堆積が認められた。そして、これらの土層および地山層をある程度切り込む形で土が盛られ、現在調査地にみられるテラス状の段差が整えられていた。また、テラス下段部においては、盛土層直下に地山層が認められた。

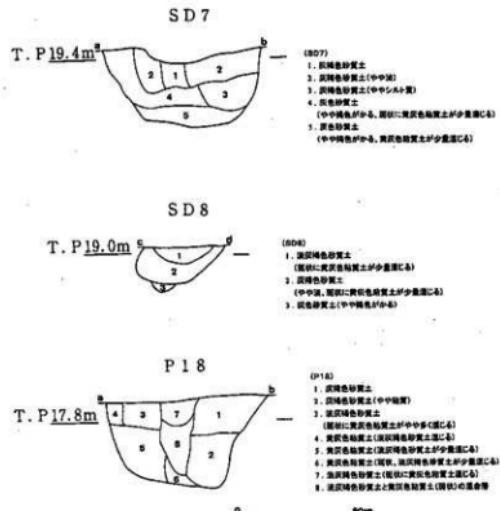
この落ち込み地形においては、地面上にて段をなす部分が2か所認められた。まず、北側の段については約20~25cmの段差をもって、N 15° E の方位でのびていた（落ち込み3）。そして、この落ち込み3より南側はなだらかに傾斜するが、トレーニング中央付近で段差約20cm、方位N 45° E をもって緩やかに段をなすのが認められた（落ち込み4）。そして、落ち込み3より南側はVI層とほぼ同質の灰褐色砂質土の堆積が認められたが、落ち込み4肩部の北側2.5m付近からはややその土色が淡くなり、そこからは平安



第49図 第4次調査 T 8 中央遺構平面図



第50図 第4次調査 T 8 南側遺構平面図



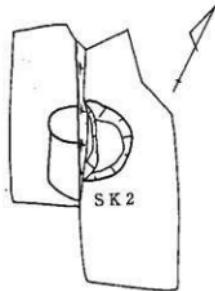
第51図 第4次調査 SD 7・SD 8・P18断面図

時代後期のものとみられる瓦器片が検出された。

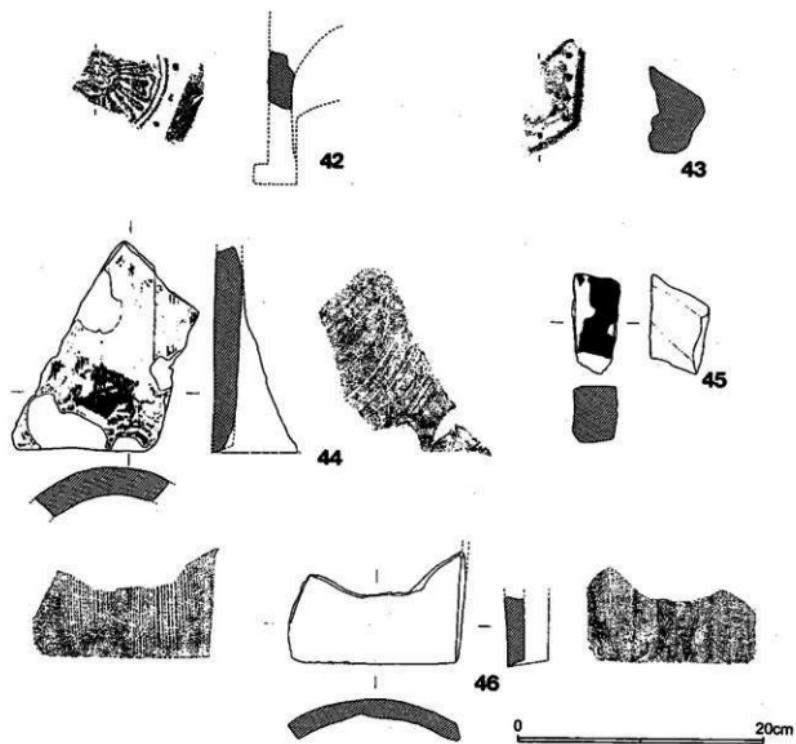
さて、ここでは落ち込みのほか、溝やピットが検出されたが、SD 7は、落ち込み3の北側のやや平坦な地山面からN $27^{\circ}$  Wの方位をもってのび、その南端が攪乱を受けて明確でないが、幅約60cm、深さ約30cmを測った。そして、SD 7内においては、吉志部瓦窯の瓦片が多数まとまって検出された。またSD 8は、幅約40~50cm、深さ約12cmを測り、N $30^{\circ}$  Eの方位をもってのびていた。

このSD 8からは瓦器片が検出された。

ピットについては、柱痕が認められるものとしてP18があった。P18は長径約70cm、短径約45cmの橢円形を呈し、柱痕の径は約15cmで、深さ約35cmを測った。また、P19はその南北分が攪乱を受けていたが、残存径約30cm、深さ約55cmを測り、しっかりと掘り込まれ、これも柱穴であろうと考えられる。この他、P20~22については柱穴かどうかは明確でないが、ここからは吉志部瓦窯操業期よりも時代の下る遺物が検出された。



第52図 第4次調査 T 9 遺構平面図



第53図 第4次調査遺物実測図 1

(T 9)

T 9は、昭和61(1986)年度調査で検出した土坑を確認するために設けたものである。前回は土坑の半分を確認したのみであったが、今回その全形を確認し、土坑(SK2)の上にピットが切り合うことが確認された。SK2は長径約1m、短径おおむね80cmを測り、掘り方は隅丸方形を呈するとみられる。また、ピットについては径約40cmを測った。

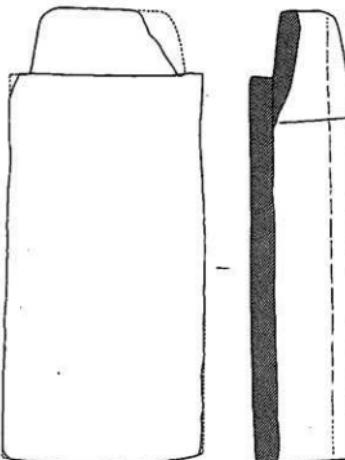
#### c. 遺物

吉志部瓦窯で焼かれたとみられる瓦を中心に遺物が検出されたが、瓦のほとんどは、焼成後の不良品が廃棄されたものと考えられ、焼成があまく、摩滅したものが多かった。また、吉志部瓦窯操業期の遺物だけでなく、七尾瓦窯の瓦をはじめとして、古墳時代から鎌倉時代にかけての須恵器や土師器、瓦器なども検出された。

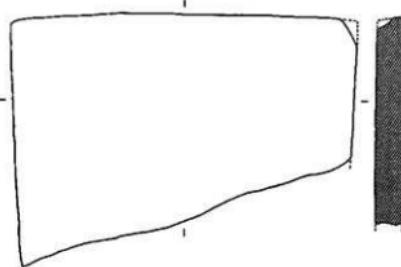
[瓦：第53～55図]

瓦当は、軒丸・軒平各1点の出土があつた。42は、T8第V層出土の単弁八葉蓮華紋とみられる軒丸瓦の破片である。摩滅が進み、中房内の蓮子はすり切れているが、内区と外区は二重の界線によって区切られているのが認められる。43は、T5落ち込み1上面で検出した軒平瓦の破片である。これも摩滅がはげしく、内区部分が欠けており、その紋様構成は明らかでないが、珠文の並びから、吹田市史第8巻で吉志部瓦窯既出資料を分類したところのKb3に当たるものと考えられる。

44は、T8第VI層出土の縦釉丸瓦である。凸面に釉薬が残り（トーン部分）、凹面と先端部分にもわずかに釉薬が付着する。素地は淡黄橙色を呈し、軟質に焼き上がる。凸面の一部には縦方向の繩目が残るが、そのほとんどはナデ消されている。凹面は布目痕と糸切り痕が認められる。先端部はへラ状のものでナデられ整えられている。



47

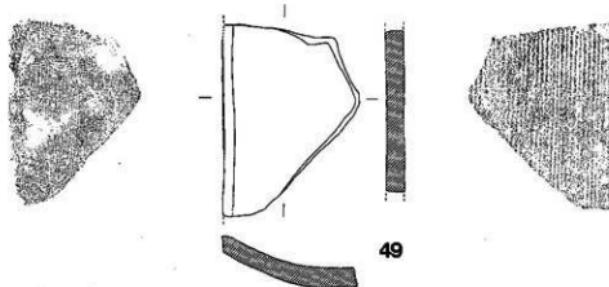


48

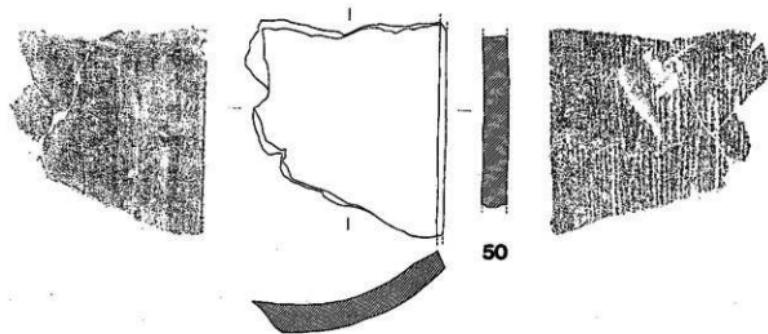


0 20cm

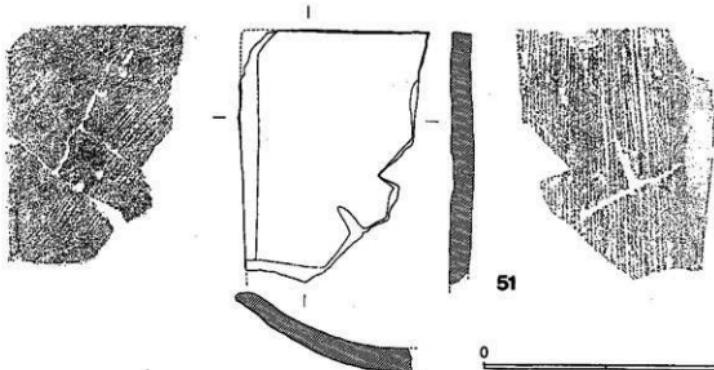
第54図 第4次調査遺物実測図2



49



50



51

0 20cm

第55図 第4次調査遺物実測図3

45は、T 5 落ち込み1内出土の瓦質製のブロック状の破片である。1面だけが残存し、表面に炭素が吸着している(トーン部分)。形状からすると、軒平瓦の瓦当側縁部か瓦磧ではないかと考えられるが明確でない。

46も、T 5 落ち込み1内出土のもので、熨斗瓦とみられる。1枚の平瓦を縦に半切しており、左側縁部が半切部にある。そして、右側縁部の断面の形状からみると、1枚作りによるものと考えられる。部分的にナデ消されているが、凸面に縦方向の繩目、凹面にやや細かめの布目がよく残る。焼成はたいへんよく焼き締まり、須恵質に焼き上がっている。焼成具合と繩目・布目の様子からすると、七尾瓦窯で焼かれたものであると考えられる。

この他、平瓦と丸瓦については、出土量として一番多いものであったが、摩滅した細片が多く、ここでは比較的残存状態の良いものを図化した(47~51)。47~49についてはT 5 落ち込み1の上面で検出されたもので、50はT 5 第IV層出土、51はT 6 第III層出土のものである。48は、凸面に縦方向の繩目の痕跡は認められるものの、凹面については、摩耗がはげしく調整は不明である。47・49~51については、凸面に縦方向の繩目、凹面に布目が残るが、47については摩耗がかなりはげしい。また50の凹面については、広くナデ消されている。

#### [土器：第56図]

14~16はT 5 落ち込み1より出土したものである。14は、須恵器平瓶の体部である。底部外面はナデ、体部外面下部についてはヘラケズリ、それより上の肩部まではヨコナデ、肩部から上はナデ調整がなされている。また、内面はヨコナデ調整が施されている。そして、体部上面に、わずかながら頸部と把手の接合部の痕跡が認められる。

15は、土師器高杯の脚部である。摩滅のため、その面数は明確でないが、約1.2~1.8cmの幅をもって面取りがなされている。

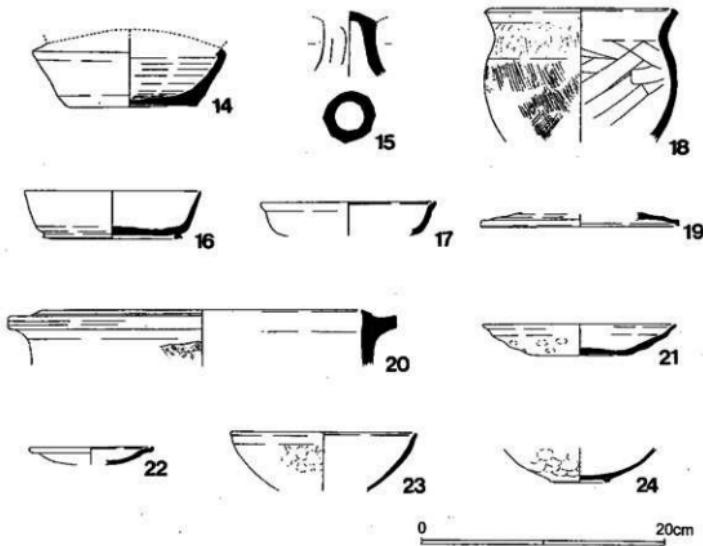
16は、須恵器杯である。復元径14.2cmを測る。断面形が台形を呈する高台がつく。底部外面はヘラ切りの痕跡をとどめるが、他は内外面ともヨコナデによって調整されている。

17は、T 6 P11出土の土師器杯である。復元径14.4cmを測る。口縁端部がやや外反し、沈線が入る。内外面とも摩滅がはげしく、調整が明瞭でないが、口縁部については内外面ともヨコナデ調整されている。ミガキ調整・暗紋等の有無は不明である。

18は、T 5 第IV層出土の土師器甕であるが、かなり硬質に焼き締まっている。復元径15.3cmを測る。体部から口頸部にかけての外面は縦方向のハケ調整がなされているが、口頸部についてはハケ調整の後、指押さえ、そして軽くヨコナデされている。また口縁外面上半から内面にかけてもヨコナデ調整され、口縁端部については、強くナデすることによって端面を作っている。体部内面については、不定方向のナデ調整が施されている。

19は、T 7 地山上面で検出された須恵器杯蓋である。復元径16.2cmを測る。内外面ともヨコナデ調整されている。

20は、T 5 P 5出土の土師器釜である。細片のため必ずしも正確とはいえないが、復元径26.1

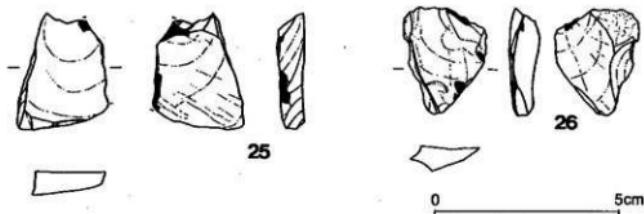


第56図 第4次調査遺物実測図4

cmを測る。口縁端部のすぐ下約5mmのところに鋸がめぐる。鋸部分から口縁部内外面についてはヨコナデ、内面の口縁より下はナデ、外面の鋸より下の部分については明瞭でないが、継方向のハケ目が認められる。

21・22は、土器器皿である。21はT 8 第II層出土のもので、復元径15.8cmを測る。口縁部はヨコナデによって外方に開き気味となる。その他の調整は明瞭でないが、内外面とも不定方向のナデ調整が施されているようである。外面には指押さえの痕跡も認められる。22は、T 8 地山上面で検出したもので、ての字状口縁皿のもっとも新しい段階のものである。細片のため正確な口径は不明であるが、おそらく10cm前後を測るものとみられる。口縁端部の調整はヨコナデによるが、そのほか外面は未調整、内面については不明である。

23・24は、瓦器碗である。23はT 8 P20内、24はT 8 第VI層出土のもので、ともに摩滅がはげしく、ミガキ調整を観察し得ないが、体部外面下部に指押さえの痕跡が認められる。また、23については、復元径15.4cmを測り、口縁端部に沈線があり、楠葉型のものであることがわかる。



第57図 第4次調査遺物実測図5

[石器：第57図]

T4北半の第II層内においてサヌカイトの剥片を2点検出した。25は、表面がネガティブ面、裏面がポジティブ面からなり、左側縁は折断されている。右側縁は欠損している。26も、表面にネガティブ面、裏面にポジティブ面が広く占める剥片である。裏面上部に原縁面がつき、左側縁部が折断されている。吉志部瓦窯では、これまでに旧石器・縄文時代の石器が検出されており、これも、そのいずれかに属するものであろうと考えられる。

以上、図化し得た範囲で遺物をみてきた。瓦については、46のように七尾瓦窯で焼かれた瓦が含まれており、土器についても、14~17が七尾瓦窯操業期のものとみられ、瓦以外では吉志部瓦窯操業期のものとみられる遺物は少なかった。土器18~19については、吉志部瓦窯操業期のものであろうと思われるが、七尾瓦窯操業期に属する可能性もあり、判断しかねる資料である。また、土器20~24にみると、瓦以外の遺物では、平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものが比較的多く含まれていた。以上のことは、図化できなかった遺物も含め、全体的な傾向としていえる。

(3) 小結

今回の調査では、調査地の東側に設定したT1~3において遺構・遺物は検出されなかつたが、その西側6か所のトレンチで吉志部瓦窯産の瓦を中心とする遺物とともに、多数の遺構を検出することができた。瓦については、主に焼成後の不良品が廃棄されたものと考えられ、そのほとんどが破片であった。また、吉志部瓦窯操業期だけではなく、時代幅のある遺物が検出された。そして、平成3(1991)年度および平成7(1995)年度の道路敷設に伴う発掘調査によって、当遺跡においては、中世(I期)・平安時代後期(II期)・吉志部瓦窯操業期(III期)・七尾瓦窯操業期(IV期)・旧石器時代(V期)の大きく5時期の遺構が展開していることが確認されており、今回検出した遺構についてもすべてが同時期のものではなく、数時期のものが混在していると考えられる。そして、これまでの成果を踏まえると、今回検出した遺構は、おおむね平安時代後期と吉志部瓦窯操業期の2時期にわたるものであろうと考えられる。以下、その状況をまとめると。

### [平安時代後期]

これまでの調査から、当期の遺構については、方位から2期（II a期・II b期）に細分されている。II a期はN48°~63° E (N32°~40° W)、II b期はN31°~39° E (N50°~57° W)の方位をそれぞれ示すが、大きな時期差はないといわれている。

今回の調査では、この時期の遺物を伴うものとして、落ち込み1・P5・P20・P22・SD8がある。落ち込み1ではての字状口縁皿片が検出され、落ち込み1下で認められたP5では土釜片が検出された。また、P22では黒色土器B類碗片、P20・SD8からは11世紀代のものとみられる瓦器片が検出され、SD8についてはN30° Eを示し、方位からII b期に属するものと考えられる。また、時期を特定するにあたっての明確な遺物は得られなかつたが、方位から当期に属する可能性が考えられるものに、SD1・SD6・落ち込み4（II a期）、SB2（II b期）がある。

なお、SD2とSD3については、その方位は次に述べる吉志部瓦窯操業期の遺構にみられる向きを示すが、これらは落ち込み1に重複すること、そしてSD3において少量の黒色土器B類片が検出されたことから、これも平安時代後期に属するものであろうと考えられる。

### [吉志部瓦窯操業期]

この時期は、当遺跡の中心となるものであり、当期の遺構の多くが瓦窯工房に関するものであろうと考えられる。そして、これも時期差は大きくないとみられているが、方位から2期（III a期・III b期）に細分され、III a期はN2°~8° E (N85°~87° W)、III b期はN66°~70° E (N11°~24° W)の方位を示す結果をこれまでに得ている。そして、今回の検出遺構を方位等からみると、落ち込み3がIII a期、SD7・落ち込み2・SB1がIII b期に属するものと考えられる。また、P1~3が一連のものとして並ぶとすると、これもIII b期に属する可能性がある。

しかし、遺構内から出土した遺物は細片が多く、時期を特定しがたい部分もある。T4で検出した落ち込み状遺構では、多数の吉志部瓦窯の瓦が認められ、これも当該期の遺構であるとみられる。しかし、ここからは黒色土器B類片・瓦器片が少量検出されており、これについては後に混入したものとみられるが、この落ち込み状遺構が二次的な堆積によるものであるという可能性も若干残されている。また、この他の土坑やピットの中にも黒色土器の細片などを含むものが若干あり、これらの中には時期的に下るものがある可能性も考えられる。

ところで、これまでの調査では、瓦窯工房が展開するにあたって、当地の北側から南側にかけて傾斜する地形が3段に造成されていることがわかっている。標高でいうと、下段面が15.7~16.7m、中段面が17.5~18.1m、上段面が18.3~19.0mのレベルで平坦面が造られている。そして、今回検出された落ち込み2・3についてみると、その段下の標高は19.2~19.3mとなり、レベル的にみると、これら落ち込みの段は、工房上段面を造成するにあたっての痕跡であろうと考えられる。

以上のように、今回の調査では、吉志部瓦窯工房関連の遺構のほか、平安時代後期の遺構についても検出することができた。調査地は、その北側に窯跡をひかえ、南側はこれまでの調査で工房跡の展開状況がかなり明らかになりつつあるところの中間地にあたる。昭和61(1986)年度の調査では調査地内で回転台跡が認められてはいたが、今回部分的ながらも、建物跡や造成の痕跡などを認めることができた。このことは、吉志部瓦窯の工房の展開や構造等を分析していく上での補完的資料となるものであり、今後、吉志部瓦窯の解明に寄与するものであろう。

ところで、前回の道路部分の発掘調査では、七尾瓦窯で焼かれた瓦とともに当該期の遺構が検出され、七尾瓦窯操業段階において、すでに吉志部瓦窯跡一帯は、瓦生産の一端を担う機能を有していたことがわかっている。今回の調査では、七尾瓦窯の瓦の出土はあったものの、明確な遺構については確認できず、七尾瓦窯操業期における新たな知見を得ることはできなかつた。しかし、七尾瓦窯操業期の遺物は検出されているのであって、当調査地内においても、七尾瓦窯関連の遺構が展開している可能性は十分あるといえ、今後の調査に期待したい。

## 第4章 まとめ

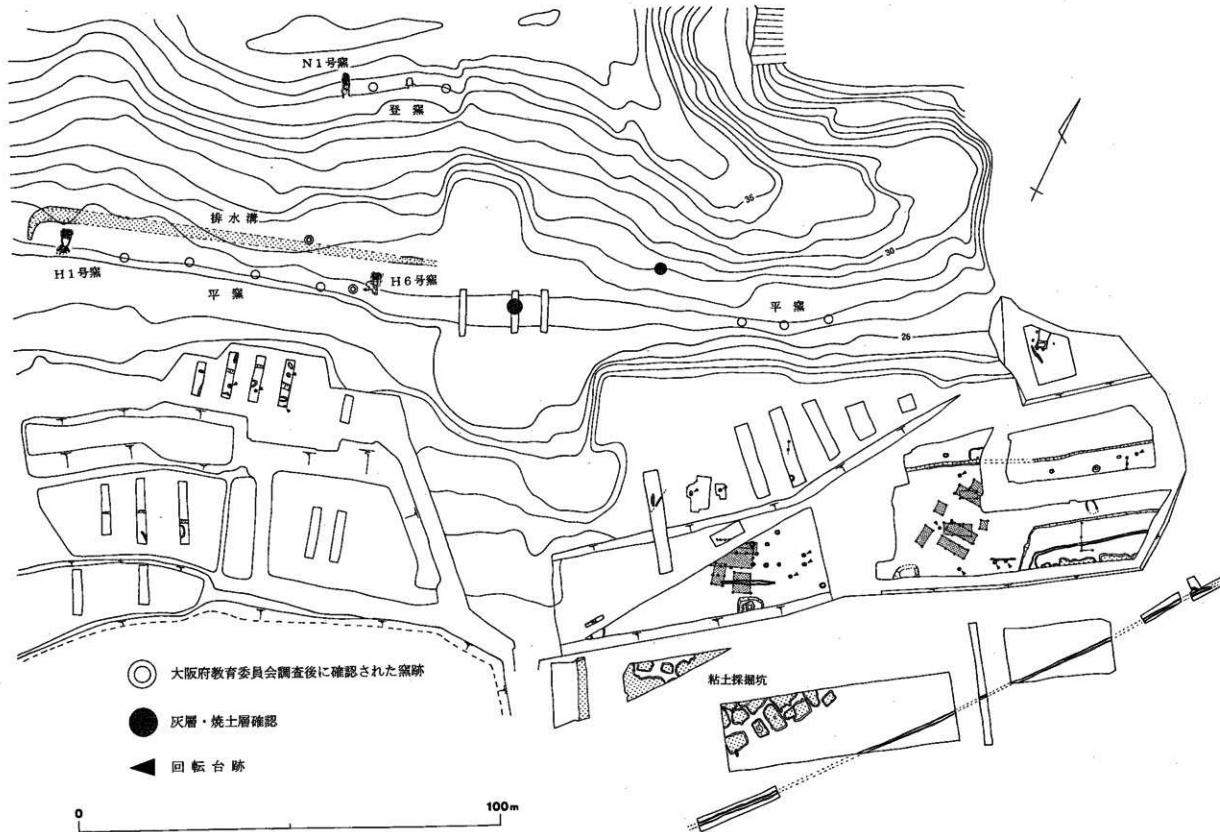
### 1. 第1次・3次調査

調査は史跡範囲北側に隣接する尾根部分を中心に主に古墳等の遺構の有無の確認を目的として試掘調査を行うとともに吉志部2号墳推定地において面的に調査を行ったが、古墳に関連する遺構は確認できなかった。尾根頂部については土砂の流出が大きく、地山層自体流出している状況であり、古墳関連の遺構は確認できなかったが、吉志部2号墳推定地の西約30mの谷部に設定したトレンチで古墳時代の須恵器が出土している。須恵器については他の地点で窯壁も出土しており須恵器窯の資料の可能性もあるが、一方、細片のため詳細は不明であるが埴輪の可能性が考えられる資料が出土している。また、平成8(1996)年に実施した吉志部神社防災施設設置に伴う確認調査で吉志部1号墳西側約13mの地点において遺構に伴うものではないがTK43型式の須恵器杯2点とともに須恵質の屋根形陶棺の蓋部分と考えられる破片が出土しており、吉志部1号墳よりやや先行する古墳の存在の可能性が考えられるものである。また、昭和62(1987)年度の調査においても須恵質の屋根形陶棺の蓋部分が出土しており『昭和62年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』(1988)、吉志部1号墳の調査において吉志部瓦窯構築に伴う造成により、一帯に展開した古墳の改变が想定されることからまとまった古墳の存在が推測されるものである。但し、吉志部2・3号墳については採集された須恵器壺、器台等からTK23型式に相当する時期と考えられるが、吉志部1号墳をはじめ他の資料からは6世後半から7世紀初めの古墳の存在が考えられ、その間の時期の古墳が存在するのか、別の造墓集団が存在するのかは、8世紀末から9世紀初の年代が考えられる吉志部火葬墓の存在を含めて、紫金山丘陵上の造墓活動については今後の資料の増加をまって検討していかざるを得ない状況である。

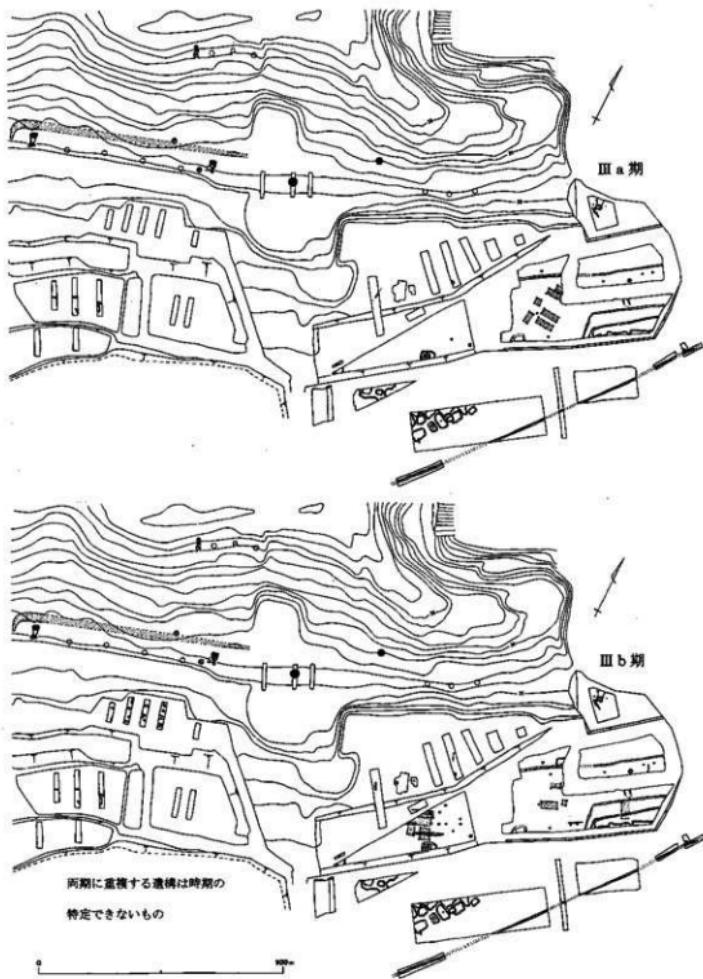
また、第1次調査土坑SK01で出土した土師器皿や第3次調査で出土した土師質土釜等の近世遺物については市内での出土例も少なく詳細は明らかではないが、出土状況等からは日常生活に使用されたものと考えるよりは、副葬品や藏骨器等の特殊な用途に使われた可能性が考えられるが、この問題についても今後の資料の増加をまって検討していきたい。

### 2. 第2次・4次調査（瓦窯工房の検討）

第2次調査は西側の平窯群の、第4次調査は東側の平窯群の前面部分の工房等の遺構の状況の確認を目的としたものであり、第2次調査では回転台跡4基、土坑6基、瓦溜等、第4次調査では回転台跡2基、溝1条、櫛ないしは建物跡の可能性の考えられるピット列等の工房に関連すると考えられる瓦窯操業期の遺構を確認した。第2次調査では南側の調査地点では後世の池の構築に際して大きく削平されており、第4次調査においても溜池の掘削、建物の建築等により調査地の北西部及び東半部近くは遺構面は削平されており全体の詳細な遺構の展開状況については明らかにできなかった部分が多いが、工房関連遺構については平成3・7(1991・1995)年度の調査も含めて東西280mの範囲について状況を確認した。



第58図 吉志部瓦窯工房全体図



第59図 吉志部瓦窯工房遺構の推移

平成3・7（1991・1995）年度の工房跡の調査報告では吉志部瓦窯操業期の遺構については掘立柱建物の主軸方位等からN85°～87°W及びN2°～8°Eに主軸方位をとるもの（III a期）とN11°～24°W及びN66°～70°Eに主軸方位をとるもの（III b期）に分けられた。重複関係にある掘立柱建物の柱穴1基の状況でしか確認できなかつたが、III a期の遺構が先行する時期のものと判断し、III b期については掘立柱建物の平面的な重複関係からさらに時期差が考えられた。III a期の掘立柱建物は規模や配置の状況が比較的統一のとれた展開を示すの対して、III b期では掘立柱建物は主軸方位を地形に合わせた展開となり、規模、配置も特に統一された状況を示すものではなくなる。

今回報告の調査ではトレント調査によるものであることから柱穴が確認されても建物全体が復原できたものではなく、状況は明らかでない。但し、土坑、回転台跡、溝の展開方位を検討するとトレント調査による部分的なものであることから、断定できるものではなく現段階での検討結果ではあるが、第4次調査T8落込み3の展開方位はIII a期、第2次調査土坑SK01、SK02、SK03、SK06の主軸方位や回転台跡P01、P02の展開方位から第2次調査で確認した遺構はIII b期と考えられるものが多く、第4次調査回転台跡SK1、SK2の展開方位、溝SD7、T4及びT6のピット列もIII b期に対応する時期のものと考えられる。

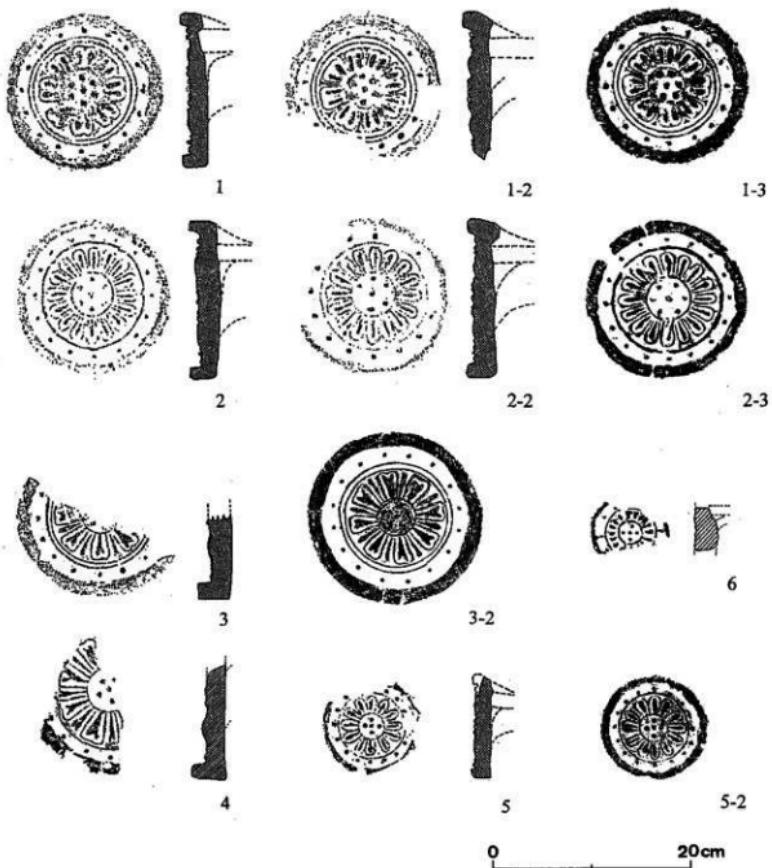
現段階での遺構の検出状況ではIII a期と考えられる遺構は調査範囲の東半部で掘立柱建物6棟が確認されているが、西半部では建物跡等明確な遺構は確認されていない。一方、III b期の遺構は掘立柱建物はIII a期よりさらに西側にも展開し、回転台跡等の遺構の展開状況もさらに広い範囲で確認される。III b期におけるIII a期の遺構の削平や後世の開発等による遺構面の掘削も考慮しなければならないが、遺構の検出状況からはIII b期において工房の拡充が考えられる。III b期の遺構については、遺構の重複状況から全ての遺構が1時期に展開したものではないが、出土遺物等からはそれほどの時期差は考えられず、短期間の内に展開していくことが考えられる。

### 3. 出土瓦の概要

軒瓦については、大阪府教育委員会による瓦窯跡の調査後の市教育委員会による工房跡等の調査において新たな範の資料を確認しており、現在、軒丸瓦は6種、軒平瓦は計6種が認められ、ここに吉志部瓦窯出土瓦の概要をまとめておきたい。但し、製作技法等の詳細な検討については別途報告したい。また、軒瓦の拓影等については瓦窯出土資料では細片しかないものについては平安宮跡等での調査出土資料を充てている。

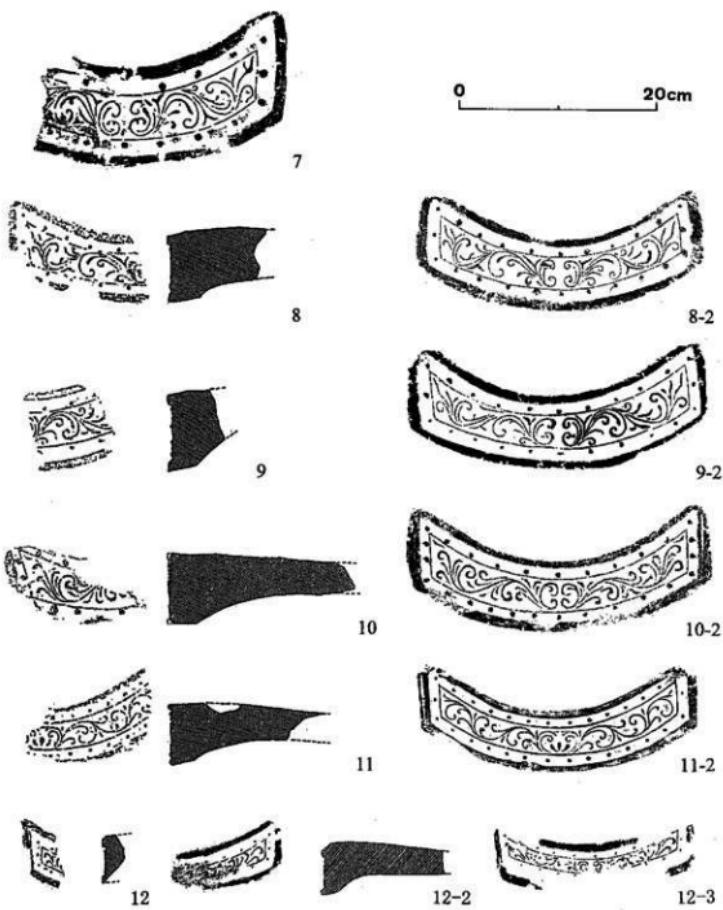
#### 軒丸瓦（第60図）

1は複弁八葉蓮華紋軒丸瓦で全径16.0～16.5cm、中房径3.5～3.9cmである。中房は段状にやや突出し、1+6の蓮子を配する。蓮弁はやや反りがみられ、内外区を分かつ界線は二重である。外区には珠紋16個を配する。中房部分に2条、平行線状の范傷が認められるものがある。



- 1・1-2・2・2-2・3・5：「吹田市史」第8巻（1981）  
 1-3・2-3・5-2：大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」（1968）  
 3-2：平安博物館「平安京古瓦図録」（1977）  
 4・6：「吉志部瓦窯跡（工房跡）」（1998）

第60図 軒丸瓦 ( $S=1:5$ )



7・11-2：大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」(1968)

8・9・10・11・12：「吹田市史」第8巻(1981)

8-2・10-2：平安博物館「平安京古瓦図録」(1977)

9-2：大山崎町教育委員会「大山崎埋蔵文化財調査報告書」第20集(2000)

12-3：(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「京都府遺跡調査概報」第78号(1997)

第61図 軒平瓦 (S=1:5)

大阪府教育委員会『岸部瓦窯跡発掘調査概報』(以下、概報)の端丸瓦I、平安博物館『平安京古瓦図録』(以下、古瓦図録)36に当たる。西賀茂瓦窯で同範の資料が確認されている(NS154A:平安博物館『平安京跡研究調査報告第4輯 西賀茂瓦窯跡』1978、以下同)。また、平安宮朝堂院跡の調査において蓮弁が二重の界線の内側に接するものとそうでないものがあることが指摘されるとともに瓦窯の調査では確認されていないが、胎土・調整から吉志部瓦窯産とされ、同紋ではあるが弁は細く、珠紋も小さく彫りが深く古い範の形態を留めているとされるものが1点出土しており(京都市文化観光局「平安宮朝堂院跡(HQ25)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度』1991)、複数の範の存在する可能性が考えられる。

2は単弁十六葉蓮華紋軒丸瓦で全径15.7~16.3cm、中房径4.3~4.5cmである。中房は平坦で蓮子は1+6、中房と内区を分かつ界線を有する。蓮弁の反りはわずかであり、太めの界線で画された外区には珠紋16個を配する。概報の端丸瓦II、古瓦図録の51に当たる。

3は単弁八葉蓮華紋軒丸瓦で全径は18.0~18.4cmであるが、天地に対して左右がやや長く、橢円形に近いものが認められる。中房径は3.8cmで、小粒の蓮子1+5を配する。蓮弁の先端が窪み、丸味をおびた撥形の間弁で、蓮弁の反りはやや強い。内外区を分かつ二重の界線を有する。珠紋帶には小粒な珠紋を蓮弁に対応して配する。焼成は他に比べて比較的良好で堅緻なものが多い。古瓦図録の48に当たる。

4は単弁八葉蓮華紋軒丸瓦。3とほぼ同紋であるが、内外区を分かつ界線が一重である。現在まで、工房跡の調査等で2点が確認されている。

5は単弁十二葉蓮華紋軒丸瓦で全径10.5cm、中房径2.6cmの小型のものである。中房に蓮子1+4を配する。内外区を一重の界線で画し、外区に16個の珠紋を配する。概報の端丸瓦IIIに当たる。軒平瓦1.2に対応すると考えられるものである。

6は単弁十七葉蓮華紋軒丸瓦で全径8cm、中房径2.4cmの小型のものである。中房は段を有さず、内区とは界線で画され、1+4の蓮子を配する。内区には先端が最もふくらむ素弁が17個雜に並ぶ。内外区を一重の界線で画し、珠紋は比較的広い間隔で配される。蓮弁や珠紋は界線と接しているものが多い。現在まで工房跡調査で2点及び平安京右京八条二坊の調査で1点確認されている((財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京発掘調査概報昭和63年度』1989)。

#### 軒平瓦(第61図)

7は均整唐草紋軒平瓦で吉志部瓦窯産の軒平瓦では最も大きなものである。中心飾りの対向するC字形の先端がもう一度軽く巻き込む。唐草は左右に2転半する。概報の端平瓦I、古瓦図録311に当たる。

8は均整唐草紋軒平瓦。軒平瓦1と紋様はよく似るが、中心飾りの対向するC字形の先端は巻き込んでいない、唐草は左右2転半する。西賀茂瓦窯等洛北の瓦窯では同範例はみられず、吉志部瓦窯独自の範である。概報の端平瓦II、古瓦図録312に当たる。

9は均整唐草紋軒平瓦。8と類似する紋様であるが、中心飾りの対向C字形の下端が、二叉

にわかれる。唐草は左右2転半する。また、右端の部分は唐草の枝葉の先端が水滴状になっている。古瓦図録313・314に当たる。

軒平瓦7～9については主葉の反転部分に楔形の副葉を配している。

10は均整唐草紋軒平瓦。中心飾りは対向するC字形で、左右に2転半する唐草を配し、右1転目の主葉と枝葉が接している。概報の端平瓦III、古瓦図録315に当たる。

西賀茂瓦窯で同範の資料が確認されている(NS205A)が、吉志部瓦窯出土資料の1点(10)に左端近くの上外区から脇区中ほどにかけて斜めに范傷が認められ、これは西賀茂瓦窯のものより范傷の進行した状況を示すと考えられるものである(高橋真希「平成6年度特別展「瓦一平安の都へー」余録』『吹田市立博物館 博物館だより』NO.4 1995)。

11は均整唐草紋軒平瓦。中心飾りは「小」字形をおき、左右に3転する唐草紋を配し、珠紋は小さい。概報の端平瓦IV、古瓦図録316に当たる。西賀茂瓦窯で同範の資料が確認されている(NS202A)。

12は均整唐草紋軒平瓦。上弧幅20cmの小型の軒平瓦で中心飾りは対向するC字形であるが、上端が外側に開く。唐草は小ぶりでやや伸びが悪いが3転し、先端を大きく巻き込む。古瓦図録414に当たる。小型軒丸瓦5とセット関係をなすものと考えられる。

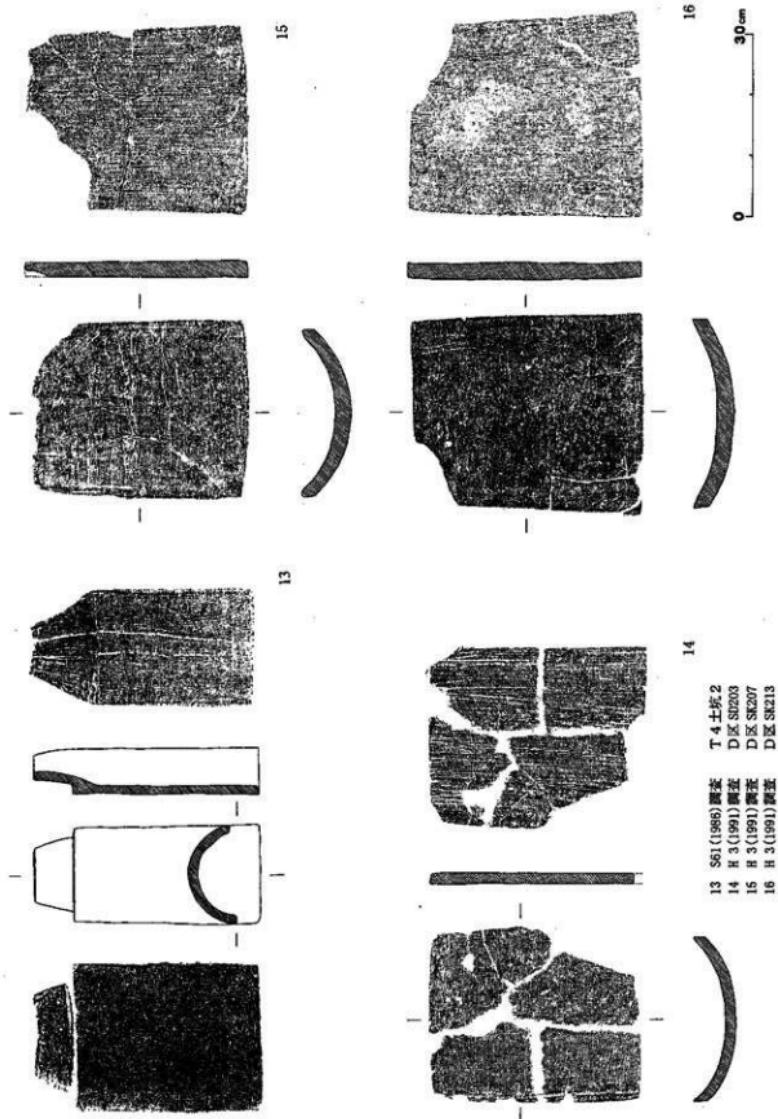
#### 丸瓦・平瓦(第62図)

ともに全体の判る資料数は少ないが、丸瓦は全長36.2～38.6cm、筒幅16～17cm、厚さ1.5～2.0cm、玉縁長5.4～7.2cm。玉縁は筒部と一体で成形され、段部に粘土を充填する。筒部凸面は繩目タタキを施すが、ナデ調整により消されているものが多い。凹面は布目がそのまま残る。玉縁凸面の両側面を筒部の端面方向からカットして面を持つものが多い。側面は水平のもの及び面取り状のものがある。

平瓦は成形は一枚作りで、寸法からは全長34.5～35.8cm、広端幅25.2～25.7cm、狭端幅23.3cm(推定値)、厚さ1.5～1.8cmのやや薄手のもの(14)と全長36.6～38.2cm、広端幅28.6～33cm、狭端幅26～29cm(推定値)、厚さ2.4～2.7cmのものがある(15・16)。また、各々に弧深5.2～5.7cmのものと4.0～4.2cmのものがある。凸面に繩目タタキ調整を施し、離れ砂がかかるものが多い。繩目タタキについては広端面から狭端面までとおるもので3cm当たり8～10条である。凹面は布目がそのまま残り1cm当たり縦7本、縦7～8本を数え、両側縁近くを面取り状にナデを施すもの、布端の圧痕が認められるものがある。

丸瓦、平瓦ともに胎土は石英、長石、金雲母等が目立ち、砂粒が均質に混じる。色調は灰色及び黒灰色を呈する。

第62図 丸瓦・平瓦 (S=1:8)



#### 4. 吉志部瓦窯産瓦の出土遺跡について

吉志部瓦窯跡で焼かれた瓦が出土している遺跡には、平安京城を除くと、高浜遺跡・都呂須遺跡・垂水南遺跡・吹田操車場遺跡（吹田市）、新庄遺跡（茨木市）、山城国府跡・白味才遺跡・堀尻遺跡（大山崎町）、百濟寺跡（枚方市）、若江遺跡（東大阪市）、長岡京などがある<sup>1)</sup>。ここでは、平安宮に供給することを目的に操業された吉志部瓦窯の瓦が、どのような背景をもって平安京城外の遺跡で出土するのかについて検討したい。

まず、吹田市内にある高浜遺跡では、吉志部瓦窯の軒丸瓦や平瓦が認められている。吹田市史では、この高浜遺跡の瓦について、高浜という地が、三国川と淀川との間の運河の開削によって、平安初期に水上交通の拠点として歴史的位置が高まる時期であり、平安京への瓦の集積所・積み出し港としての可能性を指摘している〔吹田市史編さん委員会 1981: 400-401〕。また、高浜遺跡の西方約 200m の地点にある都呂須遺跡の瓦（平瓦）についても、瓦の集積所・積み出し港の可能性が考えられており、さらに寺院の存在の可能性も指摘されている〔吹田市教育委員会 1989: 63〕。

古代において、瓦葺きの建物が宮都や官衙、寺院等の一部施設に限られていたことを考えると、この 2 遺跡において古代寺院が存在した可能性は十分考えられる。しかし、瓦の存在からそこに寺院存在の可能性は指摘できるが、どうしてそこに吉志部瓦窯の瓦が存在するのかという点については、現時点で説明し得る資料はみあたらない。

また、これらの瓦が平安京への積み出しを物語るという可能性については、当時、高浜の地が三国川水運の中継地の一つとして発展したこと〔吹田市史編さん委員会 1990: 289-296〕を考えると、そこに吉志部瓦窯の瓦が存在するという点について理解を得やすい説明となる。しかし、そこにはもう少し詰めなければならない問題もある。

それは、吉志部瓦窯の瓦が水運によって平安京に運ばれたという前提での話となるが、高浜遺跡・都呂須遺跡は吉志部瓦窯跡から南西約 2.7km の地点にある。しかし、吉志部瓦窯跡から三国川までは南南東に進めば直線距離で約 2km であり、しかもそこは高浜の地から約 2km 上流の地点となる。この点からすると、平安京に大量の瓦を運搬するにあたって、果たして陸上運搬距離が長く、しかも川をより長く遡る形となる高浜の地まで行く必要はあるのだろうかという疑問が生じる。もちろん、高浜が港湾として施設が整っており管理面でそこでしか荷積みができなかったという可能性や、大量の瓦を運搬できる道が高浜に向かうものしかなかったということを考えられる。しかし、輸送にかかる手間と宮都への瓦の供給ということを考えると、瓦窯により近い場所に積み出し地があったという可能性も考慮する必要があろう。

そして、この点に関連し得る資料として次のものがある。大阪府文化財調査研究センターが吹田操車場遺跡で行った発掘調査では、七尾瓦窯の瓦とともに吉志部瓦窯の平瓦が検出されており、報告書では、それらは瓦工人の屋敷に利用されたものか、または淀川への搬出路にあたるものか、あるいは寺院の存在を示すものかという推測を行っている〔大阪府文化財調査研究センター 1999: 50〕。

ここでは3つの可能性が示されているが、瓦工人の屋敷という点に関しては、ここで瓦工人という特定の集団を指し示すのには資料的根拠がほとんどなく、現時点では瓦の搬出路および寺院存在という2つの可能性を考えるのが妥当といえよう。そして、大阪府文化財調査研究センターの調査では、七尾瓦窯と吉志部瓦窯だけの瓦に限らず、白鳳から鎌倉時代にかけての瓦が出土しており、遺跡包蔵地内のどこかに寺院が存在した可能性は高いものと考えられる。しかし、寺院との関係においてどうして吉志部瓦窯の瓦がそこに存在するのかという点については、それを説明し得る資料は見出し難い。この点で、もう1つの可能性である瓦の搬出路という推測は、吹田操車場遺跡が吉志部瓦窯跡の南方約1kmの地点にあり、吉志部瓦窯と三国川を最短距離で結んだ場合のちょうど中間地点にあたること、そして、先述の高浜での瓦積み出しに関わる問題とも勘案すると、それほど可能性が低いとはいえないであろう。

ただし、吹田操車場遺跡を通って三国川に至る運搬ルートがあったとしても、どうして吹田操車場遺跡において吉志部瓦窯の瓦が出土したのかという理由を明確にすることは難しい。例えば、運搬途上で破損した瓦が廃棄されたものであるとか、三国川への運搬中継に関わる施設が存在した可能性などを上げることができるが、現時点では想像でしかない。

このように、高浜遺跡と都呂須遺跡、そして吹田操車場遺跡出土の吉志部瓦窯の瓦に関しては、寺院の存在と瓦の運搬という面での推測が可能である。しかし、寺院との関係でとらえようとする場合には、そこに吉志部瓦窯の瓦が存在する理由を説明する必要があり、また、運搬面でとらえようとする場合においても、先述したとおりいくつかの問題がある。また、高浜遺跡と都呂須遺跡を瓦の積み出し地であるという可能性でみる場合には、その搬出先としては平安京だけでなく、他地域への搬出の可能性をも考慮しておく必要があろう。

さて、吹田市内では、垂水南遺跡においても吉志部瓦窯の軒平瓦が1点出土している。垂水南遺跡は高浜より西へ約2kmの地点にあり、この地点での出土は、位置的にみて平安京への積み出しとの関係は薄いものといえよう。また、当時この付近に官衙施設が存在したという記録はなく、おそらく寺院存在の可能性が有力ではないかと思われる<sup>2)</sup>。そして、垂水南遺跡では、812年に桓武天皇の皇女布施内親王の遺領を東寺に施入して成立した垂水荘に関わるものとみられる、「垂庄」や「中庄」などと墨書きされた平安時代初期の土器が出土している。垂水荘は、鎌倉時代には垂水南遺跡から約600m西側に展開していたことが知られており、垂水南遺跡での墨書き土器は垂水荘成立段階に関わるものではないかと考えられている。そして、吉志部瓦窯の瓦の存在は、桓武天皇の皇女という繋がりから成立前後の垂水荘との関連をも想起させる。現在のところ、このことを直接裏付ける資料はないが、吉志部瓦窯の瓦の存在の背景に、平安京を建都した桓武天皇の繋がりを無視することはできないであろう。そして、この桓武天皇との関係により、吉志部瓦窯の瓦が搬入されたのではないかと考えられている遺跡がほかにもある。

枚方市にある百済寺跡は、奈良時代後期に百済王氏の氏寺として建立されたと考えられているが、ここでは軒丸瓦をはじめとして相当数の吉志部瓦窯の瓦が搬入されているようである。

そして、その背景には桓武天皇との関係が考えられている。それは、桓武天皇が枚方の地で多く遊獵したこと、そして百濟王氏出自の百濟王明信との親密な関係にあったということである〔吹田市立博物館 2001：10〕。すなわち、桓武天皇の母親が高野新笠という百濟系氏族の出自であり、統日本紀延暦9年2月条に「百濟王等者朕之外戚也」とあるように、桓武天皇が百濟王氏をはじめとする百濟系氏族を優遇し、それが百濟寺での吉志部瓦窯の瓦の使用に繋がったのではないかと考えられているのである<sup>3)</sup>。おそらく、その可能性は高いであろう。

このように、垂水南遺跡と百濟寺跡については、桓武天皇との関係により吉志部瓦窯の瓦出土の説明が可能といえるが、他の遺跡についてはどうであろうか。

大山崎町の堀尻遺跡では、大山崎町教育委員会が大山崎町第24次調査として実施した発掘調査において掘立柱建物跡や井戸等が検出され、井戸SE2419の掘方から吉志部瓦窯の軒平瓦が出土している。この井戸掘方からは他に平城宮式軒丸瓦や難波宮式軒丸瓦が出土しており、それらはこの井戸を造営する際に投棄されたものとみられている。そして、堀尻遺跡の南方には、山崎津や山崎駅、山崎院などの平安時代の重要施設が集まる大山崎遺跡群とよばれる地域があることから、吉志部をはじめとする瓦は大山崎遺跡群から搬入されたものであり、ここでの資料は、大山崎遺跡群とのつながりを有し、公的施設との関係を想定できる階層にともなうものであろうと考えられている〔大山崎町教育委員会 1998〕。また、大山崎町では、ほかに山城国府跡と白味才遺跡とで吉志部瓦窯の軒平瓦が出土している。山城国府跡はいうまでもなく公的な施設であるが、白味才遺跡についても平安宮所用瓦の存在から公的な性格を有するものであろうと考えられている〔大山崎町教育委員会 2002〕。

このように、大山崎町における場合、桓武天皇との個的な繋がりというよりは、広い意味での公的性という側面において、吉志部瓦窯をはじめとする瓦の存在の理由を求めようとしている。そして、公的性という側面でみた場合、長岡京での出土の説明も可能となる。しかし、長岡京における吉志部瓦窯の瓦の出土については次の問題点が指摘されている。それは、旧都における吉志部瓦窯の瓦の出土により、吉志部瓦窯の開設の時期を平安遷都より遡らせるべきか、あるいは平安遷都後も旧都において瓦を必要とする建物を新たに建造されたのかという問題である〔近藤 1984〕。そして、最近の発掘調査では、吉志部瓦窯の瓦をはじめ、長岡京廢都後から9世紀中頃にかけて何らかの公的施設が存在したことを示す調査成果が得られており〔京都府埋蔵文化財調査研究センター1997〕、平安遷都後も旧都内に瓦葺きの建物が建てられていた可能性は高いようである。しかし、吉志部瓦窯は長岡京造営用に新たに開かれたが、長岡京が短命に終わったため、結果的に平安京への最初の供給瓦となったのではないかと、吉志部瓦窯の開始を長岡京造営に契機を求めようとする意見もあり〔山中 1991、2001：215-218〕、吉志部瓦窯の開始時期の問題については更なる検討が必要となる。

さて、以上は、桓武天皇との関係、あるいは公的性という側面から吉志部瓦窯の瓦の出土を説明し得る可能性をもつ遺跡であるが、それでは若江遺跡と新庄遺跡についてはどうであろうか。

まず、若江遺跡であるが、ここで出土した吉志部瓦窯の瓦（軒丸瓦・軒平瓦）は、白鳳時代に創建され中世にまで存続した若江寺に関連するものと考えられている。出土瓦から寺の推移をまとめた福永〔1989、1993：146-147〕によると、創建時期（白鳳時代前期）である若江寺の瓦には、素弁蓮華文軒丸瓦・川原寺式軒丸瓦・重弧文軒丸瓦があり、川原寺式瓦の存在については、若江郡内に川原寺の寺領があったことに関係するのであろうとしている。そして、白鳳時代後期では藤原宮式の瓦が多くなり、これには若江郡衙の設置が関係し、この時期に若江寺が郡寺として完成したのであろうとする。奈良時代の瓦には、平城京・恭仁京と同範の軒平瓦があり、特に恭仁京式文字瓦の存在から巨摩氏との繋がりを指摘し、若江寺が中央政権と結びついていたとしている。そして、平安時代前期になども吉志部瓦窯の瓦がみられることから中央と強く結びついていたとしている。

このように、福永の見解は、若江遺跡（若江寺）における吉志部瓦窯の瓦の存在を中央政権との結びつきによって説明しようとするものであるが、その前代においては、渡来系氏族である巨摩氏（猶氏）との関係を通して中央との繋がりの可能性を上げている。果たして、吉志部瓦窯段階の平安時代前期における中央との繋がりがどのような関係によるものなのか、前代と同じく巨摩氏との関係でとらえ得るものなのかという問題もあるが、若江郡という地域からみると次のような点からの推測もなし得る。

若江郡には、若江寺のほか、白鳳時代に創建されたとみられる寺院として東郷廃寺と西郡廃寺が知られている。駒井〔2000：217-235〕によると、若江寺から南へ約3kmの地点にある東郷廃寺出土の瓦から、東郷廃寺は、創建当時（7世紀中葉）原山廃寺式軒丸瓦分布圏に包括された氏寺であったが、7世紀後半には、百濟王氏ゆかりの摂津堂ヶ芝廃寺・百濟尼寺出土のものに似た重弁蓮華文軒丸瓦を用いる。また一方、7世紀後半から8世紀にかけて紀寺式軒丸瓦・重圓文軒丸瓦・青谷式軒丸瓦があり、中央あるいは国衙との結びつきがより密接になる。そして同時に、8世紀中葉から10世紀代にかけて讃岐国分寺所用瓦が用いられたという。そして、讃岐国分寺の瓦が東郷廃寺にもたらされた背景に、8世紀後半に百濟王敬福や多治比土作が讃岐国守となつたことなどを上げている。

この駒井の見解からすると、東郷廃寺出土の瓦をめぐっては、ある段階で百濟王氏と何らかの関係があったことを窺わせる。そして、百濟王氏との関係という点で、同じ若江郡内にある若江寺の吉志部瓦窯の瓦の存在をにわかに思い起してしまう。しかし、駒井が指摘するように、東郷廃寺近隣に百濟王敬福との関わりを示すような氏族の存在は文献史料において認められない。さらに、当然のことながら東郷廃寺とは異なる寺である若江寺を百濟王氏との関係に結びつけることは短絡的すぎるであろう。しかしながら、若江寺が所在する若江郡錦織郷には、地名からもわかるようにかつて百濟系の氏族である錦織（錦部）連が居住していたことが知られている。また、若江寺創建の氏族として若江氏（若江造）が推測されているが〔福永1989〕、その祖には、後漢皇帝の苗裔とされ奈率という百濟の官位をもつ張安力という人物が新撰姓氏錄にみられ、張安力が百濟から渡來した人であろうということが考えられている〔佐伯1983：

157-159]。このような点からも、若江寺の吉志部瓦窯の瓦の存在を百濟系氏族との関係からとらえようとする可能性は全く否定すべきものではなく、今後この問題を検討していく上での1つの視点となるかもしれない。

次に、茨木市の新庄遺跡についてであるが、ここでは吉志部瓦窯の軒丸瓦が出土している。新庄遺跡に関する正報告書は未刊であり、遺跡における吉志部瓦窯の瓦の位置づけ等についての詳細は現時点ではわからない。しかし、概要報告書が刊行されており、そこでは当該期に当たる平安時代前期から後期にかけての遺構群について、共伴遺物として多量の綠釉陶器や輸入陶磁器・特殊金具など一般集落では説明しにくいものがあることから、当時箕面から吹田・茨木にかけて展開していた垂水東牧との関連を検討する必要があろうとしている[大阪府教育委員会 1996]。

新庄遺跡の詳細については正報告書の刊行を待ちたいが、概報をみる限り、平安時代の遺物に特異なものがあることがわかり、吉志部瓦窯の瓦についてもその中の1つといえよう。そして、これが概報のいう垂水東牧と関係するものなのか、それとも瓦という遺物からは寺院の存在の可能性が考えられる。しかし、吉志部瓦窯の瓦が新庄遺跡に存在する理由については、現時点でこれ以上の議論を進める材料はなく、今後の調査の進展に期待するほかない。

以上、平安京城外での吉志部瓦窯の瓦を出土する遺跡を概観してきた。その結果、垂水南遺跡や百濟寺跡については桓武天皇を通じての関係から、また大山崎町における遺跡や長岡京についても公的性という側面からの説明が可能であるとした。また、明確な資料はないものの、若江遺跡についても桓武天皇と関係が深かった百濟系氏族との関連の可能性もあり得るとした。しかし、高浜遺跡・都呂須遺跡・吹田操車場遺跡については、寺院存在の可能性と平安京への瓦の運搬という面での可能性があるとしたが、寺院との関係においては吉志部瓦窯の瓦の存在理由が明確でないこと、そして運搬面についても詰めるべき問題があるとした。さらに、新庄遺跡に関しても現時点ではその存在理由を明確には説明し難かった。

このように、平安京城外における吉志部瓦窯の瓦の存在理由については判然としない点も多く、更なる検討をするものである。しかし、現時点では資料の限りもあり、今後の議論の進展のためにも、新たな資料の増加を期待するしかない。また、ここでは吉志部瓦窯産の瓦だけに限ってみたが、今後こうした問題を明らかにするには、他の瓦窯で生産された瓦の動向についてもとらえ、それらを総合的に検討していく必要があろう。

#### (注)

- 1) 近藤〔1984〕では、平城京東三坊大路側溝からも吉志部瓦窯の瓦が出土しているとあるが、筆者はその実態について確認し得ていないので、ここでは取り上げなかった。
- 2) 『行基年譜』天平十三年記に「垂水布施屋 在豊嶋郡垂水里」とあり、垂水南遺跡が所在する垂水の地に、行基によって布施屋が設けられたことが知られる。果たして 741 年頃に存在した布施屋が吉志部瓦窯が操業された約 50 年の後まで存続していたのかという点を含め、吉志部瓦窯との関係などはまったく不明であるが、奈良時代に布施屋が垂水の地に存在したという事実は、古代の垂水南遺跡を考える上でも重要といえ、ここに注記しておく。

なお、吹田市史では、その所在地を吉志部瓦窯の瓦出土地点の北方約700mの地点にある垂水神社付近に推定している【吹田市史編さん委員会 1990 : 268-289】。

3) 近藤【1985】は、吉志部瓦窯および枚方市の牧野瓦窯跡（坂瓦窯跡）の開窯の背後に、百濟寺跡での吉志部瓦窯の瓦の出土なども上げつつ、桓武天皇と関係の深い百濟王氏等の存在を指摘している。

#### (参考文献)

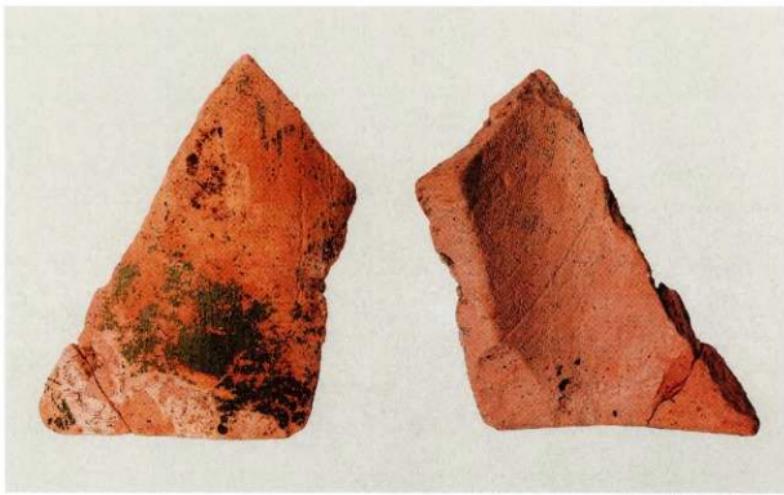
- 大阪府教育委員会 1996 :『新庄遺跡 府立茨木高等学校建替えに伴う発掘調査概要』大阪府教育委員会。  
大阪府文化財調査研究センター 1999 :『吹田操車場遺跡』大阪府文化財調査研究センター。  
大山崎町教育委員会 1998 :『大山崎町埋蔵文化財調査報告書第16集』大山崎町教育委員会。  
大山崎町教育委員会 2002 :『大山崎町埋蔵文化財調査報告書第23集』大山崎町教育委員会。  
京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997 :『京都府遺跡調査概報第78冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター。  
駒井正明 2000 :『第V章遺構・遺物の検討』(大阪府文化財調査研究センター『八尾市若草町所在 小阪合遺跡』) 大阪府文化財調査研究センター。  
近藤喬一 1984 :「瓦の生産と流通」(永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史第4巻 窯業』) 日本評論社。  
近藤喬一 1985 :『瓦からみた平安京』教育社。  
佐伯有清 1983 :『新撰姓氏錄の研究 考證篇第五』吉川弘文館。  
吹田市教育委員会 1989 :『文化財紀要2』吹田市教育委員会。  
吹田市史編さん委員会 1981 :『吹田市史第8巻』吹田市役所。  
吹田市史編さん委員会 1990 :『吹田市史第1巻』吹田市役所。  
吹田市立博物館 2001 :『平成13年度特別陳列 吹田市立博物館とその周辺』吹田市立博物館。  
福永信雄 1989 :『若江寺 若江城古瓦譜』若江城研究会発表資料。  
福永信雄 1993 :『若江遺跡第38次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会。  
山中章 1991 :「長岡京から平安京へ—都城造営にみる律令体制の変質」(町田章・鬼頭清明編『新版古代の日本第6巻 近畿II』) 角川書店。  
山中章 2001 :『長岡京研究序説』塙書房。

## 報告書抄録

書名(ふりがな)	しきんざんこうえんせいべにともなうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	紫金山公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書
副書名	吉志部瓦窯跡、他
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	賀納章雄・増田真木・花崎晶子
編集機関	吹田市教育委員会
所在地(〒)	564-0041
所在地(住所)	大阪府吹田市泉町1丁目3番40号
発行年月日	平成16(2004)年3月31日
所収遺跡名(ふりがな)	きしへがようせき、きしへ2・3ごうふん
所収遺跡名	吉志部瓦窯跡、吉志部2・3号墳
所在地(ふりがな)	すいたしきしへきた4ちょうめ1388ばん13、ほか
所在地	吹田市岸部北4丁目1388番13、他
世界測地系北緯	34°47'2"
世界測地系東経	135°31'53"
調査期間	19900213～19900331 19910222～19910330 19931115～19931224 20000724～20000829
調査面積	計1131.5m <sup>2</sup>
調査原因	都市計画公園(紫金山公園)整備に伴う確認調査等
種別	生産遺跡・古墳
主な時代	旧石器～縄文 古墳 平安 中世 近世
主な遺構	平安初：溝、土坑、柱穴、回転台跡、ピット 平安末：溝、柱穴、落込み、ピット 近世：土坑
主な遺物	石器・須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・奈良時代瓦・平安時代瓦
特記事項	吉志部瓦窯工房関連遺構の確認



第2次調査出土軒瓦



第4次調査出土緑釉瓦

図版 1  
調査地遠景



南東から



北から



T 1～T 6 調査地点近景（南西から）



T 1 (南西から)



T 5 (南東から)



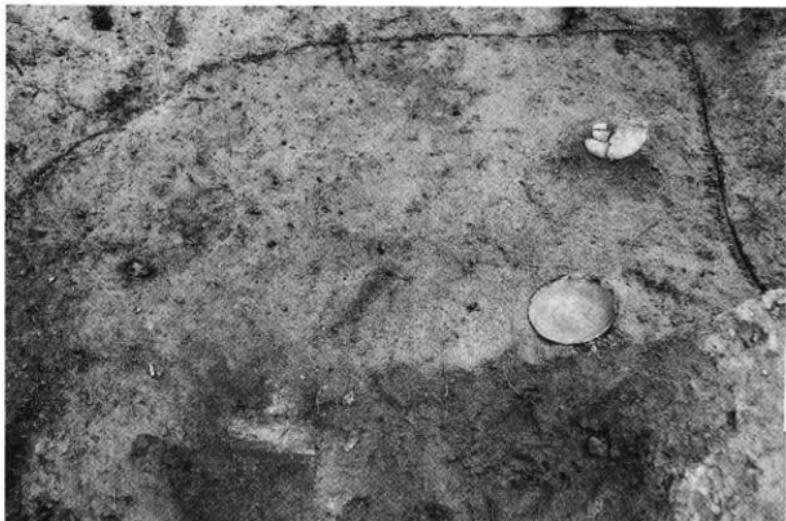
吉志部2号墳推定地全景（南東から）



SK03（南から）

図版 4

第1次調査  
(3)



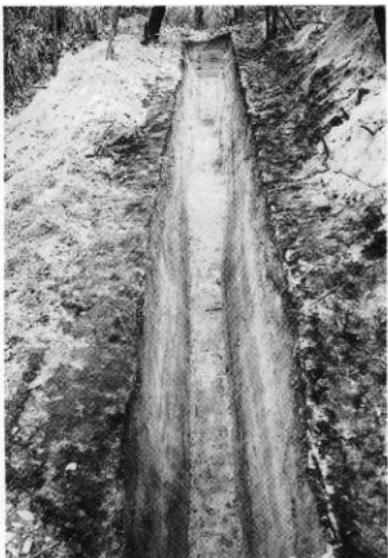
S K01 土師器皿出土状況（南西から）



S K01 (北東から)



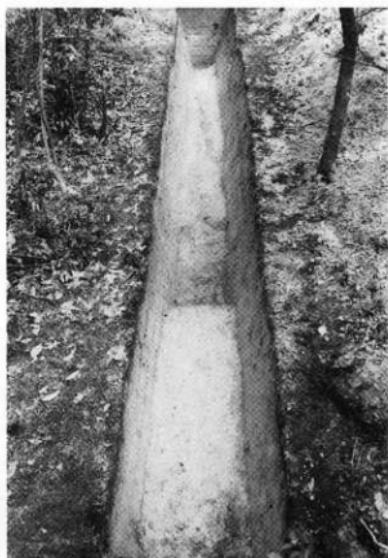
T 7 (南から)



T 12 (南から)



T 13 (南から)



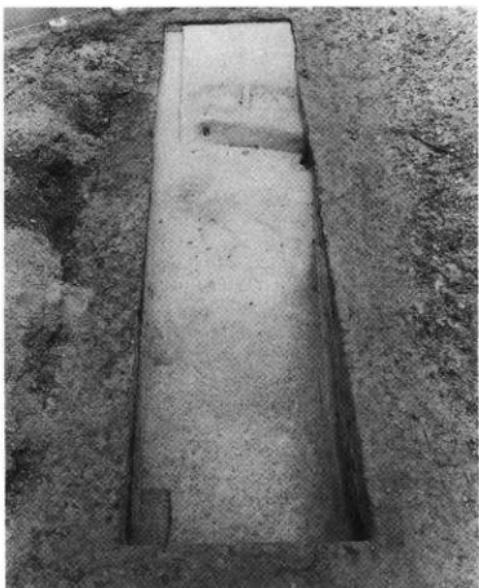
T 16 (北から)



T50 (南から)



T50 土師質土釜出土状況 (西から)



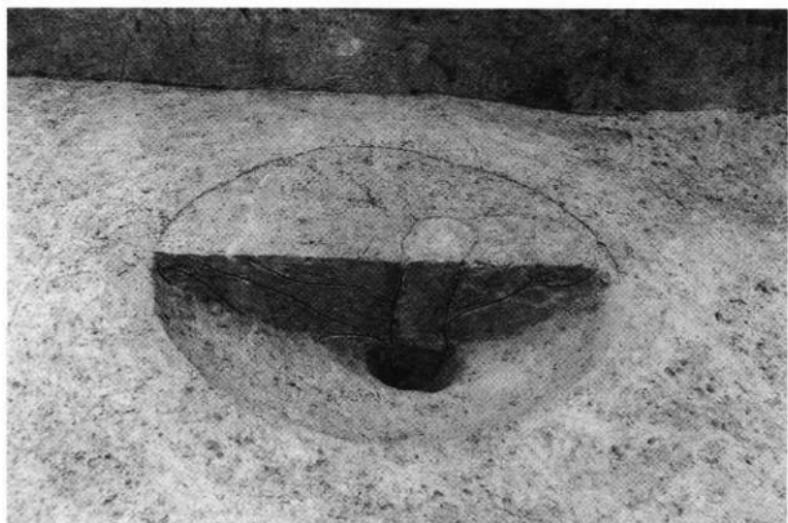
T 1 (南から)



T 2 (南から)



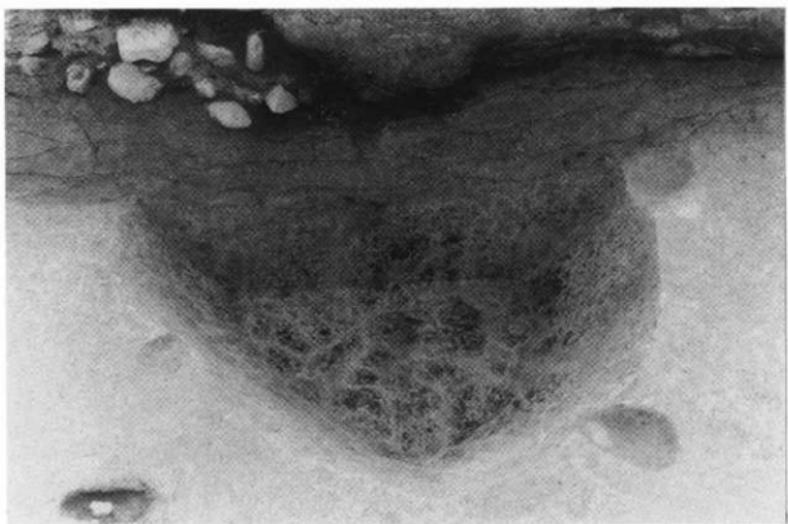
T 2 SK02 (南西から)



T 2 P01 (西から)



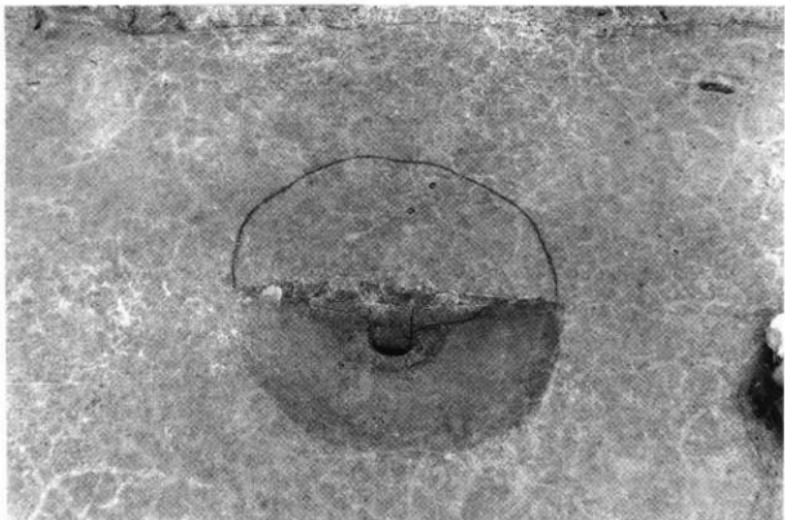
T 3 (南から)



T 3 SK04 (東から)

図版  
10

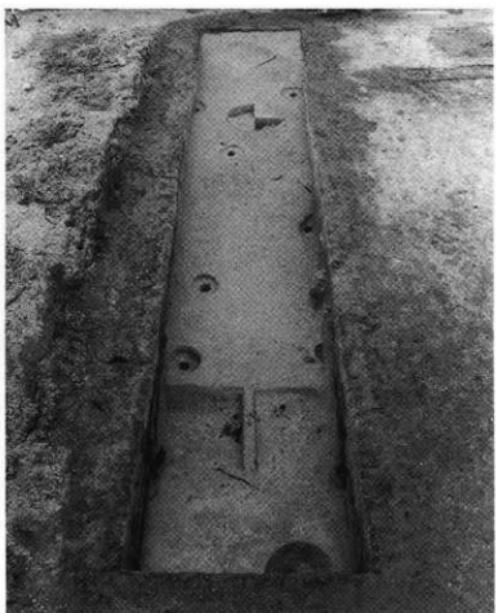
第2次調査  
(4)



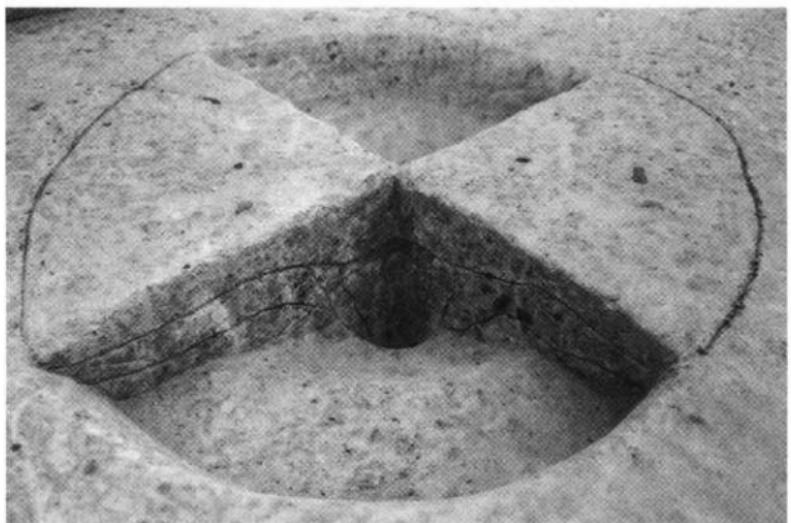
T 3 P 02 (西から)



T 3 瓦溜 (西から)



T 4 (南から)



T 4 P 03 (北西から)